

ゾンビになったけれど、
私は元気です

トクサン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

感染源となった男は怪物と成り果てた。

誰よりも早く感染し、誰よりも長く感染し続けた男は身体中をウイルスに侵されていったのだ。

怪物と成り果てた男はしかし一か月後に人間としての意識を取り戻し、何とか人として生きる道を模索する。

「私は悪いゾンビじゃないよ、ぶるぶる」

ただし二メートル超えの巨人で眼球は三つ、腕は六本である。

目次

覚醒の調	1
姉妹	13
人殺し	24
人肌	37
ジョン・ドウ	48
人に焦がれ続けた、 厄災の獣	60
人とコミュニティ	81
見慣れた影	104
迷彩	116
非人間	153

覚醒の調

世界はゾンビに支配された。

恐ろしく簡略化した言葉で語ればそういう事になる。よくあるアニメやドラマ、漫画の題材とえばそうなるが実際になってみると案外シャレにならない。世界規模の災害の様なものだ、感染爆発なんて目じやない。多くの人間が逃げ惑い、死んで、死んだまま動く屍になった。

無論私も即その仲間入りだ、私はヒーローじゃない。そんなゴリゴリのサバイバル世界で生き残れる程のメンタルとフィジカルを持っていなかった。

問題なのは街中で食われたとか単なる被害者ではなかった事。

馬鹿馬鹿しい話だが——ゾンビウイルスを作った人間の一人、それが私なのだ。

このゾンビウイルスはDNAウイルスの一種である、コイツは種特異性が高く主に人間に感染する。元々は脊椎動物に感染する類のものだったが改良によって感染種に指向性を持たせた。コイツは生物兵器として運用する為に研究したものだ、人間にしか感染しない為環境破壊の心配もなく生態系への影響もない。完全に人を殺す為だけに創られたウイルス、弾頭に詰め込んで発射、着弾すれば無色透明で拡散した事にすら

気付かない優秀な兵器だ。

奇しくも人は自らの手で作ったウイルスによってその数を大きく減らした。

核多角体病ウイルスを参考に何度か内部改良を加えたモノだったが——今では大分記憶も薄れ、その構造さえ忘れてしまっている。これも感染の影響だろう、何せ私は【最初に感染した人間】だから、大分脳がやられているのかもしれない。

だが最初に言っておくが私は悪くない、このウイルスの管理は徹底していた。だと言うのにどこかの馬鹿がウイルスの入っていたケースを不用意に開けやがったのだ。外部の人間か内部の人間か、アラートが鳴り響いて危険を知らせた時にはもう遅かった。何か別のケースと勘違いしたのかもしれない、けれど今では確かめようもない。兎に角拡散したウイルスは研究室内の私達の体に入り込み、気付けば世界全土に感染は広がっていた。

研究室には万が一何かしらのウイルスが広まっても密封し外に漏れだす事を防ぐ機能が備わっていたが、中の人間が無理矢理押し開けたのかもしれない。もし内部の人間が外に助けを求めたらどうだろう？ IFなど幾らでも想像が出来た。

私が意識を取り戻したのは感染が始まってから凡そ一ヶ月後——ゾンビウイルスは未だ完成には至っていない、本来はウイルスに更に手を加え着弾した地点から大きく拡散しない様に改良するつもりだったのだ。しかし未完成のまま拡散してしまったゾン

ウイルスは恐ろしいまでの感染力を誇っている。

このゾンビウイルスは感染者が死亡した場合、凡そ数日掛けて感染者の体を「苗床」に作り替える。そこからゾンビウイルスを放出する体液を分泌させ問答無用で感染を広める。肌に触れただけでも怪しい、粘液に触れれば一発で感染だ。更に悪い事にコイツは苗床と成つても空気感染も起こす、確率は半々だが正に最悪のウイルスと言つて良いだろう。因みに感染した人間は狂暴性を増し周囲の人間を問答無用で襲う、傷口に唾液でも入れれば感染確定だ、故に噛まれた場合は手遅れとなる。これを戦争で利用すれば自国の兵を疲弊させる事無く同士討ちを狙える理想的な兵器だった。

さて、本来ならば言つた通りコイツに感染すれば理性の枷が外れ思考など出来る筈もない。生きている限り暴れ続け、人間を探して彷徨い、力尽きれば苗床になる運命。しかしどういふ訳か私は——意識を取り戻した。

最初は困惑した、困惑したまま慌てて周囲を見渡し愕然とした。周りには苗床と成り果てたゾンビ共がゴロゴロ転がっていたのだから。私は訳の分からない事を叫びながら研究室を飛び出し、そのまま外の世界に躍り出た。セキュリティームは既に壊滅しておりカードキー認証などは全て死んでいた。施設内を走り抜けエントランスホールに出る、其処でも苗床と成り果てた研究員やスタッフがゴロゴロ存在し、私は息を切らしながら外を求めぬ。

途中、割れた自動ドアのガラスに映った自分の姿を見て言葉を失くした。其処には真つ白い髪と真つ白い肌をした男が映っていた。誰だこれかと思つた、顔の造形など人間離れしている。まるで人形だ、私の顔じゃない。その顔からは生気を欠片も感じられなかった。

「誰、誰だお前は……」

震えた声で呟く、鏡に写つた人物が呟く。それは紛れもなく私だった、けれど私自身が知っている。こいつは私じゃない、かと言つて研究所に居た誰かでも無い。確実にウイルスが作り出した【新しい私】であつた。

見れば私が出来ていた衣服はそのままであつた、他の感染者は一部が肥大化したり皮膚がぐずぐずに崩れていたりしたのに、私の衣服は欠片も破損せず肌も寧ろ若返つていくかのよう。私は訳が分からなくなり、兎に角家に帰りたくなつた。だから自動ドアを椅子で破壊し街へ降りて、放置され埃を被つていた愛車に乗り家に帰つたのだ。道中私を見つけたゾンビ共は恐ろしい叫び声を上げて襲つて来た。私はそれを轢き殺しながら必死に運転した、もう倫理観や道徳なんてものは吹き飛んでいた。

ただ恐ろしさに突き動かされていたのだ。

それが——一カ月前の話。

家に到着した私はひたすら引きこもつていた。不思議な事にこの体は飯や水を欲す

る事無く、また排泄などの行為も行う必要がなかった。一カ月あの場所で倒れ伏していたのに餓死していないのだから当然だろう、暫く家に引きこもっていると少しだけ考える余裕が出て来た。

私の体に関してはゾンビウイルスが作り替えたというのが正しいだろう。恐らく顔だけじゃない、臓器や体細胞全て、DNAも全て弄練り回されている。きっと脳味噌も、自意識が残っている事が幸いだが「これが私の思考なのかも定かではない」、私の人格を模した他の誰かの可能性だつてあつた。つまりその場合、私自身は死んでいる事になる。

つまり「スワンプマン」だ。

「私は私なのか？」

もう何度となく繰り返した自問自答、答えはいつも同じ。「私は私だ」、それ以上でも以下でも無い。けれどこの体は既に人間のソレから逸脱している。私が手を前に突き出し力を籠めると、何か管の様なものが皮膚から生えだし腕を覆い出した。そして全身をソレで覆い尽くし私は巨人となる。

目さえ覆つた私は何も見えない暗闇で眼球を動かす、そうすると額の辺りから新しい眼球が三つ生え出しぎよろりと周囲を見回した。

体組織の改造、つまり強制的な進化——或は退化。

私の体には二つの変化形態があった。先程の人間の形、もしもう一つがコレだ。二メートルを超える体に丸太の様な両腕。人間であった頃の雪の様な肌とは異なる赤黒い肌、それに三つ目。暫くすると背中中の筋繊維が蠢き、追加で四本の細い腕が生え出て来る。コレが今の私に与えられた変化形態、憶測だが私の中でゾンビウイルスが進化を遂げたのだろう。なぜこのような形になったのか私には分からない、この巨軀は街に居たゾンビとは比較にならない程強靱だった。

感染した日数が関係しているのかもしれない、あの研究所の中で生き残っていた——正確に言えば私は死んでいるのだろうが——人間は私一人、そしてもしゾンビ化したまま生き続ければ巨大なゾンビとして進化するのではないかと。

記憶を虫食いにされた今の私はこの程度の推測しか出来ない、しかし強ち間違いでもないのだろうかという気持ちがあった。

何故私はゾンビ化したというのに意識がある？ 抗体が存在したのか？ 私だけがウイルスに適合した？ 分からなかった、何せワクチンはまだ完成していなかったから。ウイルスに適合し得る肉体など想像もつかなかった。これではまるで強化人間だ。

私は暫くゾンビ姿のまま頭を抱え続けた。二メートルを超える巨軀で部屋の隅に這い蹲ると言うのは実にシニールだっただろう。そうして精神を落ち着けた私は人間に戻りテーブルの上に散乱していた水や食料を見る。

人間の習慣というのは恐ろしい、飯を食わなくても良い、水を飲まなくても良い、けれど腹が空かなくとも、喉が渴かなくとも「食べる」という行為には一定の精神を落ち着ける効果があつた。生前為していた行為が『私は生きて、今飯を食っている』という感情となつて心を慰めた。

だから私はこの一カ月、まるで人である事に拘るかのように飯を食つて、水を飲んだ。けれどももう家には食料も水も無い。それが無くなつた時、私は深い絶望の中に叩き落とされた。

「水と、食料を……買い出しにいかなくちゃ」

私はフラフラと立ち上がつて外へと出かける準備をする。もう金銭で物品を買い揃える時代は終わったというのに、己の作り出したウィルスが世界を破壊し、そして自分もそのゾンビに成り下がつたという事実が頑なに私の世界観を守ろうとした。

フラフラと覚束ない足取りで外に出た私は財布を片手に街を歩く。車は研究所から走つて家に着くまでにボロボロになって、動かなくなつた。今では家の前の道路に乗り捨てられていてフロントには赤黒い血がべつたりと付着しベコリとエンジンまで凹んでいる。恐らくもう走り出す事はないだろう、愛車を失つた悲しさはなかつた、そんな感情はもう擦り切れていたので。

ゾンビ形態の私は幸いな事に他のゾンビから襲われる心配がない。その外見が余り

にも敵ついからか、それとも人間としての体を完全に覆っているからなのかは分からない。恐らくこの腕で殴り付けければ普通のゾンビなど一瞬で粉々に出来るだろう。その確信が私にはあった、けれど私は快樂殺人者でもなければ好んで暴力を奮う人間でもない。私は道行くゾンビの合間を縫いながら付近のスーパーマーケットに足を進めた。

☆

スーパーマーケットに辿り着いた私は巨軀を僅かに屈めながら自動ドアを潜る。そして大分荒らされた陳列棚やレジを見て暫く途方に暮れた。まるで世紀末の様な状態の街を見て理解すべきだった、そりやそうだろう、人間は食い物と飲物がなければ生きて行けない。ある意味こうなる事は必然の事の様に思えた。

私は手に持っていた財布を強く握り締め、グシャリと言う音に気付いて慌てて手を緩める。万力の様な力で握り締めた財布はペシャンコになっていて、中のカードなど割れてしまっていた。私は泣きそうになりながらも足を進め陳列棚から僅かなジャンクフードや水を探し出す。この際飯でなくとも良かった、兎に角食えるものと飲める物さえあれば良かった。何か食い物を口に入れて安心したかったのだ。

その時だ、ガタン という音が耳に届いたのは。

私が音に気付いて素早く背後を振り向けばゾンビ——いや、人間がいた。

「——あ、あ……………」

小さな腕で幾つかのビスケット箱を抱え、私を見上げて蒼褪める小さな少女。中学生位だろうか、全身を震わせてビクビクと怯えている。その視線は真っ直ぐ私に向いていた。今にもへたり込みそうな具合だが膝を笑わせながら必死に立っている。服装は学生服で少し汚れていた。

人間だ、人間だ、生きている人間だ！

私は無性に嬉しくなった、何せこの一カ月ゾンビばかり見ていたから。私の作り出したウィルスでこの街にはとつくに人が居なくなっているものだとばかり思っていた。だから私は自分の今の姿など忘れ少女の元に駆け出した。

二メートルを優に超える巨軀で喜びを表し、タイルを踏み砕いて地響きを鳴らしながら加速した。ゾンビ形態である私の肉体は人間の限界を簡単に超える事が出来る、風のように加速した私の体は少女の目の前で停止し少女を三つの眼球で見下ろした。

少女にとっては悪夢のような光景だろう。

二メートルを超えるゾンビが凄まじい速度で接近して来たと思ったら、目の前で急停止し六本の腕を振り上げる。私はただ声の代わりに腕で喜びを表現しただけだったが、少女にとっては正に取って食われる数秒前の様に見えた。

「あ、あああ、あああああああッ！」

少女は持つていたビスケットの箱を放り出し、その場に尻餅を突く。そしてずるずると後ろに後退りながら涙を零し、いやいやと首を振った。その表情は悲惨の一言、私は蒼褪め涙を零し始めた少女を目撃し漸く自分の今の姿を自覚した。

そうだ、私は彼女にとって他の有象無象と同じ——いや、それ以上に恐ろしい存在なのだ。振り上げた六本の腕、自分を見下ろす三つ目は恐怖の象徴。私は突然自分が惨めな存在の様に思えた。

人間になれば誤解は解けるだろうか？ 私はそう思ったけれどすぐに考えを改めた。こんな巨大なゾンビが突然人間が出て来たって扱いは変わらない。ゾンビはゾンビ、化け物は化け物だ。

私は振り上げた腕を力なく下ろし、ただ茫然と泣き喚き体を震わせる少女を眺め続けた。少女は恐怖の余りか失禁してしまい、しゆるしゆると黄色の液体がタイルに広がっていく。それを気にする余裕は彼女には無い、私はどうする事も出来なかった。ただ悲しかった、「お前はもう人間じゃないんだぞ」と真実を突き付けられたような気分だった。

「小苗ッ！」

叫び声が聞こえ、陳列棚の影から少しだけ大人びた少女が飛び出す。恐らく姉か何か

だろう、彼女も制服を身に纏っていて黒い髪を一つに纏めた高校生くらいの子だった。彼女は小苗と呼ばれた少女と私の間に飛び出し、それから私の方をキツと睨めつけ——ギョつとした。

その風貌が余りにも恐ろしかったからだだろう。普通のゾンビとは違う、大き過ぎる体に六本の腕、そして三つの目。明らかに他と違う、肥大化した筋肉の塊、或は本当の「化け物」。

半ばで折れたモップを手に勇んで飛び出した少女であつたが私を前にして膝が震え出す。その巨大な腕で殴り付けられれば細い彼女の体など簡単に折れ曲がってしまうだろう。けれど小苗と呼ばれた少女を絶対を守るといふ意志は瞳から伝わって来て——私はもつと悲しくなつた。

「つ、う、あ、ううう……！」

恐怖から涙が流れだす、けれど折れたモップを突き出した私を威嚇する姉。小苗と呼ばれた少女は力なく首を横に振りながら彼女の足に縋っていた。「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」と叫びながら首を横に振る。その声から逃げて欲しいという切実な感情が伝わって来た。

やはり彼女は血の繋がった姉か何かなのだらう、それを見ていると私は居た堪れなくなつた。

腕を下ろしたまま私はゆっくりと後退り、悦び勇んで突撃した瞬間に手から零れ落ちた財布とジャンクフードを拾う。その様子を見ていた姉はどこか驚いた表情をしながらも手にしていたモツプを投げ捨て、未だ泣き喚く小苗を無理矢理立ち上がらせ私から急いで距離を取る。

私はそんな少女達を尻目にレジに行く。財布から千円札を摘まんで清算台にそっと置いた。

やはり私は化け物なのだ。

きつとその背からは哀愁が漂っていたに違いない。涙を流しながら私の背を見送る二人の少女を置いて、私はスーパーマーケットを後にした。この時ばかりは涙の流れない体に感謝した、きつとこの時私は泣いていただろう。

ただただ悲しかったから。

姉妹

家に帰ってからは戦利品のジャンクフードをぼりぼりと食べながらベッドの上に座ってぼうつとしていた。この人間形態があつて良かったと私は心から思う、ゾンビ形態には口が無いのだ、それでは水も飲めなければ飯も食えない。

私には家族がいた、正確に言えば妻——だろうか。

結婚はしていない、所謂事実婚という奴だった。私も二十代後半、科学や生物学に傾倒した変わり者だったと自負している。私にはそれしか出来なかつたのだ。そんな私を愛してくれた不器用な女性だった。半狂乱になつて帰宅した私は勿論彼女を探した。けれど荒れ果てた家に彼女の姿はなかつた、逃げ出したのか、避難所に向かつたのか、或は——そこから先の想像はしなかつた。

化け物になつた事はショックだ、何より彼女に拒絶されてしまうのではという想いがあつた。けれどその彼女が居ないのなら意味はない、特に先程のスーパーマーケットでの件は堪えた。私はまだ人間としての意識が残っていると自負している、けれど肉体はとつくにゾンビとして出来上がつてしまつていた。

「……………寂しいなア」

私は孤独感に包まれた。無性に誰かと話したかった。人は独りでは生きて行けないという言葉をつかの私は鼻で笑い飛ばしたが、その言葉が存外真実である事を今理解した。一カ月誰とも語らず、話さず、ただ時を過ごした。

一人きりの家はとも広く感じたし独り言も増えた気がする。兎に角私はコミュニケーションに飢えていた、「人として生きている実感を得たい」という衝動に駆られていたのだ。

二日、三日、たつた三袋のジャンクフードを少しづつ食べて自分の生を実感する。それでも排便はしないし排尿もしない、何より睡眠という欲求が生まれず状態は酷く時間の流れを遅くした。夜も一日中起きていなければならぬ、私は暫くベッドの上で蹲ったまま沈黙していた。けれど最後の水とジャンクフードを食べ終わった時、空っぽのそれを見つめながら「また調達に行かなければ」と口にした。

スーパーマーケットには足を運びたくなかった、けれど付近で一番大きな店は其処しかなかった。あの少女達と鉢合わせになりたくない——いや、嘘だ。例え畏れられようとしても私は彼女達との再会を本当は願っていた。

誰かと会いたい、心の中でそう思いながらもその感情を直視せず、一番大きな店だからという殻を被せて渋々向かっている体を装ったのだ。私は酷く嘘つきな人間だった。家から歩いて十分の距離、車なら五分も要らない。私はゾンビ形態の状態で歩き、

スーパーマーケットに向かった。人間状態で外を歩こうとは思わない、私は一度死んだ身だが二度も死ぬ気はなかった。人間の細腕では連中の枷が外れた怪力を振り解く事は出来ないだろう。

ゆつくりとした足取りでスーパーマーケットに入った私は財布片手に陳列棚から食料と水を漁る。食べるものなら何でも良い、ただし腐った生物はアウト。大抵は荒らされて空っぽの状態だったけれど稀に段ボールの下や奥の方に残っていたりする。入口から籠を持って来た私はそれらをせつせと放り込んだ。時折店の中を見渡してみるものの、私以外の存在の気配は欠片も無い。私はその事実にはホッとしながら同時に落ち込んだ。

それはそうだ、そんな運良く鉢合わせになることなど無い。何せ彼女達にとっては外に出る事そのものが命懸けなのだから。

そうして自分を慰め、食料調達を行っていると不意に。

「あッ——！」

と声があった。それは聞き間違いでなければ数日前に聞いた少女の声だ。

私がバツと振り向くと丁度今しがた店に入って来たのか、小苗と呼ばれた少女とその姉が青白い顔で此方を見ていた。

姉は自分が声を出してしまった瞬間しまったと顔を顰め、手で自分の口を塞ぐ。しか

し声は確かに私の鼓膜を刺激した。

「っ……………何で、あの時のデカイ奴……………!」

「お、お姉ちゃん……………」

早苗が姉の袖を引いて涙目で後退る。私と彼女達の間には大きな距離があった、そして彼女達の怯えた表情に再び私の胸がきゅっと締まる。どうせこの形態では話す事も出来ない、私は背筋を伸ばし彼女達の方を見ていた顔をふいつと逸らすと、そのままいそいそと食料集めに戻った。

「……………?」

二人は暫く身を硬くして私の動向を伺っていたものの、自分達に見向きもせず食品棚を漁る様子に訝し気な顔をする。数分程そうやって私を警戒していたが、一向に手出しをしない気配を感じ取り姉は小苗の肩を引っ張った。

「お、お姉ちゃん?」

「アイツ、襲つて来ない、今の内にご飯を集めよう」

「で、でも、怖いよ」

「大丈夫、それに此処が一番大きいから、ご飯も残っているって知っているでしょう?」

「うん……………」

小苗と呼ばれた少女は渋っていたが姉の説得で折れる。やはり彼女達も食料調達が

目的らしい。そして一度侵入を果たしたのに何の成果も無く戻る事は躊躇われたのだろう。姉と小苗の二人は身を低くしながら私から遠めの陳列棚を漁り始めた。

妹の小苗は少しでも早く済ませようと一心不乱に食品棚を漁っていたが、姉である少女はかなりの頻度で私の方に視線を飛ばす。警戒しているのだろう、もし彼女に尻尾があつたなら逆立っていたに違いない。

私が棚を移動する度にビクリと肩を震わせ、じつとこちらを凝視するのだから。

「あつ、お姉ちゃん、パンあつたよ」

「消費期限を見て、カビてたりしない？」

「えつと……多分、大丈夫かな」

「じゃありユックに詰めて」

「うん！」

少女達は順調に物資をリュックサックに詰めていく。そして私の方も食料や飲みそうな飲料を見つけては籠に放り込んだ。少女達の方を見て思ったのだが私もリュックサックか何か詰める物を持つてくるべきだった。

尤もこの籠ごと持ち帰った所で責める人間は誰一人居ないのだろうけど。

「……………何でアイツ籠なんて使っているのよ」

「お買い物しているみたいだね」

「——買い物」

小苗の言葉に姉が私の持つ財布に視線を注ぐ。そう言えば前来た時、千円札を律儀に置いていた。きつとそんな事を考えているに違いない。

私は彼女達の様子から遠回しな人間アピールで無害を証明できないかと画策した。未だに人間性の残っているゾンビと証明出来れば多少なりとも譲歩の姿勢を見せてくれるかもしれない。兎に角触れ合いたい、接点を持ちたい、私は食料そちのけでそんな事を考えていた。

「きつと変異種よ、アイツ等のやる事に意味なんて無いわ……」

しかし私の思惑はバツサリと斬り捨てられ、内心で肩を落とす。二十後半の良い大人が子どもの言葉に一喜一憂、悲しいものだ。私は籠を半分程食料で満たすとレジの方へと足を向けた。サツと立ち上がって小苗を守る様に壁となる姉、私はその脇を何でもない様に通り過ぎながら財布を開き、中から三千円取り出してレジに置く。

レジには私が数日前に置いたまま放置されている千円札があった。

最後にチラリと二人の少女を一瞥する。三つ目で凝視された少女達はびくりと肩を震わせて、しかし私は何をする訳でも無く背を向けスーパーマーケットを後にした。

悲しみはあった、けれど彼女達とまた逢えた事が嬉しかった。次も逢えるだろうか？彼女達にとっては恐怖以外の何物でもないだろうが、私にとっては唯一の人間性を確

かめられる希望だった。

☆

人が生きるには色々な物が必要だ。この世界になってから電気もガスも水道も止まった、当然だ、それを管理し動かす人間が居ないのだから。家に自家発電用の装置などない、故にソーラーパネルか発電機を探す必要があった。ついでに水もどうにかして確保したい。

私は食料を家に置いた後、少し遠くのホームセンターまで走り小型の発電機と浄水装置をかつぱらって来た。本当は金を置いて行きたかったが銀行はやっていないしATMも全て荒らされている、纏まった金を手に入れる手段がなかった。

気分は盗人だが誰も咎める人間が居ない為、私の倫理観が破壊されるのにそう時間は掛からなかった。そうでなくともゾンビを轢き殺しているのだ、窃盗よりも重い罪を犯していると思えばなんて事は無い。

私が車から抜き出したガソリンを発電機に入れ電源を押し込むと、エンジン音が鳴り響きパツと家の灯りが点いた。文明の利器を取り戻した瞬間である。発電機の音で周囲のゾンビ共が私の方を向いたが音の発生地人間がいな事を確かめると興味を

失ったようにうろろと散会した。

浄水器には雨水でも溜めて後で使おう。私は家の外にバケツやら諸々を並べると家の中に籠り、人間形態で今日買って来た食料にありついた。中には完全に消費期限が過ぎ味のおかしくなったものもあつたが取り敢えず食えれば満足だつた。

「次はいつ出掛けようか」

私はそう呟いてベッドの上で丸くなる。私はゾンビ形態であれば他から襲われない、それは大きなアドバンテージの様に思う。けれどこんな荒廃した世界で何をすれば良いのだろうか、どうすれば良いのだろうか。

私は人間で——同時にゾンビだつた。

飯も食べるし水も飲む、けれど根本的に私にはソレが必要ない。ある意味この状態に慣れた一年後、二年後、私はただ其処に居るだけの存在にならないか不安だつた。何せ生きるという事だけを考えるのなら私は横になつていてだけで良いのだ。それは正に無機物としての在り方だつた。だから必要なのだ、生レ^キゾ^ンデ^ートル^ルが。

取り敢えず、人間と話したい。

会話したい、触れあいたい。

当面の目標はソレだろう。

また逢えると良いな、あの二人に。私は一抹の罪悪感を覚えながらそう願つた。

☆

調達した食料は大体三日から四日で尽きる。だから私はその周期でスーパーマーケットに足を運んだ。幸いあそこには裏側の倉庫もあり段ボールに残っていた食料は結構な数であった。故に度々私はあのスーパーマーケットに足を運んでは食料を調達する、ついでにあの姉妹に逢えるのではと期待を持つて。

逢える日もあれば逢えない日もある。彼女達は凡そ一週間の周期でスーパーマーケットに足を運んでいた。二人分の食糧と水をリュックサック一杯に詰めて帰る。最初は私を見る度に警戒心を抱き、まるで猫の様に威嚇していた姉、怯える妹。しかし二度、三度、四度と繰り返す内に二人の態度は徐々に軟化していった。

いや、軟化と言うよりも『無関心』と言うべきか。

そこに居ても居なくても気にしない、正に置物と同じと言うべき。しかしある程度の警戒心は未だ持ち続けているのか私が大きく動くとき視線を此方に向ける。最初の頃の様子に肩を跳ねさせるような事は無くなったが依然ゾンビという認識は変わらなかった。

「今日も居るね、巨人さん」

「……………そうだね」

小苗がそう口にすれば姉はしげしげと此方を見ながら頷く。今日は逢えた日と内心で喜びながら食料を漁る。最近ではかなり消費期限が切れたモノでも躊躇い無く籠に入れるようになった。どうせ腹に入れば一緒である、多少カビていようが腐っていようがこの体ならば問題無かった。人間の頃だったら考えられない、一応これは適応と言って良いのだろうか。

食料を漁りながら三つ目の一つで少女達の姿を捉え、人間観察に精を出す。私には『人と同じ空間で同じ事をしている』という事実がたまらなく嬉しかった。自分の人間として活動しているようで、何か言い表せぬ欲求が満たされるのである。

籠を半分程満した水と食料に満足し、私は踵を返す。じつと此方を見つめる姉の視線を感じながら私はいつも通り財布から札を取り出してレジに置いた。既に通い詰めたスーパーマーケットのレジには札束が乗せられている。家にある貯金も持って来たのだ、通算で数万円にはなるだろう。既に窃盗を犯していた私からすればただの自己満足に過ぎないものであったが、この行動には彼女達に対する人間アピールも含まれていた。

今日も今日とて会話はない。きっと彼女達にとって自分は脅威ではないが好んで寄りたくもない存在。けれど今はそれで良いと思う、何せ見た目は完全に化け物なのだから。いつか彼女達に近付ける日が来れば良いな——その程度の淡い希望。

私はいつものように姉の視線を振り切り、スーパーマーケットを後にしようとして。

「お姉ちゃんッ！」

小苗の叫び声に思わず足を止めた。

人殺し

「お姉ちゃんッ！」

小苗の叫び声に思わず足を止めた。

振り向いた私の視界に飛び込んで来たのは姉へと忍び寄るゾンビの影。丁度私の方向とは真逆、陳列棚の間から体を出した彼女の真後ろ。

段ボールの中に埋まっていたゾンビが彼女の背中、その衣服を掴んだ。

「ッ、やっ、何で!？」

荷崩れした際に巻き込まれていたのか、周囲にゾンビの苗床が無いから油断していた。完全に私以外を警戒していなかった彼女は背後からゾンビに組みつかれる、妹は足元に散らばっていた陳列棚のパイプを持ち、ゾンビに向かって投げつけた。けれどその程度の攻撃で離れるゾンビではない。連中は痛覚も無ければ慈悲もない。

「はなッ、離れろ……!」

「お姉ちゃんから離れて、離れてッ!」

組みつかれた姉は必死にゾンビの顔を押し退け体を離そうとする。しかしゾンビの

握力は脅威の一言、人間としての枷を外した連中は自分の皮膚を貫く力で手を握り締め
る。故に彼女の衣服がミシミシと音を立てるだけで離れる様子はない。

くあつと、ゾンビが口を開けた。

噛まれれば感染は必至、それは私が良く知っている。彼女もそれを知っているのだろ
う、唾液の絡みついたソレを見て肩を強張らせ、喉の奥から引き攣った声を出した。

妹は悲鳴を上げながら必死でゾンビを殴り付ける。そうして彼女の首筋に犬歯が突
き刺さる——寸前。

ゾンビの横つ面を私の剛腕が全力でぶち抜いた。

全力も全力、ゾンビになってから凡そ本気で振るった事も無かった剛腕。人間の頃で
あればへなちよこの右ストレートだった筈のソレは、恐ろしい程のスピードと迫力で以
てゾンビの顔を粉碎した。

比喩ではない、文字通り粉碎したのである。

鉄球の様な拳はゾンビの頭蓋を砕き、そのまま後方へと吹き飛ばす。凡そ人間では成
し得ない威力、純粹な腕力と強度が織りなすパンチは人知を超えた破壊力を誇った。頭
部を失った肉体が枯れ葉のように宙を舞いタイルの床を滑っていく。

嵐が突き抜けたかのような風に姉の髪が靡き、妹は目を見開いて私を見ていた。

思わずやつてしまった、彼女達の危機だと思つた瞬間体が全力で動いてしまった。タイルを蹴り碎いての接近、そこから全力で振り抜いた右ストレート。この腕ならば容易く殺せると思つていたゾンビだが、本当にその通りだった。

姉は突然の事にペたんとして座り込み、開けた服をそのままに私を背中越しに見上げる。私を彼女を見下ろしながら自分の拳にこびり付いた血の感触を想つた。

爽快感は無かつた、救つたという達成感も、ヒーローの様な歓喜も。

ただ『この手で人を殺した』という事実だけがぬるりと私の拳に絡みついた。

私は突き出していた拳をゆっくりと下げると、彼女達に背を向けていそいそと落とした籠を拾つた。それから苗床と化しても問題無いように死体を引き摺つてスーパーマーケットから遠くの方へとぶん投げる。どこでも良かった、此処で発芽しなければ何処でも良い。

それから私は自分の背に突き刺さる視線に気付かぬ振りをしながら家に向かつて走り出した。背後から待つて欲しいと声が聞こえた様な気がしたが無視した。

話せるチャンスだった、触れあえるチャンスだった、それを私は自らの意思で無駄にしたのだ。

けれど言い訳させて欲しい、その時の私は他ならぬ己の手で「人を殺した」という事

実に打ちのめされていたのだ。手には頭蓋を砕き脳髓をぶちまけた感触が残っていた、強すぎる力は私に相応の苦悩を齎したのだ。正当防衛？ 相手はゾンビだった？ その通りだろう、けれど銃で引き金を絞って撃ち殺したとは訳が違うのだ。無論、車で轢き殺すのとも違う。

他ならぬこの手で、直接、私が、殴り殺したのだ。

不快感が勝った、自分の生存する理由よりこの血に染まった右腕を少しでも早く洗いたかった。その日私は初めてあの姉妹と接点を持った、そして——ある意味初めて、私はこの手で人を殺した。

☆

時間は最高の薬と言ったのは誰だっただろうか、失恋も仕事の悩みも失敗も、全ては時間が癒してくれる。それは真理だ、事実三日程家に引きこもってスナックを齧っていればへばり付いた血の感触も、人を殺したという感慨も徐々に薄れていく。人は慣れる生き物なのだ、私はソレを実に軽薄だと感じながら有難く思った。殺人に罪悪感を覚えたくない、そうでなければ生き残れない世の中だったから。

私が最後のスナックを食べ終えると、ここ数日ですっかり辛気臭くなった部屋の換気

を行う。電気があつて助かった。

「……調達、行こうか」

幸い今日は晴れた、私はゾンビ形態に体を切り替えると少しだけ重い足取りでスーパーマーケットに向かった。気分は重くとも食料と水は重要、これが無ければ私は自分を人間だと定義する事が難しくなる。

そうしてやって来たスーパーマーケット、あの日放り出した死体は既に苗床となっているだろう。幸い店内で発芽の様子は見られない、こびり付いた血はカピカピに乾いていた。

「あつ」

入り口からのつそりと入り込めば其処には食品棚を漁る姉妹の姿。私の姿を見るや否や二人が声を上げる。私は彼女達の方に顔を向け、どういう態度で接すべきかと悩み——暫く立ち尽くした後、いつも通り食品棚を漁る事にした。

救つてやった、助けてやったなどと恩着せがましく纏わりつく気はない。所詮彼女達からすれば同族同士の争いだろう、だから感謝が欲しいわけではない。けれど少しでも彼女達の持つ私への印象が好転すれば儲けものだ。そうすればこの手で人を殴り殺した事も無駄にはならない。

そんな事を思いながら籠を取り出し、奥の方を漁りながら食べる物を籠に放り込む。

今日は私の方が彼女達の方を見られなかった。そうこうしていると――。
「あの」

いつの間にか姉の方が私の傍に近寄っていた。手には一つの缶詰を持って、その表情は御世辞にも優れているとは言えない。少しかだけ血の引いた顔、それはそうだろう、つい数日前に頭蓋を粉砕する拳を目前で見たのだから。それを起こした張本人、それが私だ。

そんな怪物と対峙して、あまつさえ彼女は声を掛けて来た。そして缶詰をそつと私の籠の中に入れ一言。

「……………」の前の、お礼です」

「――」

私は暫くの間我を忘れた、呆然と彼女を見つめる事しか出来なかった。まさか感謝の念を送られ、ましてや貴重な食料を渡される等とは夢にも思わなかった。

だから私は自意識を取り戻すや否や籠の中に入っていた缶詰をむんずと摘まみ、少女の手に押し付ける。私は何度も首を横に振って拒絶の意を示した。

駄目だ、この食料を受け取る訳にはいかない。

私と彼女達では根本的に違うのだ、私は最悪飲まず食わずでも生きていける。この食料と飲料は全て「娯楽」の域なのだ。私が人間であると実感する為の娯楽、生死には関

係ない、けれど彼女達の場合は飲まねば死ぬし、食わねば死ぬ。

この缶詰一個の重さは私と彼女達では違う、私は無くても良い、けれど彼女達は無ければ【死ぬ】。そう考えたらずくに体が動いた。

「え、あツ、ちよ、も、貰つて下さいよ！」

「——！」

尚も缶詰を押し付けてくる姉に私は指先一本で缶詰を押し返し、そのまま他の腕を使つて籠の中にあつた食料を彼女のリュックサックに詰め込み始めた。何なら全部くられてやる、一杯食べて育つが良い。

「あツ、ずるいッ！」

多腕で圧倒する私に非難の声を上げた彼女はしかし、成す術なくリュックサックをパンパンにさせた。籠の中の半分程を彼女に分け与えた私は満足し何度も頷く、彼女はそんな私をどこか怒つた表情で見上げると、「貴方の分、無くなつちゃうじゃないですか！」と怒鳴つた。

彼女達は私にも食事が必要だと思つている様だ、それは生物としてごく当たり前の思考だろう。私は多腕の一つで自分の口元を指差す、彼女が「あ」と声を上げて目を見開いた。生物状態の私には口が無い、だから声を発する事も出来なければ飯も食えない、水も飲めない。

その事に気付いた彼女は渋々と缶詰を引つ込め、「じゃあ、何でこんな事……」と蚊の鳴く様な声で呟く。私は気持ちだけ貰っておくと言わんばかりに手を振り、そのまま踵を返した。

私は満足だった、大満足だった。

なにせ一カ月、いや二カ月ぶりに人とコミュニケーションを取れたのだから。人と触れ合ったのは随分久しぶりな気がした。会話が出来なかつたのは残念だったが彼女達と接点を持てたのは大きい。これは私にとって大きな一歩だった。

そんな自分の幸せを噛み締める私の背に、「待って！」と声がかかる。そして何の躊躇いも無く私の腕を掴むと、姉は下から私を見上げた。

「その様子、私の言葉、分かるんですよね？」

まさか躊躇いも無くこの腕を掴むとは。彼女にとっては何とぞんビと大して違いあるまい、だというのに彼女は確りと素手で私の腕を掴んでいた。その事に驚きを覚えながらも私は頷く、意思の疎通は可能だと知って貰いたかった。

「やっぱり——！　小苗、大丈夫、この〔人〕は大丈夫だよ！」

「う、うん！」

姉は私の頷きを確認すると目を輝かせ、背後で落ち着きなく姉の動向を見守っていた

妹の名を呼んだ。呼ばれた少女は頷きながら駆け寄って下から私を見上げる。そして姉と同じように私の逆の腕を取ると、ふにふにと何度も弱く握って感触を確かめた。久々に触れた人間の手は暖かくて——柔らかった。

「うわあ、やつぱり大きいねえ」

「凄い筋張っているから硬いと思っていたけれど、意外と弾性あるのね」

「——！」

ぺたぺたぺたぺた。

私の大きな腕をひたすら手で触る二人。いや、流石にそれはどうかと思う。皮膚同士での感染は限りなくゼロに近いが、何かの拍子で感染しないとも限らないのだから。彼女達の事を考えればその手を振り解くのが正解なのだろうが、如何せん私にとって二カ月ぶりともなる肌の感触は酷く離し難い魅力だった。暫くそうやって好きに弄られ沈黙を貫いていた私、満足したのか二人は一通り私の腕を摘まんで楽しむと一歩離れて距離を取った。

そして姉が再び私を見上げて言う。

「えっと、少し聞きたい事があるんですけど」

「——」

「私達の事を襲うつもりはありますか？」

私は緩やかに首を横に振った、二人を襲うなんてとんでもない。ゾンビならば兎も角人間を襲うつもりは毛頭なかった。その返答を見た彼女達はホッと胸を撫で下ろし、それから彼女は更に言葉を重ねる。

「なら人間は、人間を襲うつもりは？」

私は再度首を横に振った。彼女達も人間も同じだ、私に戦う意志はない。

「良かった——じゃあ少し、お願いがあるんです」

彼女は真剣な表情でそう言った。私はその瞳の中に暗い覚悟の色を見つけた。膝を屈めた私は三つ目で彼女を注視する。流石に三つの眼球で真っ直ぐ見られるのは恐ろしさが勝ったのか、少しだけたじろいだ彼女はさっと視線を横に逸らす。彼女の様子に私は慌てて額に埋め込まれていた眼球の一つ、その瞼を下ろした。

こうすれば二つである、恐ろしくは無いだろう。

「……器用ですね」

私の気遣いを悟ったのかクスリと微笑んだ彼女はそう言う。単なる下心だ、彼女達に嫌われたくないという。

「あの、私達のキャンプに来て貰えませんか？ それで——私達を、その、助けて下さい」
彼女は何度か口をまごつかせると、大きく息を吸い込んでそう言い切った。私はその言葉に首を傾げる。それは一体どういう事だろう。私には意図が計りかねた、正直何を

望んでいるのか分からない。

「貴方はゾンビに襲われないんですよね……？ それに凄く強い、もし人間の意識が残っているのなら助けて欲しいんです」

「——」
彼女の言わんとする事が漸く理解出来た。私を見上げる姉の目、それは焦燥感に駆られている。確かに私はゾンビに襲われない、だから連中を気にする事無く物資を集める事が出来る。そして腕っ節も先の通り、万が一彼女達に何かあつた場合も守ることが出来る。更に言葉を理解する知性持つ怪物、これ程便利な存在はないだろう。

少し意地の悪い言い方をすれば——彼女達は私を利用しようとしているのだ。

私としては彼女達を守るのは吝かではない、何よりこんな幼い少女達である。守らなければならぬという保護欲もあるし、この惨状の片棒を担いだのが己だという自覚もある。だからこそ頂く事は簡単だった。

簡単だったが——私の理性が嘔くのだ。

こんな化け物を他の人間が受け入れる筈が無い。

「——あ」

私は静かに首を横に振った。途端、悲しそうに顔を歪ませる少女。その顔を見て胸が痛んだが仕方のない事。少女達だけならば良かった、私も二人を食わせていくだけの物

資調達だけならば容易だろう。ある程度の障害であれば排除しよう、積極的にゾンビを殺したいとは思わないが……既に死んだ人間と今を生きる人間の価値がどれほどのものか己が一番良く知っている。

けれどキャンプに住む他の生存者はどうだ？

きつと私を受け入れない、受け入れる筈が無い。そんな確信が私の胸の中に在る。

見た目だけでこんな厭ついのだ、普通のゾンビじゃない、それに幾ら理性があるかってそれをどうやって信じて貰えば良いと言うのか。この二人だつて初めて私を見た時は恐慌状態に陥った。こんな疑心暗鬼の世界で人の善性を信じて進むには——余りにも危険な選択肢に思えた。

履き違えてはいけない。

私は確かに人と触れ合いたい、会話したい、接点を持ちたい。それが私の今生で定めた「生存理由」。けれど生存理由とは『生存』しなければ意味が無いのだ。生きていなければ理由もクソも無い。

私は一度死んでいる、そして二度死ぬ気はない。一度死んだからこそ二度目は無いと確固たる意志を持つて動いている。こんな体だ、早々死ぬような事はないだろう。けれど生物である以上明確な死は存在する。究極的なタフネスを持つ生物は居ても不死は存在しない、それにはきつと私も含まれる。

正当防衛などという言葉で本当の人を殺したくはなかった。

「そ、そつか……ごめんなさい、突然」

私の拒絶を見た彼女は一步後退し、そのまま俯いて唇を嘯む。私のこの体に口が付いていればちゃんとした理由を話して納得して貰えただろう。けれど頑丈なばかりのゾンビ体ではそれも叶わない。

代わりに私は彼女の頭を巨大な手で一撫でし、そのまま少しの食料と水の入った籠を持ってレジの方に進んだ。その背に突き刺さる視線を手繰り寄せ、くいくいつと手で招くジェスチャー。姉と妹の二人は目を見合わせ、恐る恐る私の背に続く。姉は零れそうになった涙を無理矢理呑み込み、妹である小苗の手を握った。

彼女のキャンプに行くことは出来ない、他の人間はきつと私を受け入れないだろうか。

けれど逆に——私の家に招く位ならば良いだろう。何かあった時の避難所として、彼女達二人くらいならば守る事は出来る。なにせ電気も水もあるのだ、そこに定期的に食料さえ収集出来ればシェルター代わりにはなるから。

人肌

スーパーマーケットからゆつくり歩いて十分、道行く姉妹は挙動不審にチラチラと周囲を警戒していた。彼女達は人間である、だからゾンビに見つかった場合は問答無用で襲われてしまう。

しかしどういう事か、私が二人を二本の腕で抱えて歩くと全くと違って良いほどゾンビたちは反応しなかった。この事には私も含め姉妹も驚きを露にする。元々少しでも危険を減らす為傍にいて欲しいという意図から二人を抱き上げたのだが——何とも心細い表情だったので仕方なかった、感染しない事を心から祈る——全く襲われなくなるとは予想外であった。

もしかしたらこの二人は私の獲物だと勘違いされているのかもしれない。他人の——更には言えば格上の奴の獲物には手を出さない。生物的な本能からか、それとも別の法則性があるのか。兎にも角にも助かった事だけは事実であった。

「此処が貴方のおうちですか？」

「——」
砕けたアスファルトを飛び越え、乗り捨てられた車の合間を潜りゾンビたちを無視し

ながら突き進む。そして辿り着いたのは一軒家、庭と駐車場の付いた少しだけ豪華な家。まだまだローンが沢山残っていた筈の我が家である。

私は帰宅するや否や目を輝かせる妹と心配げな姉を家の中に入れ、それから発電機を稼働させる。周囲のゾンビが音に反応するものの相変わらず襲って来る気配はない。そうして電気を通せば家電が息を吹き返す。未だ外も明るく電灯を点ける必要はないけれど、パツと点灯したソレに二人は「わあ」と声を上げた。

「ここは電気が使えるんですね……！ 凄い」

「あつ、じゃあお風呂、私お風呂入りたい！」

電気が使えるという事に驚き顔の姉、そして遠慮する事無く挙手し自分の我儘を通す妹。こらつ、と姉が妹の頭を抑えつけるものの私としては一向に構わない。流石にシャワーなどは使えないがここ数週間で確保した雨水や水道水がある。何なら最近は近くの貯水槽を怪力でぶち抜き強奪して来るなんて事もしていた。水は貴重である、幾らあっても困りはしない。

段々私の倫理観が汚染されていく、だが人間とはそういうものなのかもしれない。初めて人を——ゾンビを殴り殺した時はあれ程動揺したというのに、私はこうなる前は世界の裏側で自分の製作した兵器が使用されるのに何の感慨も抱いていなかった。目に見えた死も絶望も無かったからだ。

罪とは犯して初めて自覚する、そうでなければ偽善や優しさという薄い殻に覆われてしまう。人は極限状態に陥って初めて人間性が露わになる。

果たして私は自分の利便性、あるいは生存の為に手を汚す事を厭わない人間らしかった。

こんな状態になって初めて私は自分を知った。存外私は自分が思っていたよりも余程汚らしい人間だったのだ。罪を犯す事を躊躇わない人間、畜生か下衆か、ある意味今なら外見相応だろう。

一度浄水器で水を綺麗な状態にした後、風呂場に運んで中にパイプヒーターを投入。元々実験用に倉庫の奥で眠っていたものだが風呂にも使えない事は無い。リビングでキヨロキヨロと忙しない二人にスーパーマーケットから持って来た菓子を出してやった。私の分はなくなってしまうがまた明日にでも取りに行けば良い。今の私に食事は必要なかった、彼女達との会話が私の人間性を保つ薬だった。

「あの……貴方は此処に一人で暮らしているんですか？」

妹の方がクッキーのパッケージを開いてほしい口にクッキーを放り来んで行くのを尻目に、姉は申し訳無さそうにそんな質問を飛ばしてくる。私が頷いて見せると、「じゃあ、この食料は誰が……」と不思議そうに言った。

私は困り顔で頬を掻く。もつとも顔と言える顔がある訳でも無いので形ばかりだが。

私はこの二人に人間の姿を見せる気はなかった。この二人に逢う時はゾンビの姿だけ、ある意味それは人であり続ける事を望む私のゾンビ的な側面から来る感情が理由だった。人でありながらゾンビであるという二面性はこの二ヶ月で私の精神に歪さを生んだ。

私はソレを二人に知られるのが急に怖くなったのだ。

「……いえ、すみません、忘れて下さい」

私が何も言わず、動かず、沈黙していたからだろう。彼女は首を横に振って自ら投げかけた質問を取り下げた。その表情は澁々と言うより、人の内側には入り込まない様にしようとする配慮が見られた。そうして姉はクッキーに手を伸ばし、「頂きます」と一言呟いてから端を齧る。

私は俯き気味にクッキーを齧る姉を眺めながら緩やかに時間を過ごした。彼女達に振る舞った水や食料は貴重だったが、人間との触れ合いは私にとってもっと貴重だった。家の中にあつたテレビでビデオやDVDなども見る事が出来たので、比較的電気消費の少ない小さな画面で久しぶりに映画なども楽しんだ。ここ二ヶ月はテレビを見るという発想すら浮かばなかったというのに、人は心が豊かになると大分余裕を持つ事が出来るのだと知った。

残念ながら一般放送は行われていない、一体いつから止まってしまったのかは分から

ないがこんな状況なのだ、ニュースもドラマも、テレビを放送する余力はないだろう。辛うじてラジオからは時折連合駐屯地から避難を受け入れ云々という放送が聞こえて来る、けれど辺境である日本地区に駐屯する連合兵だけでコミユニティを維持するのは非常に困難であるように思えた。

生き残りがどれだけいるか分からないが——一体外に出て命懸けの物資集めをする人間は何人いるのか。

「あつ、お風呂……良いんですか?」

菓子を食べ、久々の映画を楽しんで二時間程。多少温いが風呂が沸いたジェスチャーをすれば小苗が「やった!」と風呂場に駆け出し、姉は申し訳無さそうな表情でおらずと私の前に立つ。

構わないとも、今までは精々体を拭く位が限度だった筈だ。衛生的にも風呂は大切である、私が領けば彼女は嬉しそうに顔を綻ばせる。何だかんだ言っても女の子、お風呂に入れるのは嬉しい事なのだろう。

投入したパイプヒーターで風呂を掻き混ぜ温度を均一にする。一応火傷が怖いので彼女達が入っている間はヒーターは引き上げる。コンセントを抜いて湯に指を浸してみれば、多少温いもの入れない程ではない。私と入れ違う形で脱衣所に入って行った彼女達を見送り、私はまるで彼女達の保護者になった気分になった。

☆

わいわい、きやつきや。はしやぐ小苗と窘める姉。その声を聞きながら私は束の間、人の姿に戻つて寛ぐ。そしてテーブルの上に紙とペンを用意してサラサラと文字を綴つた。現状私と彼女達でコミュニケーションをとる為に残された最後の手段である。『言葉が喋れない為、文筆で——』と始まつた文章は『いつでも此処に来て構わない』、『困つた時は此処に来て、事情を話せば必ず協力する』と私の胸の内を曝け出した内容となつた。

キャンプに行つて多くの人間に協力する事は出来ないが彼女達個人の伝手として手助けするのであれば問題無い。人は群れば力を得る、そして力を得た人間は増長する、あたかも群の力が個の力であるかのようにコミュニティの力を振りかざす。

私はそれが恐ろしかった、人と触れ合いたいと願いながら多くの人の目にこの体が晒され、それでいて非難され排除される事を嫌つたのである。だからこそ彼女達の様な少数で非力な人間は交流して私の人間性を確かめるには十分で、これが私から譲歩できる最大のラインであつた。

我ながら何と打算的で小心者、それでいて畜生な考え方か。それでも私は自分の命を

投げ捨てる程善人ではないし、私のせいで世界が減んだと責任感に押し潰される程細くも無かった。良くも悪くもゾンビと成り果てた私の精神は「それ相応」に変質した様に見える、キャンプに向向かない理由にはそれを知られたくないという部分もあった。

その後、「さっぱりした〜！」と笑みを浮かべポカポカしていた姉妹を出迎えた私は、彼女達に飲料を与えつつ書き綴った手紙を押し付ける。最初は疑問符を浮かべていた彼女達であったが、その文を書いた人間が私だと分かるを目を瞬かせ確りと協力を結び付けた。

「い、良いんでしようか、私達、何も差し上げられる様なものは……」
「えっと、ご飯なら……」

不安げな表情を浮かべる二人、そして小苗の方は先程スーパーマーケットから手に入れて来た食料と飲料を差し出そうとリュックサックを抱く。私はソレを手で制しながら何度も頷いて見せた。

私には人間と触れ合う時間が貰えればそれで十分だった、それでいて安全ならば何も言う事は無い。この時の私は「私を怖がらず、恐れず、普通に会話できる人間」を欲していたのだ。成り行きとはいえ彼女達はその条件を満たしていた、私としてはそれだけで満足なのである。

「元々助けを乞うたのは私ですが——すみません、助かります」

「ありがとうございます。」

深々と頭を下げる姉、元氣よく頭を下げる小苗。

こんなゾンビに成り果てた私ではあるけれど、まだ人の助けとなれるのならこの肉體も悪い事ばかりではない。私は内心で笑みを浮かべながらタオル越しに二人の頭を撫でた。

その後はリビングで二人を暫く休ませ、日が落ちる前にキャンプの方へと送つていく。来た時と同じく私の腕に抱えての移動だ、風呂に入ったばかりの二人はほんわかと温かく心地よかった。残念ながら鼻が無いので匂いは分からないけれど。

私に抱えられていればゾンビに襲われる心配が無いと分かったから、二人は最初と比べれば大分リラックスしている様に見える。尤もゾンビの近くを通る時はさすがに緊張するのが視線を逸らさないが、それでもスーパーマーケットに居た時を思えば大分落ち着いた方だろう。

彼女達のキャンプはスーパーマーケットから歩いて二十分ほどの距離にある駅に築いているとの事だった。ホームに停車したままの列車や駅構内の店、トイレなども一式揃っている。車両には補助電源・非常電源が搭載されており万が一の際はそれらも使用できるのだとか。尤もひとつにつき三十分程度で余り長持ちはしない、発電機の入手が目下の課題と聞いた、しかし私が足を運んだホームセンターは遠くとてもじゃないが調

達に出向くのは困難らしい。

車で行こうにもガソリンだつて簡単に手に入らないのだ、既にスタンドからは持ち去られていただろう。乗り捨てられた車からチマチマ回収するのも時間が掛かるし、なにより危険があった。作業中にゾンビにでも囲まれたら堪ったモノではない。

「集まっている人は五十人前後で、他にも幾つかグループはあるんですが多分ウチが一番大きなグループです、ただ年配の方もいて、動ける人は皆で食料や水を集めないといけなくて……」

私の腕の中でぼつぼつとコミュニケーションについて語る少女。今更だが彼女は名前を『美香』と言った、先程自己紹介されたのである。私が本格的にコミュニケーションの取れる怪物だと分かった彼女は自分の身の回りのアレコレについて教えてくれた。

私は言葉が発する事が出来ないので頷く事でしか態度を示せないが彼女にとっては十分な様だ。何よりコミュニケーションの大凡の数が分かったのは大きかった。この街の人は随分と減ってしまったらしいが各所で何とか生き残っている集団は居るといふ。

「私達にはゾンビに対抗するための力が無いんです、連合駐屯地に行けば銃なんかも置いてあると思うんですけれど……使えるかどうかは兎も角、手製の槍とか刃物ではやっぱり限界があつて、特に私みたいなどんくさい人間だと外で食料や物資を調達するだけでも命懸けなんです」

幸い駅構内には侵入を許していませんが、正直いつバリエードが突破されるかビクビクしています。美香はそう言って自分の二の腕を何度も摩る。

成程、私は彼女が助けを求めた理由を何となく理解した。

連合の兵士も無く、恐らく警察官など警邏の人間も居ないのだろう。本格的に戦える人間が居ないのだ、でなければ彼女の様な女の子、姉妹二人で食料調達に駆り出されたりはしない筈だ。この年代の女の子ならばまだ守られる側の人間——それこそ小苗の様な子ならば特に。

彼女は——彼女達は防衛力として私を欲していた。自衛のための鬼札である、例えそれがゾンビだろうが理性を持つ獣ならば十分利用できるだろう。だが私は理性の他にも臆病さも持ち合わせた獣だ、多くの人間にこの姿を晒したいとは思わない。

丁度駅に通じる国道、その半ばで私は美香と小苗を下ろす。コミュニティが近いせいかこの辺りにはゾンビの姿が余りない。一応彼女達が駅の中に入るまでは見守るつもりだ、「到着？」と小苗が首を傾げ、姉である美香が「そうだよ」と頷いた。

「あの、色々ありがとうございます」

「ありがとう！」

頭を下げる二人に手を振り、私はてくてくと歩いて行く二人の背を見守る。一応建物の影に身を隠し、彼女達がゾンビに襲われそうになった場合は飛び出せるように構え

る。駅へと通じる入り口は全て机やら看板やらで封鎖されており、土台となった長机の下に潜れそうな穴が一つ。恐らく意図的に空間を確保したのだろう。美香がその穴を塞ぐ鉄板を二度、コンコンと叩けばスツツと鉄板が退けられ道が開いた。そのまま机の下を潜って中に入ってく彼女達。その背を見送り私は胸を撫で下ろす。

何か心を満たす歓喜があつた、満足感があつた。人間とのやり取り、まるで友人の様な交流。それは長らく私が渴望していた生存理由そのもの。この関係が続く限り出来る限りの助力はするつもりだ。

そして彼女達もこれまで通り食料調達でショッピングモールに訪れるだろう。当分、人との交流に飢える事はなさそうだ。私は満足し、小躍りしそうな程上機嫌な様子で家へ帰った。誰も居ない孤独な家だったが、それでもその時だけは寂しいとは思わなかった。

人肌の力とは斯くも偉大である。

ジョン・ドウ

順風満帆とはこういう事を言うのだろうか。依然この世界はゾンビ塗れだし私もその御仲間と成り果ててしまったが、それでも小市民的——いや、小ゾンビ的幸福は享受出来ている。

三日に一度の食料調達、本当は彼女達とのコミュニケーションのお蔭で一日少量の食料すら必要ない程に精神が安定してきた私だが、それでも彼女達と逢う為に定期的な食料調達に出向いている。故に最近では保存食が溜まる一方だ。

彼女達も相変わらずスーパーマーケットに食料を調達しに出向いている。最近では日用品の確保も視野にいれたのか、私を護衛代わりに付近のドラッグストアや服屋等にも足を運んでいた。ゾンビが中に居た場合は私が掴んで外に放り投げる。直接殺すような真似はしない、例えゾンビだとしてもむやみやたらと殺すのは精神衛生上悪かった。

その生活は、まさに私にとってはこの世界での理想的な生活だった。

何かに怯える事も無く、人との触れ合いが約束されている日々。服屋に行つて彼女達

の服、キャンプメンバー用の服を見繕ったり、帽子や靴、もつと大きなリュックサックを見繕ったり。或は雑貨屋に行つてちよつとした便利グッズを取つて来たり。

私は会話をする事ができなかったが彼女達のやり取り、もしくは相槌をうつてただ彼女の話の聞くだけでも心が安らいだ。あの何も語らず、喋らず、あつても独り言だけの二ヶ月と比べればゾンビ形態縛りとは言えこれ程精神的な安定はないだろう。何より飯や水を余り消費しないのが良い、「人と一緒に何かをする」という行為がこれ程自分の人間復帰欲求を満たすとは思わなかった。

私は彼女達の要望に出来得る限り応えた。

美香は言つた、「キャンプの人達は貴方の事を信じてくれないんです」と。どうやら私に助けられたその日に巨軀で三つ目のゾンビが居るといふ話をしたらしいのだ。それでいてそのゾンビは心優しく、決して人間と敵対はしないと。

私からすれば余計な事をすると思わなくもなかったが、しかし彼女が私という存在を受け入れて欲しいと他者に働きかける行為は、何か私を大切に想つてくれている様で悪い気はしなかった。迷惑と言う程のものでもない、それに私とて大多数の人間を助けたくないという訳では無いのだ。裏方に徹するのであれば別段、手を貸しても良かった。どうせ彼女達を助ける事はコミュニケーションを助けると同じようなもの。

尤も、裏方だけならばだ。何か直接的に手を貸す事は出来ない、それが私の設けたラ

イン。

姿を見られないならコミュニティにも手を貸す、私はそう決め彼女達と協力しキャン
プに幾つかの資材譲渡を行った。譲渡と言っても元は私のモノではない、ホームセン
ターやら百貨店からかつぱらって来たモノを駅の拠点近くに置いておいてやるのだ。
気分としては足長オジサンである。結果的に彼女達を助ける延長線上でコミュニティ
を助ける事になった、まあやる事には無いです。

彼等が欲しいと言っていた小型の発電機であったり、或は汚水を綺麗な水へと濾過す
る道具であったり。トイレトペーパーやタオル、ガソリン、灯油、釘やトンカチ、鉋
まで。日用品として必要なものからバリケードの補強に使えるようなモノ、私は彼女達を
連れて街の中にある店からそれらを定期的に収集し駅近くの集積所に置いてやった。

その集積所は木の板で区切られた簡素なもので、彼女が「大きな優しいゾンビ」の話を
してから半信半疑で設置されたものらしかった。曰く、もし物資に余裕があるのなら
ば少しでも譲ってもらえると嬉しいとの事。あつかましいと言えばそうなのだろうが、
何せこんな時代である、私と違って彼らは生きるだけでも困難だった。

私としては生きるだけならば何も必要のない身である、正直必要なものならば今家
にあるもので事足りる。この体には十二分な食事も日用品も必要ない、生活の大部分
を彼らの生活補助の為に充てる事が出来た。

だが私とて聖人君子ではない、行動する時は美香と小苗がついて来る時に限った。そうでない時は自分の生活を豊かにするための行動である——最近は何に彼女達が家に戻ってくるので、くつろげる空間を手に入れる為という部分もあるが。つまり物資収集は彼女達の共をするついでだった。

美香と小苗を連れて物資を手に入れた日は集積所にそれを積み、あとは彼女達が駅の中から荷物運ぶ人手を呼んで来る。私はそれを近場の建物の裏手から見守り、彼女達の安全を守る。最初は駅の人々も半信半疑、と言うより彼女達二人の功績だと喜び讃えていた。

けれど明らかに女手二つでは運んで来る事が出来ない発電機、ろ過装置、或は大きな工具箱や家具などが調達されて来ると『目に見えない第三者の協力』が現実になつていく。困惑するメンバーに美香と小苗は根気強く大型のゾンビの話が続け、少しづつ——本当に少しづつではあるが私という存在が駅コミュニティ内で認められるようになってきた。

二メートル超えの大型ゾンビが人間の為に物資を集めてくれる。

言葉にすると何とも胡散臭くあり得ない妄言と吐き捨てられそうなものだが、小苗と美香が調達に出掛けた日に積まれる物資は現実のものとして人々に齎されていた。コミュニティだけでは調達出来ない家具や家電、工具の類は非常に有難く思われ美香や小

苗を介して何度も感謝の声を聞いた。特に発電機は非常に助かったとの事、ガソリンの確保が課題となるがその辺りは向こうで何とかして貰うしかない。

悪い気分ではなかった、人間ではなくなった自分が間接的とは言え大勢の人間の役に立っているという事実は私の承認欲求、あるいは自己肯定感を大いに擽った。しかし同時に認められれば認められる程、感謝されればされる程、彼等の前に姿を現したくないという感情が大きくなった。

脳裏に過るのは初めて美香と小苗に出会った日、あの私を見る怯えた瞳、赤の他人にあの目で見られるのならばまだ——まだ耐えられるだろう。けれど自分を認め、ましてや感謝してくれた人間にあんな目を向けられたら、きっと私は耐えられない。だから私は何度も自分に言い聞かせ、感情に蓋をした。

そんな日々とは裏腹に彼女達が大型ゾンビの存在を明かしてから凡そ一カ月、私という存在が目覚めて三カ月目。いつもの様に物資調達に赴いている道中、美香が言った。

「貴方にも名前が必要だと思っんです、なので生前の名前を教えてくださいませんか？」

私の腕の中でそんな事を言う彼女、私は足を動かしながら内心で苦々しく思う。

ここだけの話、私は自分の名前を失っていた。研究内容に関する記憶を失っているように私は私として生きた記憶を持っているものの肝心な名前を消失していたのである。

最初は随分取り乱した、今では落ち着いているが自分の持つ名前を失うというのは酷

く寂しい気持ちになる。これで自分の生きていた記憶すら失っていたら完全に発狂していただろう。欠片でも自分の記憶を持つていた事は救いだつた。

だから私は彼女に名前を教えて欲しいと乞われても応える事が出来ない。故に緩く首を横に振つて見せれば彼女は少しだけ困つた様な顔をした。

単純に教えたくないのか、或は何か理由があるのか。その二つの選択肢で迷つてゐるような気配。幸い彼女のリュックサックの中に紙とペンは入つてゐる、足を止めれば意思疎通は可能だつた。けれど一々説明する事でも無いだろう、私は私という自己が確立できていれば呼び名など何でも良かった。

「ん、名前ないの?」

「……やつぱり、呼び名が無いと不便でしょう? だから名前を、そうでないのなら愛称くらいは知りたいのだけれど」

「じゃあポチ!」

犬か私は。

少しだけ抗議の意味合いも兼ねて小苗を抱えている腕をぐらぐら揺らす。「あばばば」とぐわんぐわん揺れる小苗を見て、「まったく、犬じゃないんだから……」と美香が私と全く同じ言葉を吐き出した。何でも良いとは言つたがポチは嫌だ、ついでにミケとかも。どう見てもポチつて感じの体ではないだろう。

「でもそうですね、名前じゃなくてもニックネームみたいなものは欲しいです、本名でなくても構わないので何かありませんか？」

私の肩を叩いてそう問いかける美香。ニックネーム、愛称、そう言われてもパツと思いつくものがない。首を傾げながら歩く私を美香はじつと見つめて来る、そんな目で見られても良い案は浮かんでこないぞ。

しかし、名前、名前かあ。

言われてみれば確かに名前が無いと言うのは不便だ。一人切りだった頃は余り意識していなかった。彼女達からすれば大きなゾンビだとか、三つ目の巨人だとか、まあ色々特徴的な部分で判別する事は出来るのだろうが固有名詞があるに越したことは無いだろう。

何というかいつまでも無名では「味気ない」。

私も真剣に考え、考え、考え——ふと街の看板に映画の広告が張り付けられているのに気付いた。

タイトルは『JOHN・DOE』、ストーリーは分からないが何やらミステリアスな雰囲気。日本式でいうなら権兵衛、別段拘りはない、無名には変わりないがWHO君でないだけ良いだろう。彼女達を抱えない余った一本の腕でその広告を指差す。

「……ジョン、ドウ？」

ジョンでもドウでも好きに呼んでくれ。そう思って再び歩き出したがジョンと言う名前も結構犬っぽくはないだろうか？　と思った。いや、しかしポチよりはマシだろう。多分、きつと。

「じゃあジョンさんで、改めてよろしくお願いしますね、ジョンさん」

「もしかして外国人さん？」

いや、私は日本地区生まれだよ。

☆

ジョンという名前は意外も意外、コミュニティの中では大分浸透したらしい。私としては日本人だというのに取って付けた様な西洋名を選んだ事に申し訳無さそう羞恥心が後々湧いて出たが、外見だけならゾンビなのだしバレなきや良いやと存外あっさり吹っ切れた。それ以降二人には「ジョンさん」と呼ばれ、私が物資を積んでいた場所もいつの間にか「ジョンさん集積所」と呼ばれる様になった。傍から見ると実に間抜けである。

さて、そんな私の生活が一月続き、名前を得てから更に一週間後、美香の方から「コミュニティの中でジョンさんにお返しがしたいという声が出て来たんです」と嬉しそう

に報告された。

お返し、つまり礼。私としてはそんな声上がることに驚きを覚える、精々こき使えるゾンビ程度にしか思われていないと考えていたが、駅で生活する彼らは私の「人間性」を認めている様だった。

貰つてばかりは悪い、それは対等な関係で初めて生まれる感情だ。相手が異形ならば精々ラツキー程度にしか思わないだろうとばかり。故に私はその言葉を聞いて暫く呆然としてしまった。

だが礼と言つても私は姿を彼らの前に晒すつもりはない。私はあくまで足長オジサンで良い、これまでの集積でどれだけ好感度を稼いだかは知らないが「一度受け入れられた後に突き放される悲しさ」は味わいたくなかった。それこそ笑顔で出迎えてくれた彼等を阿鼻叫喚の地獄に叩き落としたくはない。認められたと分かったからこそ、その期待を裏切るのは恐ろしかった。

しかし私のそんな予想は杞憂に終わり、なにやらニヤニヤと笑う美香と小苗がリュックサックを抱え、「じゃーん！」と効果音を口にし、中から大きな布——いや、服を取り出した。

それは余りにも大きな服だった。

凡そ人の着るサイズではない、一体どんな大男用の特注品だと思ひ——ソレが自分へ

のプレゼントなのだ悟った。

「これ、ジョンさんにいつもお世話になっているから皆で頑張って作ってみたくて、ジョンさんと一緒に行った服屋さんで材料を集めて、ちよつと継ぎ接ぎだらけで申し訳ないんですけど……い、一応着れる筈です、はい！」

恥ずかしそうに頬を赤くしながらそう捲し立てる美香。そう言えば彼女は最近、私の背中を熱心に観察していたように思う。六本腕が珍しいのだろうかとして大して気にしていなかった私だがこの時になってようやく服を作る為に観察していたのだと知った。

私は彼女達の差し出したソレを恐る恐ると言った風に受け取った。

その服は背中の部分に大きな穴が四つ空いていた。恐らく私の多腕の為に空けたのだろう。引つ掛からない様にスペースに余裕を持たせ、ベースは普通のTシャツに近い。幾つかの素材を使い分けたのか所々肌触りが違う、けれど色合いとしては統一された黒色。ぱつと見は随分綺麗な出来栄え。

正面には白い糸で一言、ジョンと。

ちよつと恥ずかしい——けれど嬉しい一品だった。

他ならぬ自分の為に、自分の為だけに創られた服。素材を集めて服を作るなど大変だったろうに、それこそこんな時代でこんなものを作るなんて。私はその場ですぐTシャツを着ようとした。

けれど腕が引つ掛かって上手く着る事ができなかった、背中の腕は未だに細かな制御が難しい。私の背後に回った美香が引つ掛かった布を引つ張り、一本一本腕を通してく。服は少しだけきつかったけれど十分に着れる範囲、張った胸元の【ジョン】の字を指で撫でると温かい気持ちになった。

私が服を着た状態で感傷に浸っていると、くるくると回りを回っていた小苗と美香が感想を口に出す。

「胸回りちよつと小さかったかな……？ うん、でも似合ってる！」

「パツパツだあ……ジョン、ダイエツトしよう」

無茶を言う。

私は小苗と美香の頭をくしゃくしゃと撫でる、まさかゾンビに成り果てた後にこんな日を迎えられるとは思っていなかった。高々シャツ一枚、されど一枚。人がゾンビに物を贈る、その事実には私は『高々』を付け加える気にはなれなかった。

人は暖かい。自分もかつてその、温かい者の一員だった。その名残を求めているのか、単純に過去の自分に縋って己を保とうしているのか。私にはこの贈り物が自身の理想を具現化している様に見えた。

「えへへ……：：：？」

美香の言葉に私は深々と頷く、気に入らない訳がない。これは私にとって最高の品物

だ、心の底から氣に入った。

幸せの絶頂だった、最も幸福な時期だった。

或はこのまま積み重ねていけば、いつか自分もコミュニティの人々に受け入れられるのではないかと。嘗て人間だった頃の様にまた人の輪の中で笑う事が出来るのではないかと。そして誰もこの姿を怖がらず、恐れず、普通に会話し、普通に過ごし、普通の日常という奴を送れる様になったら。

ちらりと私は小苗と美香の二人を見る。

こちらを見る瞳は純朴で、真摯で、希望に満ち溢れている。

私のこの変質した心さえ、受け入れて貰えるのではないかと。

そんな果ての夢を見た。

人に焦がれ続けた、厄災の獣

夢はいつか醒めるもの。そして夢の目覚めとは唐突で、残酷で、いつも途切れ途切れ。私の幸福な夢も長くは続かなかった。

この世界で目覚めて三カ月、宝物を得てから凡そ二週間。徐々に物資の充実してきたコミュニティ、少しだけ健康な体つきになった様な気がする小苗と美香。

そんな彼女達を見ていると私の判断は間違っていないなかったのだと嬉しくなる。彼女達と一緒に街へと繰り出し、すっかり慣れた抱え方であちこち回る。相変わらずゾンビは多いし危険はある、けれど彼女達はもうこの街を恐れない。私がいるから安心する、そして私もまた彼女達の安全を保障する。私の心は微塵も揺らがない、人と共に在る限り。

洗濯したばかりのジョンTシャツを身に着け街を練り歩く私達は駅コミュニティの調達班。一目私と逢つてみたい、逢つてお礼を言いたいという人も居たけれど私は固辞し続けた。この恐怖心を飼ひ慣らすにはまだ時間が掛かる。

彼女も無理に私をコミュニティの人々と逢わせようとしなかった。この外見の恐ろしさは彼女達も良く知っている。小苗と美香は「仕方ないよね」と寂しそうな顔で言っ

た。二人は私の存在をコミュニケーションの人々に知って欲しいと願ったが、傷付いて欲しいとは微塵も思っていないかった。有難い事だ、二人はこの一カ月で随分と私の人間性を理解してくれたように思う。

このデカイ図体に反して私の心は酷く臆病で、小心者だった。

日々は過ぎる。

徐々に移り変わる季節、春から夏へ——例え世界が変わっても時間の流れは変わらな
い。太陽がさんさんと輝き熱が支配する季節、空調も碌に使えないこの時代では脅威と
なる季節の一つ。冬よりはマシだろう、けれどマシなだけで厳しい事は厳しい。水の調
達も増えるし何より涼む手段が必要となる。そんな来る夏という季節に想いを馳せて
いる時——夢の終わりは唐突に訪れた。

始まりは一人の人間の訪問だった。

私が人間形態でベッドに座りただ何をする訳でも無くぼうつとしていた時。

だぼつとしたジョンTシャツを指先で弄って時間を潰していると、ガンガンガン！

と私の家の扉を殴り付ける様な音が室内に響いた。

そんな事は初めてだった、もしやゾンビが来たのかと人間形態からゾンビ形態に切り
替え、のぞき穴から外を見る。すると血を流した中肉中背の男が必死の形相で私の家の
扉を叩いていた。見覚えのない男だ、あの二人を除くとマトモな人間を見るのは酷く久

しぶりな気がした。

「ジョンさん！ ジョンさん！」

彼は私の名を叫んでいた、コミュニテイの人間だ！ 私は直ぐ理解した。

場所は恐らく美香と小苗に聞いていたのだろう、私は直ぐに鍵を開けてやろうとしたが寸前で動きが止まった。あの二人以外にこの恐ろしい姿を見せたくなかつた、コミュニテイの人間なら尚更だ。脳裏に怯えた二人の少女の姿が掠める。

なら人間の姿で対峙するべき？ けれど彼の背後にはゾンビがゾロゾロと迫っていた。彼は人間だ、ゾンビにとっては捕食対象でしかない。彼は必死に私の名を呼びながら扉を叩く、何かあつたのだ、緊急事態だ、私は荒れ狂う感情と切羽詰まつた現状に挟まれながら、きゅつと拳を握つて覚悟を決めた。

素早く鍵を開け放ち、彼を中へと招き入れた。

突然扉が開いた彼は半ば転がる様な形で玄関に雪崩れ込み、四つん這いの状態で私を見上げる。二メートル超えの巨軀に六本腕、それでいて三つの眼光は恐ろしいだろう。事実先程まで必死に私の名を呼び切羽詰まつた様子だつた彼は、サアつと顔を蒼褪めさせパクパクと口を開閉させた。その表情だけでどれ程彼が私を恐ろしく思っているのかが分かる、けれど彼は知らないだろう。私もまた、彼をとても恐れていた。

怖がられたくない、嫌われたくない——！

そして今にも絶叫し泡を吹きそうな表情で——彼は私が着ていた『ジョンTシャツ』に目を向ける。

瞬間、男の瞳がぐらりと揺れた。

その眼に僅かな光が灯つたのを私は見た。彼は叫びを上げようとした口をぐつと閉じ、何度か呼吸を繰り返すと私を正面から見据えた。

「ハ、コミユニティが……」

男は震える口調で言った。それから一度顔を俯かせ、ごくんと唾を呑み込む。そして再び顔を上げた時、男の表情に怯えの感情は無くなっていた。

「コミユニティがゾンビの集団に襲われています！ 助けて下さいッ！」

叫び、男の額からたらりと血が垂れた。

襲われた、コミユニティが、ゾンビの集団に。私は男が恐怖に打ち勝つたという衝撃より、彼の口から齎された情報に頭をハンマーでぶん殴られたようなショックを受けた。まるで私の安寧が膝から崩れていくような感覚、一つ一つ丁寧に作り上げた砂の城。それが世界の脅威によって切り崩されようとしている。

今すぐ駆け付けよう、助けなければならぬ。

ごく自然に私はそう思った。

私はまず男を家の中で匿おうと思った。けれど彼は痛みに顔を顰めながら私の胸元

に手を置いて行動を制す。そして徐に首を横に倒すと——齧られた痕を見せつけた。

手遅れだ、食われたのだ、私は思わず目を伏せた。傷口から唾液が入り込み、そう遠くない内に彼の体をウィルスが支配するだろう。私にはどうする事も出来ない。それは男も分かっているのだろう、薄く笑いながら男は首を振った。

「俺はもう駄目です……その内、連中の仲間になります、誰かがジョンさんに知らせなさい、きやいけなかったから、俺達じゃもうどうしようもなかったから——お願いです、コミュニケーションを助けて下さい、じゃなきゃ俺が……俺が此処で死ぬ意味がない」

男は自分が怪物に成り果てると理解していながら最後まで人間としての矜持を貫いた。その表情に怯えは見える、けれどそれ以上に自分の仕事を果たしたいという熱意があった。私は男の手を取り確りと握る、ちっぽけな正義感じゃない、情が湧いた訳でも無い、私は目の前の名も知れぬ男を心から尊敬した。

「ヤバくなったら、自分で「ケリ」をつけます……だから、お願いします」

彼はそう言つてズボンのベルトから黒光りする武器——拳銃を取り出した。銃刀法の名残から日本地区じゃ滅多に見かけない代物。弾倉は入っていない、最後の弾丸が薬室に一発だけ入っている。

「コミュニケーションの皆がジョンさんに助けを求めに行くつて言つたら、持たせてくれたんです、此処に来るまでに全部使っちゃったけど——最期に一発、自分用に残しておきま

した」

そう言つて男は引き攣つた笑みを浮かべる。無理矢理笑つたような歪な笑顔だ、それでも私にはその表情がとても格好良く見えた。

苗床になつても迷惑を掛けない様、ちゃんと家の外で死にます。男はそう言つて壁に寄り掛かりながら立ち上がった。私は彼の目を真つ直ぐ見て、それから外へと飛び出した。わらわらと群れるゾンビを巨軀で吹き飛ばしながら前進した、躊躇いは無かつた。助けを求められた、私にしか出来ない、例え最期だとしても彼は怪物の私に託した。希望を。

何かが私の中で囁いていた、芽生えていた。それは人間の頃に持ち合わせていた何かの様な気もするし、ゾンビになつてから生まれた新しい感情だつた様な気もする。ミチミチと私の顔面が嫌な音を立てていた。同時に肉と皮を引き千切る音、それは私の口元から。

引き裂かれた赤黒い皮膚と肉の向こう側に空洞が見えた。

「お」

音が漏れた、空気の抜ける音から僅かに声帯が震える。いや、声帯があるかどうかも分からない。ただ私の体が急激な変化を遂げている事だけは分かつた。全身が熱を持つ、表面が蠢いて蒸気を吹き上げる。その熱が行き場を求めて蒸気という形で外に放出

されていた。駆ける、駆ける、風の様に駆ける。アスファルトを蹴り砕いて全身に風がぶち当たるといふのに、ちつとも体は涼しくならない。

「——お——お——お——」

能面だった私の顔が形作られる。眼球が血走り人間の口に該当する部分がミチミチと皮膚と肉を引き裂いて現れる。今まで隠れていたのか、或は単に「必要だと思つたら創られたのか」、私には分からない。

ただ私は叫びたかつた、心の底から、奥から、全力で。

「おお——お——お——お——」

私という存在、その感情の爆発を表現したかつた。

「おおおおお——お——お——お——お——お——お——」

咆哮した。それは正しく咆哮だった。

全身の所々から蒸気を吹き出し血走つた三つ目で駆ける私、その口元には今しがた【完成】した歪な口。不揃いな歯に見えるソレは『ただの骨』、舌に見せかけたソレは単なる模造品。言葉を喋る事は出来ず精々咆哮をする程度の事しか出来ない、ただのハリボテ。

けれどそれで良かった、それが良かった。それだけで十分だった。

さながらダンプの突進。

六本の腕で体を守りながら全力で国道を駆ける。乗り捨てられた車、標識、信号、ゾンビ、諸共全て粉砕し突き進んだ。跳ね飛ばされたゾンビが宙を舞い、車が横転してひっくり返る、私が駆けた後にはくつきりと足跡が刻まれていた。

傍から見れば凄まじい光景だろう、この時の私は確実に我を忘れていた。否、正確に言うのであれば「怪物としての自我が人間の私を上回った」と言うべきか。兎に角、普段の何倍もの力が体に溢れ、私はそれを破壊という形で酷使していた。

駅へは一瞬だった、普段の半分以上時間を短縮した。交差点を凄まじい勢いで曲がりながら駅方面を見る。其処には群れとしか表現できない程の夥しい数のゾンビ。

当時は知られていない現象だったが、一部の地域では『クラウド^{群衆}』と呼ばれる現象だった。

ゾンビのベースは人間である、連中は決して馬鹿じゃない。もしそうならそもそも私など生まれていないだろう。連中は学んだのだ、この周辺に人間の集まりがあると。周辺のコミュニティは軒並み全滅してしまったのかゾンビの群れは駅に一点集中してい

た。

バリケードは破られたのか？ 応戦出来ているのか？ 退路はあるのか？

小苗は、美香は——無事なのか!?

私はそれらをぐっと呑み込んでアスファルトを蹴り碎く。最早ゾンビを殺す事を躊躇っている時間は無かった、自分のこの手で、確実に殺さなければならぬ。生者の為に死者を殺す、私は自分の胸——シャツに縫い込まれたジョンの文字を握り締めた。

群衆の後列、尻から一気に突っ込む。一息に五人前後のゾンビを弾き飛ばし、将棋倒しで前の方へとゾンビたちが倒れ伏す。そのまま倒れたゾンビは踏み潰し、さらに奥へ奥へとゾンビの海を殴り、掻き分け、弾き、やたら滅多らと前進。一人一人を相手にするつもりはない、五、六人をまとめて一つの塊として殴り殺した。

連中は私に見向きもしない、ただ目の前にある駅に行こうと前へ前へと進む。ねつとりとした血が私の拳にこびり付き、不快感が私の心を刺激する。

けれど止まる気はない、止める術もない。

咆哮し、ゾンビ共を殴り殺し、ただ進むだけだ！

「おおおおおオオオオオオオオッ！」

人の理性も欠片も感じさせない絶叫、咆哮。赤く発熱した皮膚に触れたゾンビは一瞬で吹き飛ぶ、六本の腕はそれぞれが鈍器だ、一撃でも食らえば骨ごと砕く。そして一分

も暴虐の限りを尽くせば入り口が見えた。既にバリケードは突破されている、中途半端に開いた入り口にゾンビ共が殺到していた。

幸いなのは入り口が小さい事か、もしバリケードが全部破られていたら今頃駅構内はゾンビで溢れていただろう。

これ以上ゾンビを入れる訳にはいかない——私は一息に跳躍すると、今まさにバリケードの隙間に入り込もうとしたゾンビを蹴り潰した。

私の脚力はちよつとした建物ならば飛び越えられる程の力を持つ。正に人外、その圧倒的な力と重量を頭部に食らったゾンビは体を折り曲げ、頭蓋の中身がアスファルトの上に飛び散った。そのまま着地し、周囲のゾンビ共を六本腕で殴り付ける。そのまま後続のゾンビにぶち当たって死にゆく屍を見ながら、咆哮。

此処はもう通さない。

その気概を声として叩きつける。びりびりと肌を伝わり脳髓まで震わせる爆音、それでも連中は一歩足を緩めるだけで、尚も私の背後にある隙間に殺到する。叫んで退かないのなら殴り殺す、ただ殴り殺す。

ぎゅつと拳を固めて正面のゾンビ、その顔を殴りつける。頭蓋を砕き脳髓をぶちまけ、後続のゾンビを巻き込みながら倒れ込んだ。

「ジョンヤーン！」

声が出た、頭上からだ。私は剛腕を奮いながら上を見た。其処には駅の屋上に立つ美香の姿。無事だ、無事だった！ 束の間私は時を忘れ歓喜の念を抱く、けれど彼女の顔は悲痛に塗れていて涙すら流していた。

私は一際大きく息を吸い込むと全力で腕を振るい、周囲のゾンビを軒並み弾き飛ばす。そして近くにあつた自動販売機を二本の腕で掴み、ソレをバリケードの穴を塞ぐように突き立てた。これで少しは時間を稼げるだろう。

再び屋上に顔を向けた私は地面を蹴り碎いて屋上へと向かう。足りない分は壁に腕を突き刺し、そこから更に跳躍。地面を蹴り碎いて降り立った私に美香は一も二もなく飛びついた。

「じよ、ジョンさん！ 小苗がッ……小苗があ……！」

号泣、そう表現するのが正しいだろう。

血に塗れた制服、きつとゾンビのものじゃない。そしていつも一つに括っていた髪は解けていて、彼女の背にはべつとりと血を吸った小苗のリュックサックがあつた。彼女はゾンビである私に抱き着いて泣き喚く、涙と鼻水を垂れ流してわんわん泣いた。何度も小苗の名前を呼びながら首を振った。

屋上に彼女以外の姿はない。

大凡の事情は把握した、恐らく——彼女が最後の生存者。

屋上へと続く階段、その扉がガングンと叩かれる。びくりと体を震わせる美香。下を見ればバリケードを崩そうと必死に押し込んでいるゾンビの群衆。押され過ぎて最前線のゾンビが潰れて圧死しているというのに彼らは進むのを止めない。

遅すぎた——その一言に尽きる。

たった数分で連中は五十人のコミュニティを壊滅させるだけの力を持っていた。それはそうだろう、連中は一体何人居るんだ？ 千か、二千か、三千か……途方もない数字だ。それでいて人間よりも強力な肉体、こうなる事は分かっていた。

だが救いもあった、バラバラと何か空気を叩く音。それがヘリコプターの音だと気付けたのは遠くにそのシルエツトが見えたからだ。私はその方向を指差せば美香が「あっ」と声を上げ、私は何か目印をと周囲を探し配管として壁に備え付けられていたパイプを引っこ抜く。ガコン！ と音が鳴り響き、丁度良いサイズに持ち手を握りつぶした後、それを彼女に手渡した。布か何かを撒きつけて振れば此方に気付いてくれるはずだ。

彼女が私の意図を汲んで動き出した瞬間、屋上へと続く扉がブチ破られた。

「っー」

「——」

私は駆け出す、そして今まさに屋上へと溢れ出そうとしたゾンビ共を蹴り戻す。ズン

！と凄まじい打撃音、体をくの字に折り曲げたゾンビが階段の方へと吹き飛ぶ。後続諸共転げ落ちていく様を眺めながら私は美香の方を見た。

涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔、その表情は絶望に塗れている。コミュニケーションを失った、仲間を失った、そして何より血を分けた妹を失った。けれどそれでも彼女は生きる希望を失っていない——生きねばならない理由が増えた。

私は階段でゾンビ共を蹴り戻す、彼女はパイプにシャツを巻き付け即席の旗を作り出す。「ごめんね、ごめんね」と何度も謝りながら美香は早苗の白いTシャツをパイプに巻き付けた。涙を流しながら彼女は立ち上がり、大きくその旗を振る。

大丈夫だ、必ず助かる。

声は出ない、代わりに吐き出されるのは重低音の唸りのみ。イライラした、むしろくしゃした、けれどソレに蓋をして必死にゾンビを押し戻した。けれど押し戻す度彼らは数を増やし、どんどん壁の様に押し込んで来る。ついには前面に死体のみが残り殴る隙間さえなくなってしまう。まるで膨張だ、ゾンビと言う一つの生命体の様に膨らんでいく。

バラバラとヘリが空を飛ぶ、そして美香を見つけた。

駅の頭上でホバリングを開始し美香は旗を手放した。カランと音が鳴って彼女はパイプから小苗のシャツを大切に解き取る。これで彼女は助かる、ヘリに乗って脱出でき

る。

——しかし、待てども待てどもヘリは降りて来なかった。

何しているんだ!?

私は巨大な壁の様にずんずんと押し込んで来るゾンビ共と競り合いながら、美香の上で停止するヘリコプターを睨んだ。その色合いから連合の救助ヘリだという事が分かった、側面のドアは空いている、安全ロープを着けた隊員の姿も見える——だというのに降りて来ない。

何故だ？

美香は困惑した、「どうして」と叫んでいた。そして私は漸く彼らの意図を理解した。

側面に立つ隊員の目は私を見ていた——私を恐れているのだ。

当然だった、何せこの身は異形のゾンビ、例えゾンビを押し留めていようと同類。敵か味方かで言えば敵だ、それも最悪の部類の。私は唸り声を上げた、此処に来て自分の存在が裏目に出るとは思っていなかった。

しかし自分のせいで美香が死ぬ——そんな結末は許容出来ない。

私は絶叫しながらゾンビの壁を蹴りつける。掛け値なしの全力、私の脚力と体重、ついでに咆哮も乗せた一撃。それは前面の死体をミンチに変え迫り来る千のゾンビ共を一拍押し返すだけの威力があった。

軸足の左足がズン！ とアスファルトに沈む、私は一息にバックステップを踏む。そして上に向けて何かを叫ぶ美香を腕に掴むと、三本の腕を使つて彼女を頭上高く持ち上げた。彼女が突然の事に悲鳴を上げるが、意図を理解すると必死にヘリに向かつて手を伸ばす。

助けられるなら早く助けてくれ！ お前達はその為に来たんだらう!!?

屋上の扉代わり、私という壁が無くなつた途端雪崩の様にゾンビたちが屋上へと殺到する。狙いは美香、しかし土台となつてるのは私。例え腕が三本だろうと彼女には指一本触れさせない。彼女を支える三本、残つた三本で近付いて来るゾンビたちを殴りつけ、へばり付いて来る奴は蹴り飛ばす。それでも彼女を持つ腕だけは微塵も揺るがない。手数が減つた分範囲で補う、倒れたゾンビの足をひつつかんで振り回す、即席の鈍器。体が折れ曲がつて使い物にならなくなるまで使い倒してやる。

ヘリは未だ迷っている、私達の上空十メートル前後の所で停止していた。いつその事跳躍して彼女を投げ入れるか？ そんな事を考えたが万が一を考えると怖くて出来なかつた。十秒、二十秒、ゾンビの猛攻は止まらない。

側面に居る男が何かを叫んだ——途端、ゆっくりとヘリが降下を始める。

遅い！ 私は内心でそう吐き捨てた。

「ジョンさん、ジョンさんー！」

「
!」
彼女は涙を流し、震えながら私の指をきゅつと握る。大丈夫だとも、安心して欲しい、絶対に無事に送り届けてやる。徐々にヘリが降下し彼女の手が辛うじて届かない範囲に留まる。安全ロープをフックに掛けた男の隊員が彼女に右手を伸ばした。もう片方の手には拳銃——その銃口は私の頭部を狙っている。

「っ、撃たないでッ!」

美香は隊員の手を掴み、次いで私に突き出されたソレを見てぎよつとした。そして叫ぶや否や隊員の銃を持つ手に飛びつく。それを受け止めながら隊員は困惑し、彼女を乗せたヘリは急速に空へと上がって行った。

そうだ、それで良い。

頭上から美香の声が聞こえた気がした、けれどヘリのローター音に掻き消されて聞こえない。私はイライラした、むしゃくしゃした、彼女を送り届けた途端蓋をしていた感情が溢れ出した。一体なぜ? 単純だった。

コイツ等が小苗たちを殺したからだ。

私が少しずつ、本当に少しずつ育んで来たコミュニティとの信頼を壊したからだ。

美香をあんな目に遭わせたからだ。

空へと消えて行くヘリコプターに向けてゾンビは殺到する。その真下に居る俺に向

けて手を伸ばす、土台にしようというのか？ この俺を。それが酷く癩に障った。

体が熱を発する、まるでマグマの様な怒りだった。自分が人間に嫌われるのも、ゾンビになったのも、あの日々を壊したのも、コミュニティを崩壊させたのも、小苗を殺したのも。全部が全部イライラした、悲観では無かった、怒りだけがあった、頭に來た、簡潔に言えば私は激怒した。

これまでにない程——激怒した。

感情が胸に滾る、熱として体を駆け抜ける、迸る怒りはエネルギーとして私の体を熱した。全身から蒸気が噴き出す、熱で皮膚が硬化し罅割れる。その間から蒸気は垂れ流しになる。けれど全然足りない、この程度では冷めない極大の熱。太陽を呑み込んだ様だった。

その熱は喉の奥から溢れる様で——丁度私は咆哮と言う形でそれを発散しようとした。

私は熱い熱い感情の塊を腹の底から引っ張り出し、怒りのままに口を開け——咆哮。

瞬間、世界が極光に包まれた。

口から吐き出されたのは咆哮などという生温いものではなかった。

反動で首が後ろに仰け反り、開け放たれた口から眩い光の線が走った。熱射、レーザーと言い換えても良い。まるで太陽の様に加熱された肉体から放たれたソレは私に向かつて来るゾンビ共を一掃し、屋上に続く階段諸共穿ち溶かし尽くした。

遙か彼方に見える山、途中のビル、それらに真つ赤な穴を空け極光は空に消える——そして爆散。私の放った極光を中心に炎の柱が立ち上る。ゾンビの体が溶け堕ち、宙に舞い、私の体という体から凄まじい量の蒸気が立ち上った。まるで衛星から撃ち落とす神の怒り、それに等しい超絶的な威力。爆音が鳴り響き音の壁が私と世界を打ち据える。

後に残ったのは数匹のゾンビ、そして扶れた建物群——真つ直ぐ線路の様に引かれた炎のレーン、その熱射跡。それが都市を横断する様に煙を上げていた。

「——おオ」

私の中にあつた感情が霧散していく。

熱が——引いて行く。

凄まじい蒸気を吹き上げながら太陽の様な熱が冷めていった。私の三つ目に映る光景は他ならぬ、自分が為した事。一体どれだけのゾンビを屠ったのか、どれだけ街を破

壊したのか。この身に宿る究極的な力、それを自覚し思わず膝を着く。

悲しくはなかった、嬉しくもなかった。ただ背後から鳴り響くヘリコプターのローター音が随分遠く聞こえた。

この日私は改めて認識した。

私はどうしようもない程、「怪物」なのだ。

私の纏っていたTシャツが熱焦げる、端々が茶色くくすみ煙をチリチリと煙を上げていた。ぎゅつと正面のジョンの文字を握り締める。熱で歪んだ文字、私の名前、それを握り締めたけれど温かくはならない、体は熱いのに心が酷く寒い。

私の理想が、焦がれていた。

☆

「おいおいオイオイ——何だアレ、ふざけてんのか」

ヘリコプターの中で待機していた隊員の一人、彼は血の気の引いた顔でそう零した。事実目の前で起きた事を上手く呑み込めず、彼のその言葉は全員の胸内を表現していた。それ程に衝撃的だったのである。

街の一部が消し飛んだ。

あの二メートル超えの大男が放った極光、レーザー光線の様な光は瞬く間に街を炎の中に沈め、ましてや山を一つ吹き飛ばした。向こう側に真ん中から抉れたように消失した小山が見える。炎の柱が立ち上りへりから見える街の景観はすっかり変わってしまった。地形すら変える破壊力、あんなものは最早「生物」なんて生温い存在ではない。兵器そのものだ、体内に戦略核を抱えた様な怪物だ。

あれ程怪物の名前を呼んでいた救助対象である少女も、持っていたリュックサックを強く抱き締め言葉を失っている。確か『ジョン』と言ったか、Tシャツを着た奇妙なゾンビだった。けれどそれ以上にその外見は恐ろしく——悍ましい。

あんな奴がいるなんて聞いていない。へりの中には重い沈黙が漂っている。ゾンビと言う存在が人類の天敵となつて三カ月、まさかあんな化け物まで出て来るとは思つてもいなかったのだ。ただ人より少し頑丈で、力を持つ普通のゾンビにすら押し負けているのである。仮に、仮にだが——あんなゾンビが世に蔓延る未来があるとすれば。

人類は滅ぶ、確実に。

「お嬢さん、アイツは一体なんなんだ？」

男は持つていた拳銃をホルスターに収納すると座り込んだ彼女に問いかけた。その体をベルトで固定し落下防止のフックを掛ける。彼女はされるがままだった、けれど血

に塗れたりユツクサツクと薄汚れた白いＴシャツだけは決して手放さなかった。

「彼は……彼は私の——私達の」

うわ言の様に彼女は眩く、俯いた顔をそのままにユツクサツクに顔を埋め、涙を堪えているのか肩を大きく震わせた。震わせたままユツクサツクを抱いたまま顔を上げ、男の方には視線を寄越さずへりの外を見る。燃え盛る街、その向こう側——ジョンの居る場所を。

「——恩人です」

その声はどこまでも細く——まるで縋る様な声色だった。

人とコミュニケーション

熱が籠っていた、溶け堕ちた建物群から立ち上る白色を眺めていた。街を焦がす蒸気は空高く舞い上がり消えて行く、膝を突いた私は呆然とソレを見ていた。ゾンビたちは既に消えており、ヘリが遠ざかった時点で興味を失くした様に散会した。

私は煤けたジョントシャツを掴みながら項垂れる。人の名残に縋って自分を保とうとしたのだ。身から吹き上げた蒸気は既に霧散し体温は元に戻っている。あれ程私を蝕んでいた怒りは消え去り、代わりに悲しみだけが残った。

日が暮れる。

太陽が沈み茜色の世界が来る、この荒廃した世界を美しい色合いで染め上げる。私は呆然とその景色を見ながら思った。

帰らなくちゃ。

シャツを掴んだまま私は立ち上がる、硬化した皮膚がパラパラと足元に落ち下から新しい皮膚が覗いていた。まるで私の人間性のようだ、人である事に固執する私の心が破片となって落ちていく。その中に在るのは、きつと私も認めたくない獣の本性——怪物

としての本懐。

ゆっくりとした足取りで帰路についた。走る気力もなかった、ぼつかりと胸に穴が空いた気分だった。世界はどこまでも茜色で残酷だった、振り向けば倒壊しかけの駅が見える。私の熱射によって屋上は抉られ酷い惨状、まるで私の怪物としての証の様で思わず顔を背けた。

創られた口から「おお」と音が漏れた、人間だったら何て言っていたのだろうか。

寂しい、だろうか。

怪物なのに。

可笑しな話だ。

家に帰るまで長い時間を掛けた、一步踏み出すのが億劫だった、体から生氣と言う生氣が抜け落ちていた。家に帰って玄関に入り、そこで何かを引き摺った様な血の跡を見て彼の存在を思い出した。玄関から伸びるそれは外に続いている、辛うじて見えるそれは家の外、丁度国道の向こう側に向かっていた。途切れ途切れのソレは良く見なければ分からない程。

そして血の痕跡を辿った私が見たのは倒れ伏した一人の男。建物と建物の間、路地、薄暗い空間。私にコミュニティの崩壊を知らせてくれた彼。

彼は頭部に一発、弾丸を撃ち込んだ状態で死んでいた。うつ伏せで、惨めに、身体中のあちこちを齧られた状態で。

また一人、死んだ。

私は何も言わず踵を返した、彼が死ぬ事は分かっていた。分かっていたけれど胸に込み上げる何かがあった。そして今度こそ帰宅した。扉に鍵を掛けて人間の姿に戻る、大き過ぎるシャツが体に纏わりつき、煤けたそれを細く小さな手で掴んだ。

キッチンに行くくと小苗と美香のお蔭で全く消費されていない食料と水が積んである、私はその中の一つ——携帯食料とも言えるブロック体の商品を手にとって開封、味気ないそれを指で摘まんで一口。久々に食べた食料はもさつとしていて、冷たくて、人としての実感を得るには余りにも無機質だった。

「寂しい」

今度こそ口をついた。

気付けば頬に何かが伝っていた、それは目元から流れる涙だった。

「寂しいなあ」

言いながら食い物を口に突っ込む。涙は止まらなかつた、食べる手も止まらなかつた。

私は人間であると誰かに声を掛けて欲しかった、抱きしめて欲しかった、私は私だと、

化け物なんかじゃないんだよという都合の良い理想を脳裏に描いた。食い物は味気なかった、不味かった、冷たかった、人と会話をする事の方が何百倍も暖かかった。

ポロポロと欠片が零れる、足元に落ちる、食べても食べても満たされない、なまじ一度人肌の温もりを知ってしまった為に、私は到底無機質な食べ物では満足できない体になつていた。

泣きながら食べた、なけなしの人間性を失うまいと、必死に掻き集める様に足掻き、食べ続けた。それでも心の穴は埋まらなかつた。人の真似事をしても暖まらなかつた。

誰も居ない街、私はまた独りぼっち。

☆

夏が来る、誰も居ない街に初めての夏が。

人類以外に猛威を振るう事が無いウィルスのお蔭で街は徐々に自然に覆われていった。育ち伸びる草々、ビルの表面に絡みつく蔦、苔の類。木々に取り付いた蟬が鳴く、音だけを聞けば以前の世界と全く変わらない——けれど其処に人の姿はない。

あるのは心を失った怪物と生きる屍のみ。

私は人の姿のままTシャツに包まって蹲る、暑さで脳が溶けそうになるものの空調を

つける気はない。ゾンビ形態ではものともしない暑さでも人の身では堪える、けれどその気怠ささえ今の私にとっては生きている証に他ならなかった。私は夏を暑がることが出る、汗は出ないけれど気力は削がれる、暑いと思える事に意味がある、だからまだ大丈夫。そう言い聞かせた。

「……食料と水、無くなっちゃったな」

あれ程あつた食料と水、キツチンに山の様にあつたそれらは殆ど消えている。初日の暴飲暴食が祟つたと言うのもそうだが、既にあの日から一月。特に飲料水の消費は凄まじい。相も変わらず心にはぼっかりと穴が空いたまま、けれど飲み食いすれば多少は気が紛れた。何より時間という最高の薬はこの時も私の傷を少しづつ癒してくれたのだ。ない物ねだりは出来ない、欠片となった人間性はそれでも未だに根付いている。

パキリと音が鳴る。

欠片がまた零れ落ちた。

「調達、行くか」

私は立ち上がる、立ち上がらなければならぬ。人との触れ合いを失くし食事まで失くしてしまったら本格的に私は「人間でいる事が出来なくなる」、そんな確信が心の中に在った。あの悪鬼羅刹と成り果てた暴走で知ったのだ、私は。

この肉体の人間性はゾンビと成り果てる一步手前、紙一重、薄氷一枚で区切られてい

るに過ぎない。そして行き過ぎた感情の暴走は怪物としての己を呼び出す。即ち暴虐と残虐の限りを尽くす怪物であり、それが己の本性であった。

私は人だ、人で在りたい——そうでなければ、私は。

一月ぶりに怪物と成る、全身を覆う赤黒い肌に辟易とする。けれどこれが最もこの世界で安全な姿である事を私は知っていた。六本の腕に三つ目、二メートルを超える巨軀、心なしか少しばかり大きくなつた様な気もする。洗濯したジョンTシャツ、それを着たまま外に出る。所々焼け焦げて煤けたソレはポロポロだ、けれど私にとつては何物にも代えがたい宝。きつと私は死ぬまでコイツを持ち続けるだろう。

外に出た途端、家の中とは比較にならない熱気が体を覆い尽くした。太陽の光は熱く、ゾンビ形態であつても思わず呻いてしまう程。

「……………おオ」

口から吐息が漏れる。歯を模した骨と模造品の舌、それらをギチギチ鳴らしながら歩き出す。足は自然とスーパーマーケットに向いていた、初めて彼女達と逢つた場所だからだろうか。まだ何かに縋ろうとしている、私は人として生きる事の出来た名残を求めて歩いた。

スーパーマーケットは相変わらず乱雑としていて埃っぽい、四ヶ月前より外壁に蔦が生え揃い苔も見える。このままでは店内に樹でも生えてきそうだ。けれどそれはそれ

で良いだろう、中々ファンタジーな光景だ。

陳列棚を順に漁って回るが、あの数ヶ月で粗方漁り終えてしまったせいも飲料水も食事も見つからない。ふと周囲を探っていると毎回律儀に支払っていた私の金銭が視界に入る——それを見た私は衝動的にレジを殴り付けようとして、寸前で拳を止めた。

何か制御できない激情があつた、まるで底なしの様に湧いて出る黒い感情。

風圧で札束が宙を舞う、私は慌ててそれを拾い、レジの上に戻した。

泣きたくなつた、何で私は彼女達との名残を自ら壊そうとしたのか。自分でも分からなかつた、黒い衝動だつた。ゾンビ形態でなければ涙の一つでも流れていたかもしれない、どんどん人間らしい自分が消えて行く、無くなつていく、それが恐ろしく、同時に悲しかった。

私は哀愁の漂う背を晒しながらスーパーマーケットを後にする、周囲のコンビニやマーケット系列、飲食店などを当たつた。もうこの街にコミュニティは存在しない、だから食料や飲料も他に取られる心配がない。尤も、私としては取ってくれる存在が居た方が有難かつたのだけれど。

誰かを抱えずに歩くというのは寂しかった、空いた四本の腕が何となく空虚に思えた。

適当に確保した籠にありつただけの食糧と水を詰めて家に運ぶ。それを何度か繰り返

し夕方、キッチンに山の様に再び備蓄を拵えた私は最後の一巡に向かった。出来るだけ外には出たくなかった、誰にも逢わないと分かっているのだから、せめて自分の殻に籠って微かな人間性を保とうとした。

人を探す為に住処を移すという選択肢はなかった、私はあの家に「自分の人間であった頃の記憶」を見出していた。かつて自分は人間だったと言いつけさせるように、あの場所です生活する事によって自分の人間性、その輪郭をなぞったのである。

今日の調達はこれで最期にしよう、そうすれば数週間は家に籠って居られる。

私はそんな事を考えながら近場のコンビニに向かう。コンビニは天井が然程高くなく頭部ストレスだが問題無い。店内は荒れ放題で大抵の物は取り尽くされている、けれど所々に取りこぼした食料、水などがあって私はソレを探していた。

ギイと扉を開く、嘗ては出迎える為に鳴っていた電子音さえ聞こえない。私の向かったコンビニも例に漏れず荒らされている。そして珍しく店内にゾンビが一体、苗床となった死体なら珍しくはないが建物内に居座っているゾンビと言うのは珍しかった。

けれどもまあ、珍しいだけで完全にゼロという訳でも無い。私はソイツを無視して飲料水のある区画に目を向ける。扉を開いた音で分かったのだろう、ソイツは私の方をゆくりと振り向き——ぎよつとした。

「——」

そう、ソイツは私を見て驚いたのである。

ただ私を見て興味を失い、視線を逸らすならば何も変では無かった。音に反応し、人間でない事を確認した上で目を逸らすのは連中の行動で良く見られる行動だ。

けれどそのゾンビは私を見て、あろう事か「驚いた」のである。

まるで、『こんな奴、初めて見た』と言わんばかりに。

私は有体に言つて疑つた、まさかと思つた。けれどあり得ない話でもないのだ、何せ『私』という一つの実例が存在しているのだから。だから例えば仮に、私以外に『理性』を持ち合わせているゾンビが存在する確率は——ゼロではない。

妙な胸騒ぎがあつた、高揚感と言ひ換えても良い。

じつとソイツを見つめる。

そのゾンビは女性だった、元々OLだったのかスーツを着ていて外傷らしい外傷は存在しない。もしかしたら苗床の粘膜感染か空気感染にやられたのかもしれない。髪は肩ほどで顔色は蒼褪めている、それがゾンビなつた弊害なのか単純に私を見たからなのかは分からない。兎に角じつと観察した、果たして有象無象の一匹なのか、それとも私と同類なのか見極めようとした。不意に一步、私は踏み出す。

瞬間、彼女は一步後退つた。

確定だった。

私は一も二も無く陳列棚を腕で薙ぎ払い、女性の方へと踏み込んだ。まるで獲物に飛び掛かる狩人の様に、素早く躊躇のない動きだった。件の女性ゾンビは私が飛び出した瞬間青かった顔を白くまで悪化させ、喉を引き攣らせながら壁際にまで飛びずさる。しかし体のサイズも筋力も、何もかもが違う。私から逃げられる道理はなかった。

「——お、オオ」

「! ! ! ?」

ゾンビの目前まで飛び込んだ私は彼女の顔を覗き込む様に身を乗り出す。私の三つ目にじつと見下ろされた彼女は肩を震わせながら視線を右へ左へ忙しく動かし、恐怖に表情を引き攣らせていた。私の体は最早ひとつの壁である、六つの腕を広げた私の左右を抜ける事は難しい。それが分かっていたのだろう、彼女は恐ろしさに震えるばかり。

感情が豊か過ぎる、表情があり過ぎる、ゾンビとして見るには彼女は余りにも——人間の間であり過ぎた。

彼女が私を見る目は怪物を見る目だ、ゾンビと疑っていない瞳だった。私は何とか自分がある事を伝えようと思った。いや、私はゾンビだが——内面として人間の精神を残していると伝えたかったのである。

人間の姿に戻って話しかけるのが手っ取り早い、そうだ、それが良い。私はそう思っ

た。けれど直前で思い止まる、巨大なゾンビが人間になる。

それではまるで「人がゾンビになった」のではなく——【ゾンビが人になった】様では無いかと。

イメージは大切だ、特に初対面ならば。私はこれ以上彼女に不気味に思われたくなかった、それにゾンビに成り果ててしまった同類の前でこれ見よがしに人と成るのは何か要らぬ不満を買ってしまいそうで恐ろしい。

理性を残したゾンビならば人の温もりこそ感じられないかもしれないが、今の私の精神を慰撫するには十分な様に思えた。

私は必死に目を伏せて体を震わせるゾンビを見る、ゆっくり、緩慢な動作で後退った。これ以上怖がらせない様に、威圧しない様に心掛ける。後ろへ一歩一歩下がっていく私をゾンビは不安げな目で見守っていた。

そしてある程度距離が離れた所で扉を破碎する勢いで外に飛び出す。脱兎の如くという表現があるが正にソレだ、私はゾンビに背を向け一目散に外に走り出した。彼女の方は見なかった、兎に角「人間にならなければ」という想いに支配された。

ゾンビへと豹変してしまった人間が考える事は一つ、私はソレを良く知っている。自

分以外に理性的で会話の出来る存在がいないと、まず酷く心細くなる。そして自分の体の冷たさに愕然とし温もりを求めるのだ。或は自分はまだ大丈夫だと言い聞かせる為に嘗ての生活の名残を追う、私にとっては食事がソレだ。

兎に角安心したいのだ、自分はまだ『マトモ』だと言い聞かせたいのだ。独り善がりな妄想かもしれない、けれど強ちの外れでも無いと思った。ゾンビに成り果てた人間の心境は良く知っている——よく理解している。

私はゾンビ二周辺のゾンビを蹴散らすとゾンビ形態から人間形態へと切り替えた。瞬間、熱気が体を包んでくらりと視界が揺れる。人の体は脆弱だ、これでも元の体より大分マシにはないってこういうのに暑さは私の体を蝕んだ。汗が流れない事も一つの原因だろう、けれどそんな事に弱音を吐いている時間はなかった。何度か両手足を動かす、「あー、あ」と声の調子を確かめる。まるで後ろ帯の少女の様に何度も何度も確かめた。それほどまでに必死だったのだ。

私は人間の姿のままゾンビ二の中を覗き込む。其処には私の破壊した陳列棚を立て直し、半泣きでなにやら探し物をしている件のゾンビが居た。彼女は出入り口の方を向きながら床を探っている。商品か何かを漁っているのだろうか、今の私では分からない。

見た目は人間、けれど中身は完全な怪物。

私は彼女に人間としての自分を見せる事によって、その精神を慰撫しようと考えた。そして同時に元人間である彼女と交流を行い、失ってしまった過去の代替としようとしたのだ。

「あの」

「――！」

私はコンビニを覗き込みながら声を上げた。瞬間、物凄い速さで此方を振り向くゾンビ。きつと久々に聞いた人の声に反応したのだろう。私は彼女の姿を視界に捉えながら、あえて『しまった』という風な表情を作った。

彼女に接触する事が私の目的だったが、先の大男と今の私は別人であるという形をとらなければならぬ。無用な不満を抱える気はない、私はゾンビとしての私を一時的に切り捨ててまで誰かとの交流を欲した。

わざと怯えた風を装って一歩後退る、正に彼女が『人間だと思つて声を掛けた』体で。

「――！」

「つ、あ……ッ」

彼女は私が人間だと分かると倒れた陳列棚を飛び越え、私の目の前に飛び出した。けれど私に触れるかどうかというギリギリのところまで踏みとどまり、表情を万華鏡の如く変えながら中途半端に手を伸ばす。

普通の人間からすればその光景は恐怖そのものだろう、私もあえて恐れている風を装う。

けれど彼女の行動は正に私の焼き増しだった、今日の前のゾンビが何を考え、どんな心境なのか手に取る様に分かる。歓喜、悲しみ、後悔、躊躇——やっと出会えた人間、嫌われたくない、怖がられたくない、けれど話したい、触れたい、私は危険な存在じゃないのだと知って欲しい。

そんな思いがぐるぐると回って動けなくなる、どうすれば良いのか分からない。彼女がゾンビに成り果ててからどれ程の時間が経過したかは分からない、けれど恐らくゾンビに成り果ててから経過した時間は孤独で寂しい物だっただろう。己の人間性をすり減らしてしまふ程に。

「っ、は——あ、の」

何かを口にしようとして喉を引き絞る、何度か咳を繰り返して喉に手を当てる。彼女は言葉を発しようとした。けれど冷たく硬直した喉は上手い具合に動いてはくれない。恐らく今まで使つてこなかったのだろう、それを私と意思疎通を図る為に無理矢理にでも働かせようとしている。

何度も何度も繰り返し彼女は喉を動かす、そして不器用な言葉を漸く絞りだした。

「私は、悪いゾンビ、じゃ、ないよ」

☆

人と——正確にはゾンビだけれど——話すのは随分久しぶりだった。彼女は名前を「セツナ」と言うらしく、自分の名前を忘却していない事を少しだけ羨ましく思った。彼女の目の前から逃げ出さなかった私は『彼女は理性を残したゾンビ』だと納得した様子で名を名乗る。普通の人間なら一目散に逃げている場面だろう、肝が据わっているとかがそういうレベルではない。

けれど兎に角目の前の人間に無害と認められたいと必死な彼女は微塵も疑わなかった。きつと私も同じだ、同じような場面に遭遇したら少しも疑わず喜びを露わにするだろう。

私は名前をジョンと名乗った。幸い容姿が容姿である為疑われる事は無かった、確かに見た目だけならば日本人ではない。歳も随分若い様に思う、精々十代ティーンである。服装はダボダボのジョンTシャツ一枚、失念していたが私は家に居た時の恰好そのままだった。ハッキリ言つて露出狂と同じレベルであったが家にゾンビが入り込んできて着の身着のまま逃げ出したと苦しい言い訳をした。裸足である為微妙にタイルの冷たさが心地良い。

「それは……大変だったね」

会話を重ねる毎に少しずつ流暢な言葉を取り戻すセツナが痛ましそうな目で私を見る。嘘も嘘、真つ赤な嘘だ。けれど罪悪感や後悔は少しも覚えなかった、彼女とこうして話せる事に嬉しさが勝った。

「セツナさんは、その……どうしてゾンビに？」

「……最後の記憶は会社に行く途中だったかな、普通に通勤中だったと思うのだけれど、気付いたらゾンビの中で突っ立っていて——外はこんなだし、私は何か凄い顔色悪くなってるし、一週間位此処に引きこもっていたの」

「一週間ですか」

私より随分遅い、ある意味意識を取り戻したばかりと言っても良かった。彼女は頷きながら、「本当にもう、駄目かと思った、もしかして意識があるゾンビとか生存者とか諸々私だけ？　って思っていたから」と嬉しそうに笑った。その気持ちはよく分かる、痛いほどに。

「あぁつと、ごめんね長話しちゃって、ゾンビの中って言っても扉はこんなだし、出来れば安全な所に行った方が良いね……取り敢えず移動しない？　私なら多分、ジョン君の家に居るゾンビも追い払えると思うんだけど」

「良いんですか？」

私は少しだけ驚いた様子で彼女を見る。するとセツナは「お姉さんに任せなさい！」と自分の二の腕を叩いた。

白くか細い腕である、とても強そうには思えない。いや、しかし彼女とて私と同じ類の存在、「ゾンビ形態」を持ち合わせていても何ら不思議では無かった。私はそれを見越して——という訳ではないが、頷いて見せる。

暫くは彼女と共に過ごそう、その間私のゾンビとしての側面は封印する。それだけの価値がこの交流には存在する、そう信じていた。例えそれが傷の舐め合いだとしても。

☆

美香は絶望の底に存在した。生きているだけで儲けものだという人も居るだろうが、彼女にとっては其処こそが生き地獄に他ならなかった。コミュニティの仲間達は残らず死んだ、血を分けた妹を失った、家族が皆死んでからは妹の小苗だけが私の心の支えだった。

そして大きく心優しいゾンビは——もう私の傍にはいない。

「寂しい」

ボソリと呟いた。

場所は連合の持つ日本区第六駐屯地、辛うじて難を逃れた人たちが集まっている、恐らくこの付近では一番大きなコミュニティだろう。避難民、連合兵も併せて総人口は千人以上、尤もこれは美香の予想に過ぎず実際より多いか少ないかは分からない、兎に角それ程大きな場所に美香には見えた。実際大きいのだろう、何より今まで見た事も無い様な兵器が沢山ある、戦車にヘリコプター、四脚歩行車両など、モップにナイフを括りつけて戦っていた私達とは大違いだ。

この駐屯地に連れて来られた美香は仕事と部屋を割り当てられた。流石に軍隊と言えどこんな状況では人手が足りないのだろう、動ける人間は何かしら仕事を割り当てられる。若く健康的な男性、もしくはは女性なら問答無用で索敵・警邏・調達のどれか。それ以外は基地内部の雑用だ。バリケードの製作や炊事洗濯掃除、基地内部に畑もあるのでもその管理、物資の確認に医療知識があるのならそちらも、仕事は美香が思っているよりも多い。

最初は美香も警邏部門に配属される予定だったが、彼女の服装を見た連合兵が年齢を聞きだし十六歳と判明、そして彼女は駐屯地内配属となった。流石に高校生を危険な場所に送り込む程切羽詰まっていはいないらしい、美香としては別段、警邏だろうが調達だろうが構わなかったのだけれど、彼等からすると今の美香は酷く情緒不安定に見えた。

それはそうだ、何せ仲間は全員死んで妹も亡くなった。唯一寄り添えた優しいゾンビも今は彼方。

割り振られた会議室、今は内部に布団を敷いて避難民の住居とされている。今部屋には誰も居ない、十数人が布団を敷いて寝る事が出来る大きさの会議室はがらんとしていた。皆割り振られた仕事に精を出している。しかし美香は一人何をする訳でも無く、部屋の隅で膝を抱えていた。

昨日救出された美香には三日間の休養が言い渡されたのである。流石に心身共に疲弊した美香に今すぐ働けという程連合も鬼では無かった。然るべき救助者には然るべき休息を、と。

彼女は今、その休養期間に在り一人体と心を休めていた。しかし三日で治る程の傷かと聞かれれば——恐らくもっと長い時間が必要だろう。体の方は兎も角、心は深く傷ついている。けれどそんな状態の人間は珍しくない、そして今の連合兵に体では無く心の傷を負った人間にただ飯を食わせるだけの余裕はなかった。故に三日、それが彼女に与えられた再起への時間である。

此処の人達は暖かい、言う言うの体で生き残った美香を優しく出迎えてくれた。皆が皆誰かを失っていた、自分だけでは無いと嫌でも理解させられた。だからこそ同じ傷を持つ美香に優しく出来た、ある意味傷のなめ合いと言っても良い。彼等にとっては此処

が第二のコミュニティ、つまり家なのだ。

けれど——そう美香は思う。

膝に顔を埋めて、此処に来てから片時も離さない血塗れのリュックサックを抱いて思う。

美香にとってコミュニティとはあの場所だけだったのだ、感染爆発が起きてゾンビが歩き回る世界になっても美香と小苗はあの街を離れなかった。何故か？ あそこが故郷だったからだ、あの街で生まれ育ち、今は亡き両親との思い出が詰まっていたからだ。「帰りたい」

あの街に、こんな世界になる前の街に。

それは小苗の前では決して吐かなかった弱音、独りぼっちになった美香は姉という殻を脱ぎ捨て等身大の自分に戻った。瞬間、ぐらりと自分の中の芯が揺らぐのを感じる。今までは何とか気丈に振る舞う事が出来た、小苗を守らなくちゃと、たった一人の家族だけは私が守らなくちゃと気を張っていたから。

けれど美香は失念していた、たった一人の家族——それは小苗にとっても同じなのだ。

彼女が妹を想うように、妹もまた姉を想っていた。

その結果がこれだ、姉は生き残り、妹は屍と成った。

一人残された姉は一時の生存欲を忘れ項垂れる。けれど彼女はまだ幼く、自殺を考えるには余りにも恐怖が勝った。恐ろしいのだ、怖いのだ、死ぬという事実がどうしようもなく。ならどうする？ どうすれば良い？ 死ぬ勇氣はない、けれどこの寂しさを一人で乗り切れると思う程——強くもない。

誰もが過去に囚われている、美香もまた囚われている。

「帰ろう」

口から出た言葉は自分が思った以上に力強かった。先程のか細い声とは違う、しつかりと目的を持った人間が発する声だった。声に出してみると存外悪くなかった、自分の考えを確固たる意志を持って声にする、この儀式めいた行為を美香は繰り返した。「帰ろう」もう一度呟く、体の奥から氣力が漲って来る。

「帰って、ジョンさんに逢おう」

美香はそう独り口にする。

あの、恐ろしくも心優しい怪物に逢いに行こう。外見は確かに悍ましい、初めて見た時は此処で死ぬのだと思った程。けれど彼には人としての理性と優しさが残っている、私達を決して襲わないし見捨てない。最後の瞬間、彼が激怒し奮闘した光景を今でも憶えている。

そう考えると無性に彼に逢いたくなつた。

過去の私を知る存在と逢って、この孤独感を癒したかった。存外自分は独りでは生きていけない人間なのだと思ふ。その為に安全な場所を捨てるのだ、我ながらトチ狂っている。

けれど美香は知っている、彼女だけは知っている。

ジョン・ドウと呼ばれる怪物は人一倍優しく、心配りで、強くて——どうしようもなく「寂しがり屋」なのだ。

他ならぬ美香は知っている。

逢いに行こう、ジョンさんに。

この大きな基地より彼の傍の方が何倍も、何百倍も安全な様に感じられる。何より美香が逢いたかった、彼に。そして彼も私を無下にしないでだろうという確信があった。だから逢いに行くのだ、私から。

彼は臆病だった、人の多いコミュニティに寄り付こうとしなかった。その癖裏から支援する事を厭わない、心優しい人。だから待つていても彼が此処にやってくる事は無い。

まずは調査班に志願しよう、外に出る機会を掴むんだ。

美香は自分にそう言い聞かせて立ち上がった。小苗のリュックサックを背負って目に強い光を灯す、意志と言う名の強い光だ。もう現実に心折れ、失意に沈む美香は居な

い。立ち直った訳ではない、今でもコミュニティを失い妹を亡くした後悔と悲観はこびり付いている。

けれどそれを理由に膝を抱える事はもうないだろう。

「帰るんだ、私の街に——コミュニティに」

見慣れた影

セツナとの交流関係はますますと言った所。お互いつかず離れず、この世界では丁度良い具合のパートナー関係を結べていると思う。

彼女は自分がゾンビだからとどこか一步引いた場所にいるし、私もまた彼女に対して嘘偽りを続けているという気まずさから深くは踏み込まない。それがある意味、彼女がゾンビだから腹の底までは信頼しないという「人間らしさ」を演出していた。

私とセツナが出会ってから一週間ほど、トントン拍子で私達は半同棲生活をする事になった。家のゾンビを追い出した後——と言っても元々が嘘なのでゾンビなど居なかったが——彼女の提案で私の家に彼女を住まわせる事にしたのである。曰くゾンビは危ない、超危険、なので身を守る存在を近くに置くべきだと。私自身一步退いてしまう様な気迫で彼女はそう言い切った。

その超危ないゾンビというのに自分も含まれている事に彼女は果たして気付いているのか、恐らく無意識の内に自分をゾンビという存在と認めていないのだろう。私もその危ないゾンビの一員なのだけれど。

恐らく漸く出会えた人間を死なせまいと必死なのだ、その気持ちはよく分かる。何せ私もゾンビ達から人間を守ろうとした側だ。ゾンビ形態から見ると人間の何と脆弱な事。

私の空間に他人を入れるという事実と思う所がない訳ではなかったけれど、この関係を破綻させる位ならば多少の我慢のしどころと受け入れた。

「ジョン君、今日は調達どうしようか？」

「そうですね……」

リビング、ソファに座ったまま所在なさそうに手を遊ばせるセツナ。彼女の言葉に私は補給食を齧りながら思案顔で窓の外を見た。外は快晴、食料調達から一週間は引きこもって彼女と話に華を咲かせた。久々の会話は酷く心を落ち着けた、何も無い宙に向かつて言葉を吐き出すより何倍も幸福感に包まれる。自分の言葉に何らかの反応が返って来ると言うのは実に良い。

そして彼女と同棲を始めてから『人間のフリ』が随分と上達した。暴飲暴食は無くなったし、定期的な食事を摂るようになった。夜になれば膝を抱えてベッドの上に座るのではなく、ちゃんと布団を被って横になる。実際に寝る事はないけれど横になって目を瞑るという習慣を身に着けただけで随分と朝を晴れやかに迎えられるようになった。

人と同じサイクルで日々を過ごしているという実感が私の精神を慰めているのだ。

実際、彼女も私と一緒に暮らす様になつて余裕が出て来たように見える。どこか切羽詰まった、危うい状態であつた彼女は朗らかに笑つて日々を過ごしていた。

自分を人間だと思ひ込める環境は私達にとつて唯一無二の薬だつた。その笑顔の理由は良く分かる、何せ他ならぬ私を通つた道だ、ゾンビと人の二面性を持つ私だからこそ彼女の内面を理解する事が出来た。

「籠つてばかりだと息も詰まりますし、食料調達に行つてみましょうか」
「うん、分かつた、護衛は任せて！」

私が外の天気を見ながら領けば、彼女は立ち上がつて誇らしげに胸を張る。護衛、今の私は文字通り人間そのもの。この形態では大した力は発揮できない、何せ強靱な皮膚も筋繊維も持ち合わせてないのだ。勿論、口からビームを吐き出す事も出来ない。恐らくゾンビ形態ならば銃の弾丸を幾つ喰らつても生き残れるだろうが、この状態では一発の弾丸で死にかねない。

彼女の護衛という言葉は強ち間違つていなかった。私をゾンビと言う脅威から守る盾、彼女は自ら進んでその役割を買つて出る。人の役に立ちたい、そうする事によつて自己を確立し心を慰めたい。

私も同じだ。

「場所は どうする？ 私の居たコンビニとか行つてみようか」

「いえ、実はちよつと心当たりがありました、近場のスーパーマーケットから歩いて五分程の場所にドラッグストアがあるんです、薬品もそうですが食料品とか飲料も売っているのです、其処に行つてみようかと」

「ん、そつか、分かつた」

快く頷いてくれるセツナ。私は最後の一口を噛み砕くと調達に向かう為の準備をする。ゾンビ形態なら着の身着のまままで問題なかつたのだが、人間として外に出るのなら相応の準備が必要だつた。

多分この体の事だ、噛まれても全く問題はないのだろうけれど一応警戒しているフリはする。フィルター付きのマスクに護身用のロッド、警棒とも呼ばれる携帯武器。少量の食糧と水、包帯と消毒液、ライトが入ったりリュックサック、後はジーパンにTシャツを着込んで準備オーケー。調達に赴くための装備としては大分心許ないが、その辺りはセツナを信用しているという形をとる。

小苗や美香はコレに加えて怪我をした時用の各種医療品、使い捨てのペンライト、コミュニケーションに知らせる為の発煙筒、浄化タブレットなどを携帯していた。正直サバイバル知識だけなら彼女達の方が上だろう、ゾンビとしての側面は幸か不幸か私にサバイバル知識を与える余地を残さなかつた。

「すみません、お待たせしました」

「全然、じゃあ行くっか」

「はい」

寝室からリュックサックを持ってリビングに出て来た私は、ソファに座って準備を待っていたセツナさんに一声掛ける。彼女と一緒に家を出ると太陽光が一気に肌を刺激した。ゾンビで外をうろつく事に慣れ過ぎたせいか、未だに温度の変化には弱い。

「二応離れないでね、無いとは思うけれど襲われたら大変だから」

「ええ」

家から少し離れた場所にたむろするゾンビ達。けれど彼等はチラリと此方を一瞥する事はあつても襲つて来ない。いつか私が美香や小苗を抱えて移動していた時の様に、人間形態であつてもセツナと一緒に居る時は襲われる事が無かつた。

きつと何か法則性があるのだ、私はそう思った。

「けれど不思議だね、何で私と一緒に襲つて来ないんだろう」

「存外、私もゾンビの仲間だと思われていたりして」

「ははは、それはないよお」

並んで歩きながら私がそう口にすれば、セツナは冗談だとばかりに笑い飛ばす。それが本当だと彼女が知ったらどうなるだろうか、怒るだろうか、失望するだろうか、ぶるりと私の背筋が凍った。一時の安寧を得る為とは言え、今更人のフリをして彼女を騙し

ている事が後ろめたくなった。我ながら何とも軸のブレるダメ人間か。

「今更だけどジョン君、日本語とても上手だよ、外国人だとは思えない位」

「……ええ、まあ、日本に住んで長いですから、生まれて直ぐにこつちに来たんです」

「へえ、ずつとこの街に居たならどこかで逢っているかもね、ジョン君位の美人さんだったら忘れそうにないけれど」

「どうでしょう、小さい頃は他の街に居ましたから、この街に越して来たのは中学生辺りだったと思います」

「じゃあ今は高校生くらいか！」

「そう、なるんですかね？」

呼吸をする様にペラペラとある事無い事喋り出す自分の口に関心する。良くもまあそんな嘘ばかり吐き出せるモノだ。これも一つの才能なのだろうか、こんな才能ならば要らなかつた。セツナは私を疑っている気配を微塵も出さない、あるがままを受け入れる、そう言えば聞こえは良いが彼女のソレは盲目である様に見えた。

他愛もない雑談を交わしながらドラッグストアまでやって来る。車で来ればそれに近い距離も歩きだと大分遠く感じる。荒廃した店は乗り捨てられた車と僅かなゾンビに彩られ、地面や建物の隙間から植物が顔を覗かせていた。

まだ半年も経過していないというのに、人が居ないというだけでこれほど人工物は朽

ちるものなのか。

「このお店です」

「大きいね、これなら色々調達出来そうだよ」

「ええ、ついでに日用品なども調達出来ればしてしましましょう」

半開きのまま停止している自動ドアを潜り抜け、店内へと足を踏み入れる。中は少し埃っぽかった、念の為マスクを着用した私はライトを使って苗床が無いか確認する。外ならば苗床の飛ばすウィルス——私達は胞子と呼んでいた——を目視する事は難しいが、室内であれば多少色の違いに気付く。苗床が二体、三体と増えて濃度が高くなると空気が僅かに黄ばむのだ。

店内は広い為全て見て回る事は出来ない、それでもぎつと一周し崩れた商品を跨ぎながら安全を確認した。

「……大丈夫そう、ですな」

「うん、ゾンビは居ないね、じゃあ物資集めしようか」

セツナはそう言って家から持ち出して来た空っぽのリュックサックを下ろす。そして地面に散らばった手付かずの医療品や携帯食料、飲料などを詰め込み始める。一応消費期限などには目を通して様だがこの世界になってから大分経過している、もう期限が過ぎている商品が殆どだった。

「ジョン君はさあ、食べ物なら何が好き？」

「え、食べ物ですか？」

「うん、そうそう」

倒れた陳列棚から商品を選別しているセツナは手を動かしながらそんな事を聞いて来る。私も彼女に倣って近くの冷凍庫だったモノを漁って、好きな食べ物という単語を頭に浮かべた。正直この体になってから好きな食べ物なんて意識した事がなかった、なにせ味わって食べる様な事はしなかったから。じゃあ生前好きな食べ物は何だったかと言われれば——もう憶えていない、それが欠けてしまった記憶なのか、それとも単純に忘却してしまっただけなのかすら分からなかった。

「……たこ焼き、ですかね」

だから私は散らばった冷凍食品、そのパッケージを見ながら適当な答えを口にした。指に触れたパッケージから冷たさは伝わってこない、電気が止まってしまった今では殆ど全滅だろう。中はきつとカピカピ、だから私はもう食べられそうにない食品を挙げた。

「あゝ、たこ焼きかあ、良いねえ、食べたいなあ」

「海にでも行つて捕まえて来ますか、蛸？」

「いやあ、そこまでしなくても良いよ、それに私はもう食べなくても生きていける体だし

なあ」

セツナはそう言つて自分の腹を撫でる。彼女は空腹という感覚を忘れかけていた、恐らくもうずっと食べ物を入れていないのだろう。食べられない事はないのだ、私と同じで食べようと思えば普通に食べる事も出来る。

けれどセツナは食料の貴重さを知っているし、私の取り分が減ることを恐れて頑なに食事を摂ろうとはしなかった。

「前にも言いましたけれど、調達は二人でやっている訳ですから、セツナさんも食べたいだけ食べて良いんですよ？」

「いやいや、私は食べなくても全然平気だけどジョン君は違うでしょ？ 食べなきゃ死んじゃうんだから、重要度が違うよ、娯楽で君の分を減らすなんて私には出来ない」

「……セツナさんは優しいんですね」
「ただ意地を張っているだけだよ」

背中越しに会話をする、彼女の表情は見えなかったけれど何となくどんな顔をしているかは分かった。私は比較的食べられそうなものをリュックサックに詰めながら奥の方を指差し、「ちよつと向こう側の物資見て来ますね」と口に出した。

セツナさんは軽く頷いて見せ、私はリュックサックを背負つて医療品や栄養サプリメントなどが散乱している区画に入った。食料も大切だがこういうサプリメント、医療品

の類も大切だ。食料品で補えない栄養素はこういうモノで摂取するしかない、尤も私には必要のない物だけけれど。

けれどももし万が一、生きている人間が見つかったら。

そんな想いで私は物資をリュックサックに詰め込み始めた。

そんな時だった。

バキン！ と金属の弾ける音、そして木霊する銃声が聞こえて来たのは。

私は突然鳴り響いたソレに肩を震わせ、思わず顔を上げた。

「！」

「ジョン君！」

その音は外から聞こえて来た。音に反応して顔を上げた私は、次いでセツナなの悲鳴に似た声を聞く。彼女は立ち上がって私の方に駆け出す、その顔色は優れない。銃声、この街ではまず聞く事のない音。そして銃などと言う道具をゾンビが扱う事は無い――

――例外なのは私達位なものだ。

人間だ、人間が居るんだ。

私の胸にその事実がすつと入り込んで来た。

「今のつて……！」

「多分銃声です、人が居るかもしれない……っ！」

私はリュックサックをその場に投げ捨てると、脇に差し込んでいた警棒を引き抜いて駆け出した。背後からセツナが「ジョン君、待って、私が先に——！」と言っていたが止まることはしなかった。何せ彼女はゾンビである、人間と邂逅した瞬間撃ち殺される可能性だってあった。その可能性を私は見過ごせない、最初に遭遇するのならば私が適任だ。

陳列棚を飛び越えながらショップの出入り口まで駆け、半開きの自動ドアを転がる勢いで抜けきる。そうして太陽の元に再び身を晒すと、目前に見慣れぬ服を着た女性が立っていた。

一昔前の野戦服、それに所々修繕された痕が見える連合隊服。彼女は口元をびつたりと張り付くマスクで覆い、拳銃で三人程のゾンビを射殺していた。全てこのドラッグストア正面にたむろしていたゾンビ達である。周囲に他のゾンビは見当たらない、きっとそれを理解した上で銃を抜いたのだ。

そんな冷静な目で状況を観察する傍ら、私の瞳は彼女に釘付けだった。僅かに焼けた肌、短くなった髪の毛。まだ幼さの抜けていない顔立ち。それでも彼女の顔を見間違える筈が無い。

私は震える口調で思わず呟いた。

美香、と。

彼女は今しがた店から飛び出して来た私を見て目を見開き、それから銃口を上に向けながら言った。

「……誰ですか、貴方？」

迷彩

男児三日会わざれば括目して見よ、という言葉があるが女兒の場合は何と言ったものか。

美香のコミュニティーが崩壊し、彼女が連合のへりに救助されてから一月と一週間。人を変えるには十分な時間だと思いきもするけれど、それにしても変わり過ぎではないかとも思う。

美香は少しだけ大きめの隊服に身を包み、水筒やら発煙筒が括りつけられた背囊を背負っていた。そして細く柔らかかった腕周りは引き締まった筋肉が覆っていて全体的に体格が良くなった。白かった肌も浅く焼けて顔つきもどこか大人びている様に見える。

あの学校の制服を着ていた彼女の面影は欠片も見えなかった。

「えっと、信じて貰えるかな……？」

「……………」

場所はドラッグストアの中、流石に茹だる様な暑さの中で話す事は拙いと会話の場を涼しい室内に移した。店内にあるレジカウンターに腰掛けた美香、その正面にはセツナが立っている。私は彼女を見た衝撃が未だに抜けきっておらず、纏まらない思考で二人

のやり取りを見守っていた。

セツナは美香に対して「私は悪いゾンビじゃないよ」の自己紹介を再度行った。彼女も人間との邂逅は二度目である、一度目は激情に駆られ酷く先走ってしまったが今回は冷静に対処していた。私に受け入れられたという現実からある程度自信はあったのだろう。

しかし美香が彼女を見る目はどこか厳しげだった。現実的な見方をすれば悪くないゾンビなど居る筈が無い——けれど美香という存在は既に一人、「優しいゾンビ」の存在を知っていた。故に彼女は厳し気な視線を一度切ると、ゆっくりと頷いて見せる。

「……まあ、信じますよ」

「えっ、良いの？」

「人間は襲わないと言ったのは貴女じゃないですか、それに……もう一人知っているんです、貴女みたいなゾンビの事」

美香は手に持った水筒を弄りながらそう口にした。私はその言葉に思わずぴくりと反応し、セツナは自分以外に理性を持ったゾンビが居るのかと驚きの声を上げた。

「セツナさん、でしたよね、凄く大きなゾンビをこの辺で見かけませんでしたか？」

「えっ、大きなゾンビ？」

「ええ、二メートル超えの……目は三つで、腕は六本あります」

「二メートル、目が三つで腕が——あつ！」

美香の淡々とした口調、挙げられていく要素を繰り返したセツナは声を上げる。彼女には覚えがあつた、今の今まで忘れていた事が信じられない程の邂逅だ。尤も彼女からすればその後のジョンとの邂逅の方が衝撃的だったのだけれど。故に今の今までその存在を失念していた。

「私、逢つた事あるよ、そのゾンビ！」

「本当？」

「ええ、目が三つで身長がとても大きくて……腕も確か沢山、六本くらいはあつたと思う」

セツナが声を上げ、美香は意外そうに目を瞬かせる。私は居心地が悪くなった、間違はなく私の事である。ゾンビで不躰にもセツナを追い詰めてしまった時の事だ。彼女と同棲してからというもののその話題を振られことがなかったのですっかり忘れたか、若しくは思い出さない様にしていたとばかり思っていたが。彼女の表情を見るにそういう訳でもなさそうだった。

憶えがあるとつい放つたセツナに対して、美香は懐かしそうに目を細めながらポツポツと事情を話し始めた。

「その大きなゾンビはね、私の恩人なんです」

「えっ、あ……あのゾンビが？」

「はい、ずっと前にコミュニティが崩壊した時、最後の生き残りだった私を体を張って助けてくれた、命の恩人」

ゾンビが恩人という言葉にセツナは困惑する。しかし今の私と彼女の関係性を踏まえ、あり得ない話では無いと思っただろう。ましてや理性を持つゾンビならば尚更、セツナは困惑から一転、納得したような表情で頷いた。美香は水筒を握り締めると、一つ息を吐いてから淡々と言葉を綴る。

「私、そのゾンビに逢うためにこの街に戻って来たんです、そのゾンビと……その人と、一緒に暮らしたくて」

「！」

「本当はもつと早くこの街に来たかったのだけれど、私は一人で外の力を生きていくだけの力も技術も、知恵もなかったから、コミュニティの調達班に志願して色々勉強したんです、勿論体も鍛えました、もうあんな悲しい思いをしなくて良いようにって、守って貰ってばかりじゃなくて、自分の事は自分で出来る様になって……今思えば本当におんぶに抱っこだったから」

彼女はどこか恥ずかしそうな、けれど誇らしそうな表情でそう言った。

私はそれを見て凄まじく大きな罪悪感に包まれた。無数の刃物で心臓を貫かれた気

分だった。その衝撃は如何ほどか、きつと私以外には分かるまい。彼女は私に逢う為、遙々この街に戻って来たのだ。恐らく最も安全であろう連合のコミュニティすら切り捨てて。死に物狂いで努力したのだ、私に逢う為に、私の為だけに。

その彼女が努力した一カ月を自分は何をして過ごしていた？

ただ失意に吞まれ、無気力の内に日々を食い潰していただけだった。

私は急に自分が恥ずかしくなった、久しく忘れていた羞恥の感情だった。自分の事ばかり考えてその後の彼女の事を考える事を疎かにしていた。そうだ、私は彼女に『逢いに行く』という選択肢を考えすらしなかった。何故なら自分はゾンビだから、人のコミュニティに飛び込むのは危険が過ぎると保身ばかり気にして、彼女への感情と身の安全を秤にかけて上で動かなかつたのだ。

彼女は人外である己の為にその身の安全を投げ捨てたというのに、自分は逆に動かずに居た。それが自分と美香の違いだと、そう突き付けられたような気分だった。

何という——何と言う愚物。

ましてや高校生の少女とも言える年齢の美香が、こうして命を擲ってまで逢いに来てくれたというのに、私は……！

今すぐにもゾンビ形態に切り替えたかった、いや、きつとそうするべきだったのだ。けれど今の私は人間のジョンであり、ジョン・ドウではない。それに今更どんな顔をし

て彼女の前に現れれば良いのか分からなかった。恥の上塗りだ、それは自覚していた。こんな事なら最初からセツナと逢った時に全て打ち明けていれば良かった、そうすればきっとセツナの方から変身を促してくれたに違いない。

いや、こんな事を考えている時点で駄目なのだ。

私は口を噤んで俯いた、早急にこの場から消えて無くなりたかった。

「えっと、それでこの人は？」

「ああ、彼はジョン君って言うの、一週間位前に知り合ったというか、遭遇したというか……美香ちゃんと同じで感染していない、れっきとした人間さんだよ」

私が己の感情に苦悩している間にも話は進んでいたらしい、見れば美香とセツナの二人が此方を見ていた。私はバクンと心臓が一際強く鳴り響くのを感じ、しかし努めて何でもないように振る舞った。

「えっと、ジョンって言います、恐らく同年代になるんですかね……？　よろしく願います」

「ジョン……ジョン・ドウ？」

「——いえ、スミスです」

ぴくりと肩眉が動いた美香。私はそんな彼女に対して表情を凝り固めながら淡々と偽名を述べる。有り触れた名前だ、受け取り方によっては偽名と思われるかもしれない

い。けれど此処は日本だ、そんな違和は日々の中で感じようがない。

「生まれは外国で育ちが日本なんだって、日本語凄い上手だよね」

「ええ、そうですね……初めて見た時は驚きました、とても綺麗な顔立ちをしているので」

表情を変えずに淡々とそう口にする美香。恐らく疑っている訳では無いのだろう、ただ彼を連想させる名前に反応してしまっただけだ。そもそも、こんな優男からあんな悍ましい怪物が生まれるなど想像も出来まい。

「生存者と逢えた事は僥倖でした、もし【彼】を見つけたら知らせてくれると嬉しいです、先程彼の家を見て来たのですが留守だった様なので」

「――！」

「勿論良いよ、けれど一体どうやって連絡をすれば？」

家を見て来た？ それは拙い。

私はどうやって連絡を取るか話し始める二人を尻目に冷汗を流した。無論この体に汗を掻く機能など存在しないので実際に流れているわけではないが、そんな気分であった。ジョン・ドウとして彼女と接していた頃から彼女達は何度も私の家に通っている。つまり今現在の家と同じ、ジョン・ドウの家に私という人間が住んでいる。その事実是谁の目から見てもおかしい事であった。

何とか誤魔化さなければならぬ——いや、もう全て打ち明けた方が良いんじゃないか？ 私の中で二つの想いがぶつかる、誠実であるべきだと思う感情と単純な恐怖。

何故私はゾンビ形態と人間形態の変化を隠すのか。

最初は単純だった。美香や小苗に人間の姿を見せなかつたのは変質した己の内面を悟られない様にするためだった。私は人間だという自負がある、けれど同時にゾンビであるという自覚もあった。つまり彼女達からすれば私やセツナは「元人間」なのだ。

今を生きる彼女達を前にすると、自分の人間形態が出来の悪い人形のように感じられた。実際そうだろう、汗も掻かなければ睡眠も必要ない、排泄もしなければ食事も不要。人によつては便利だというかもしれない、理想とする機能だと喜ぶかもしれない。けれど私からすればその肉体はどうしようもない欠陥品で、その欠陥品の肉体には欠陥品の精神が付随していた。即ち、私の人間として側面である。

結局はその精神も模造品でしかないのだ、セツナに対して人間の姿を晒せたのはそういった理由からだ。彼女は限りなく私に近い存在だ、変質した精神は異常を異常と認めない。けれどもし美香を含めた三人で暮らす事になれば、きつとセツナは美香と私を比べるだろう、そしていづれ不信感を抱くのだ。私の人間としての生き方は所詮贋作、擬態に過ぎない。突けばすぐに直ぐに剥がれてしまう様な鍍金だった。

私は何より、人と比べられた上で自分の人間性を否定される事を恐れた。

「取り敢えず、ジョン君の家で話さない？　ここだと落ち着けないし、良いかなジョン君？」

「それは有難いですけど……良いんですか？」

二人の視線が私に向けられる。此処で駄目だと言える奴は居ないだろう、美香を大切に思う気持ちは私とて持ち合わせている、だから心情的にも断れない。私は穏やかな笑みを浮かべつつ頷いた。内心で必死に言い訳を考えつつも。

☆

道中は正に地獄の様な時間であった。じくじくと痛む胸と激しくなる動悸、横を歩く美香の表情が変化していく。最初は偶然で済ませられる程度だった、けれど近付くにつれ疑念の方が強くなる。今向かっているのはジョン・スミスという人間の家、けれど彼女にとっては通い慣れた道だった。何せジョン・ドウの住んでいる場所と全く同じルートを辿っているのだから。

「あの、ジョン君の家はこっちの方なんですか？」

「ん？　そうだよ、此処をずーっと真っ直ぐ行つた所、私のマンションからも色々持ち込んでいるから、多分便利だと思うよ」

どこか焦燥した様な色を滲ませる美香の声に飄々と答えるセツナ。ずっと真つ直ぐ、その言葉を繰り返し眩く美香は俯いて顔を見せない。私はそんな彼女の姿を横目に見ながらぐつと唇を噛む。

ずっと考えていた、これ以上嘘を吐き続けるべきか、それとも一切合切打ち明けるべきか。打ち明けた場合は当然、セツナに対してもこれまで人間のフリをしていた事が露呈してしまう。同時に、美香に対しては人間形態になれた事を隠していた事を知られる。交流を欲して人間のフリをしていたのだ、きつと失望し激怒するに違いない。何せ人間だと思つて良くしていたら全く違う存在なのだから。自分のして来た事の大半が徒労に終わるといふのは如何ともしがたいだろう。

私は嫌われたくなかった、臆病者で小心者故に。

同時に嘘を吐きたくなかった、人間がどうしようもなく好きだから。

「……なんで」

三人の足が止まる。家に着いた時、美香が眩いた。道中歩く時もどんどん訝し気な表情になつていった彼女であるが目的地に到着すると同時に爆発した。その視線は鋭く私の住居を見つめている。前を歩くセツナは振り返り、「あれ、どうかした？」と呑気に首を傾げる。

「あれがジョン君の家だよ、私も住まわせて貰っているだけだね、もしかして来た事あつ

た？」

「——ジョン君、此処には大きなゾンビが住んでいた筈です」

セツナの言葉を無視して美香は言った。発電機に濾過装置、人が住む環境としては整っている。そしてそれらは全て大きなゾンビが一人で調達し、作り上げたものだった。美香の脳裏にどんな想像が駆け巡っているのかは分からない、けれど想像は出来た。彼女の手が足のホルスターに伸びるのが見えた。

かつて大型のゾンビが住んでいた場所には見知らぬ人間が一人とゾンビが一人、我がもの顔で住み込んでいる。そして当の本人は何処にいるかも分からず——帰って来る気配はない。

「彼を、彼をどうしたんですか？ あの人は人間が好きでした、何だかんだ言ってコミュニケーションを手助けしてくれた位です、そんな彼の事です、もし人間が騙そうと近付けば簡単に騙されてくれるでしょう——貴方は彼を知っていますね？」

いいえ、とは言えない雰囲気であった。美香の纏う空気は剣？だ、恐らく受け答えを間違えれば彼女の銃口は私に向くだろう。人間同士で殺し合う、不毛と言えばそれまでだが協力的な人間ばかりではない事を私は知っていた。

まだ心は決まっていない。

大切な人間の危機とあらば迷わず動けるというのに、自分の事となると途端に心が

鈍った。

「……ええ、知っています」

「えっ?」

驚いたのはセツナだった。突然切り替わった空気に戸惑いつつも、パチン! と音が鳴り響く。彼女がホルスターの留め具を外した音だった。美香は拳銃を抜き放ち両手で確りと掴む。その銃口は私に向いていた。

その眼には明確な怒り、そして疑念が渦巻いている。

「ちよ、ちよつと!?! 美香ちゃん、何やってんの!」

「答えて下さい、私が此処に来た理由は先程言いましたよね? 彼をどうしましたか」

美香は微塵も揺らがらない。私に向けられた銃口にセツナが声を上げ、私は真っ直ぐ彼女を見つめながら口を噤んだ。心は決まらない、けれど時間は平等に過ぎていく。周囲を取り巻く不穏な空気にセツナは慌てて私の前に飛び出し、美香の前に立ち塞がった。

「美香ちゃん、危ないって! そんなモノ仕舞ってよ!」

「退いて下さいセツナさん、私はジョン君に話があるんです」

「銃なんて物騒なモノ持ち出さなくても話位出来るでしょ!?!」

「いいえ、これは話す為に必要なものではありません、もしジョン君が彼をどうにかしたいなら—— 仇討ちをしなければなりません」

カチリと美香の指が引き金に掛る。彼女の目は本気だった、数少ない人間を撃ち殺す事に何一つ躊躇いを覚えていなかった。その覚悟を感じ取ったのだろう、セツナの体が緊張で硬直する。それでも私を守ろうと何かを口にしようとして——その肩を掴み、私は前へと踏み出した。

握った左手が脈打っていた。知らず知らずのうちに管が顔を覗かせていた、ゾンビ形態へと切り替わる前の予兆。私はそれを必死に抑え込みながら美香の前に立つ。体が危機を察していた、「人間のままでマズイ」と本能が叫んでいた。気を抜くと生存欲求が首をもたげゾンビになりそうだ。それ程までに彼女は本気だった。

「ジョン君……！」

「大丈夫ですセツナさん——美香さん、貴方は一つ思い違いをしている、私は彼には危害を加えていません、だって……」

私がジョン・ドウなのですから。

そう言えたらどれ程良いか。現実はそのに続く言葉を口にしようとして、けれど肺から空気がかりが抜けていく。私は間抜けにも口ばかり開け、そこから言葉を発する事無く停止してしまう。そんな私を美香は油断なく見据え、その銃口で額を狙い続けた。

言い出せない、恐ろしい、次の瞬間にも二人が私に失望と悲しみの視線を向けると考

えると足が竦む。

言え、言え、言え、此処で言わなければきつと私は一生彼女達に正体を明かせなくなる。そんな予感と確信があつた、此処が分水嶺だつた、私がすべてを彼女達に晒し生きていけるかの。

「……だつて？」

「——」
美香が言葉の続きを促す。私は息を吸い込む、言うんだ！ 再び心の中で私が叫んだ。ぐつと喉に力を籠める、腹に力を籠める、そのまま一息に私がジョン・ドウだと言ひ放とうとして。

初めて美香と出会つた時の怯えた顔が脳裏に掠めた。

セツナだけなら明かせた、明かそうと思えばここまで苦悩しなかつた。彼女とはこう言つては何だが一週間程度の関係だ。けれど美香は違う、彼女との重みはそんなものではない。時間は重しだ、そして一度築いた関係というのは容易に変えられない。

浅い関係ならば傷も浅い、深ければ当然——受ける傷も深くなる。

「あ……………」

膝が震えた。他の有象無象の人間に嫌われたくない、恐れられたくない、その感情は未だ存在する。けれどそれ以上に、何よりも——彼女に失望し畏れられるのが何よりも

怖かった。

「私も——私も、彼に助けられたんです」

言えなかった。

私の口をついたのは急造の嘘、その言葉を口にした途端ドツと私の体が虚脱感に襲われる。結局私は私自身の期待に応える事が出来なかった。どこまでいっても臆病で、小心者で、度胸が無くて、腑抜けで——その癖、欲張り。

私の言葉を聞いた美香はピクリと肩眉を上げ、そのまま「どういう事ですか」と続きを促す。

「私の家がゾンビの襲撃にあつて、物凄い大群で、這う這うの体で逃げ惑っていた所を助けて頂いたんです……本当は家に帰るつもりだったんですが、彼が家に置いてくれて、暫くは此処に居て良いと」

「それを何故、先程言わなかったのですか」

「すみません、貴女のような人が居ると思わなくて、少し驚いてしまつて」

「……………」

彼女は未だに鋭い目で此方を見つめている。私は腰に差していた警棒を抜くと、力な

くその場に転がした。私にはこの位の武器しかありませんと、銃すら持たないこんな優男がどうやってあの巨人を倒せるモノかと。

私は淡々とした口調でそう言い放った。何せゾンビの群衆を蹴散らすような怪物である、そんな奴を人間が素手で倒せる筈がない。その言葉には彼女も説得力を感じた様だった、あのジョン・ドウが殺される光景など思い浮かべられない。

ゆつくりとした動作で銃を下ろした美香は、そのまま一言「すみません、少し考えれば分かる事でしたね……気が逸ってしまいました」と謝罪を口にした。セイフティを弾いた彼女はそのまま拳銃をホルスターに収める。

同時に私の左腕、その表面を覆っていた管がすつと音もなく消え去った。

「いえ、こちらこそすみません……貴女のように全てを投げ捨ててまで彼に逢いに來る人がいるとは思わなくて、自分が凶々しく思えてしまつたんです、本当にごめんなさい」
「まさか、寧ろ彼が変わっていい様で安心しました、人が良いところは相変わらざる様で」

先程とは打って変わって柔らかい笑みを浮かべる美香。この一カ月で彼女は見違えるほどに成長していた。私が家に籠つて悲觀していた時間を糧としたのだ。私にはその姿が酷く眩しく見えた。

そのやり取りを見ていたセツナは「はっ！」と体を跳ねさせ、そのまま私の方へと飛

びついて来る。まるで私の盾になる様に密着し、美香に対して早口で捲し立てた。

「み、美香ちゃん駄目だよ！ 人間同士で争いとか不毛だから！ 突然銃とか抜かないで、私凄く心臓弱いんだからね！ 死んじゃうよ私、いいの!？」

「状態としてはもう死んでいると思うんですけど……すみません、もう銃を向けたりしません、私の早とちりでした」

そう言つて素直に頭を下げる美香。それでも尚警戒心———というか単純に落ち着かないだけなのだろう、セツナは私から離れない。彼女からすれば同じ人間、けれど少しでも長く居た方を守りたいのか。単純に彼女が銃を向けたかもしれないけれど。

「セツナさん、セツナさん、もう大丈夫ですよ」

「ほ、本当に本当？ 本当にもうやめてよ？ 折角同じ人間同士が出逢えたんだから、仲よくしよう？ ね？」

「ええ、勿論です」

「はい」

どこか懇願する様な形で口走るセツナ、その言葉には心から賛成した。私とて目の前で人間同士が争い始めたなら全力で仲裁するだろう。勿論私自身の命に害が及ばない範囲ではあるけれど。

「取り敢えず家に入りましょう、食料と水の備蓄もありますから」

☆

美香を納得させるのにそれ程労力は必要なかった。

私が助けられたのが凡そ半月前、そして其処から彼は必要なモノを揃えるのに遠出すると言った旨を伝え、未だ帰って来ていないとも伝えた。

どれくらいかの帰還遠出するのかと言われ、私は咄嗟に「一カ月」と答えた。分からな
いと答えなかったのは彼女が彼を探しに旅立つ事を阻止する為だった。期間を設ければ彼女も安易に動けないという予想があったのだ。事実彼女は暫く考え込み、彼が戻つて来るまでの一カ月をこの街で過ごす^ゴと答えた。

前に滞在していたコミュニティは良いのかと聞けば、どうやら彼女はコミュニティを離脱する旨を予め伝えていたらしい。かなり引き留められたらしいが、それでも彼女の意思は変わらず自分の「家族」に逢いに行く^ンと頑なに譲らなかつたそうだ。

恐らく家族とは私^{ジョン・ドウ}の事ではなく小苗だろう、こんな世界なのだ、どれ程大規模なコミュニティだろうと必ず平穩無事に過ごせるかと言われれば違う。人として何処で死ぬか、どうやって死ぬか^クからの自由はあつて然るべきだ。

そう考える人も一定数居たらしい、それもまた一つの人権なのだろう。そういった人

の後押しもあり彼女はコミュニティを抜け、この街までやって来たらしい。餞別として幾つかの食糧と水、そしてスクーターも渡されたのだとか。

尤もこの街に来る途中でガソリンが切れ、途中補給できる場所も無かった為に泣く泣く手放したとの事だが。

その後も美香と私達は話し合いを重ね、彼女もこの家で過ごす事になった。セツナは睡眠の必要もないし寝ずの番は任せてと胸を叩き、彼女も「良いんでしようか」と遠慮がちではあったが他に住処の候補となる場所も無く、自然な流れで三人共に過ごす事になった。私としては恐れていた事態がまたもや訪れたと言った所。けれどこうなる事は予想出来たし、私自身危険な外に美香を放り出すような真似は死んでもしたくなかった。

祈るとすれば自身の人としての擬態が上手くなっている事だろう、精々不審がられない程度に頑張りたい。問題は私が人間形態で美香という本当の人間と過ごす上で刺激されるコンプレックスだった。

部屋は幾つか余裕があったので、元々私——ジョン・ドウ——が使っていた寝室が私の部屋、客間として使用していた部屋がセツナの私室、そして妻だった女性の部屋を美香に振り当てた。どうせ使っていない部屋である、彼女は勝手に部屋を使う事にかなり抵抗があった様だけれど、私が「予め許可は貰っている、この家は好きに使っていいと

言われた」と伝えれば彼女も渋々頷いてくれた。

「これでは前と変わりませぬね、帰って来たら沢山恩返ししないと」

美香はそう言つて微笑む。その笑みはとても美しい物に感じ、私はその言葉だけで十分だと思つた。同時にそんな彼女を騙している事に多大な罪悪感を抱く。

一カ月、それが私に残された時間。その間に何とかこの状況を切り抜ける策を考えるか——それとも。

姿を明かす事を考える、けれど多分自力で明かすのは無理だという確信があつた。一度駄目だった事を繰り返そうとしても、上手くいくビジョンが全く見えない。

ゾンビ形態であれば正に巨人と言える巨軀の癖に、内面はこれ程繊細で小さい。

「情けない男だ」

寝室で寝転がつて呟く。自己嫌悪此処に極まり、けれど寂しくはなかつた。

私にとつてはそれが唯一の救いだった。

☆

美香の存在は私達にとつて大きな変化だった、まず自分が居なくても誰かの話し声が聞こえると言うのは私の心を大いに慰めた。たった三人しか居ないけれど、此処は私の

所属する「コミユニテイ」なのだ実感できた。その内の二人がゾンビだとしても、だ。それに彼女のサバイバル知識、コミユニテイではどういう風に多数の人口を養っていたのか、多少傷んだ食材の調理法やちよつとした廃材をバリケードに利用する工夫、ゾンビに見つからない様に移動する方法。全てゾンビを危険として認識していなかった私にとっては真新しいものばかり。

彼女のお蔭で物資調達がぐつと楽になる、一度に多くの荷物を運ぶ方法なんかもあった。ましてや此方はセツナのお蔭でゾンビが寄つてこない、一度に多くの成果物を得られるのは万々歳であった。

「ジョン君、これの他に鍋つてありませんでしたか？ 多少小さくても良いんですけれど」

「あー……つと、確かこの辺にあつた気が」

特に料理なんてものは考えもしなかつた、大抵食べられそうなもの、保存食なんかをそのままボリボリ食べるのが常だつた。だから多少傷んだものを料理して食べるなんて発想は驚きであり、新鮮だつた。生前自分で調理なんてせずに大抵外食が買ひ食いで済ませていたのが理由だろう。

現在、私と美香はキッチンに立つて消費期限の過ぎた食材を焼いたり炒めたりしている。流石にカビやら何やらが生えた食材は捨てるしかないけれど、その手前の食材は調

理次第では食えるというのが彼女の弁。何でもこれは駅コミュニティに居た頃から実践していた事らしい、食料は貴重だ、どうにかして食える状態にしたいというのは分かる。私には考えもつかない事だった。

「? 何か良い事でもありましたか」

香ばしい匂いを漂わせるフライパンを掻き混ぜながら私を見る美香、「えっ」と私が聞き返せば「笑っていたので」と口元を指差す。私が口に手を当てると唇が微笑んでいた事に気付いた。

「あ……ああ、えっと、すみません、ただ良いなっと思って」

「……………」

「こっやって誰かと料理をした事が無かったので、新鮮なんです」

私がそう言うのと数秒沈黙した彼女は、「そうですか」と言っただけ目を伏せた。私は小さく頷きながら水を張った鍋にスープの素を入れる。コーンスープだ、湯に入れるだけで出来る簡単なもの。けれどそんなモノですら今は貴重だった、量を増やす為に薄味になるけれど贅沢は言わない。

二袋入れた所で掻き混ぜ、湯に溶かす。そうこうしているとリビングのソファに膝立ちになって此方を覗き込んでいるセツナが声を上げた。

「いいなあ、私も手伝いたいなあ」

「ウィルスが入るかもしれないから私は手伝えない、ごめんね、って言ったのはセツナさんですよね」

「そうなんだけど……何か楽しそうで疎外感が凄いの、お姉さん凄くさびしい」

「本でも読んでいて下さい、そっちの携帯テレビでなら何か見ても良いですから」

「人肌が恋しいんですう」

「なんて言っていますけれど、美香さん」

「自分の手でも握っていますよ」

言われた通り自分の手で握手をするセツナ、程なくして「冷たい……」と呟いた。まあ、そうだろうな。

仕方ないので十二分に溶けたコーンスープをマグカップに注ぐ。そこそこ量を作った為三人分くらいならあるだろう。カップの八分目位まで入れたコーンスープを持ってセツナの傍に行き、これでも飲んで待っていて下さいと言った。

彼女は差し出されたソレを見て驚き、「飲んで良いの？二人の分無くならない？」と聞いた。

「大丈夫です、大目に作りましたし、その分薄味ですけれど……気にせず飲んで下さい」セツナは湯気を立てる温かいソレを恐る恐る受け取る。冷たい彼女の手のひらにじんとした熱が浸透した。両手で確りと持ったマグカップを口元に運んで一口、ぐつと

通った薄いコーンスープの味、生前なら何とも思わなかった。仄かな甘みとまろやかさ、けれど今はその味がこれ以上なく美味しく感じた。

「……美味しい」

ほう、と呷くセツナ。私は満面の笑みで「でしよう？」と言った。

人間ではなくなった落差、そして今までゾンビでありながら人間で在ろうとした苦労、そう言った物が全て詰まった一口だ。そりゃあ美味しいだろう、例え味気なくても、どんな食べ物でも、一度口に含んで喉を通り、胃に入っていく瞬間。

この瞬間、「ああ、私は生きているんだ」と実感できる。

「良い機会ですからセツナさんもご飯食べるようにしましよ、美香さんのお蔭で備蓄にも余裕ができましたし、何事にも楽しみは必要です」

「ええ？ いや、流石にそれは良いよ……ご飯は貴重だし、私は食べなくても」

「二人分も三人分も大して変わりません」

マグカップを握り締めながらブンブン首を横に振るセツナ。そんな彼女に美香はフライパンを持ちながら食卓にやって来た。下に断熱シートを敷いて、その上にフライパンを載せる。持ち手を外すと長箸で掻き混ぜながら言った。

「食べられるお肉は貴重なんですから、一緒に食べましょう、ゾンビと言ってもご飯は食べられるんですよね？ なら食べなきゃ損です」

「いや、でも……」

「美香さんもこう言ってるし、セツナさんも食べましよう、美味しいですよ!」

これでもかという位に食事をプッシュする私。彼女も食べたくない訳では無いのだろう、現にマグカップを握り締めながらチラチラと食卓の方を見ている。食料は貴重であるという自中心と食べたいという欲求が競り合っているのだ。

現に誰かと食卓を囲んで同じ物を食べると言うのはとてもない幸福感を齎す。自分分は独りではないという充足感と、人と同じ生活をしているという満足感だ。

結局セツナは最後まで頑なに首を縦に振らなかった。

けれど、美香さんが妥協案で私達よりも量を減らすと言えば渋々頷いて見せる。彼女の優しさは生来のものだろう。

私たちは三人で食卓を囲み和気藹々と食事を摂った。久々に食べた出来立ての料理はとても美味しかった、セツナも遠慮がちに料理を口に運び——そして咀嚼した途端ふわりと笑みを浮かべる。

料理の味どうこうではない、それを越えた先の満たされる何かがあった。

「美味しいねえ、ふふっ」

「ええ、そうですね」

「……何か、凄く嬉しそうですね、セツナさん」

「そりやあそうだよ」

一口分をじつくりと咀嚼するセツナ、その表情は誰の目から見ても緩み切っていた。美香がその事を指摘すれば何度も頷いて肯定して見せる。

「こればかりはゾンビにならないと分からないかなあ……何て言うか、凄いや暖かいんだよ、こうやって普通の人と食卓を囲んだり、温かいご飯が食べられたり、そういう何気ない事がさあ——自分がもう人間じゃなくなったからかな、心の何処かで人の営み、その習慣に憧れているのかもね」

「良く、分かりません」

「それで良いんだよ！ 分かったら寧ろ大変だ、人間じゃなくなっちゃう」

セツナは笑ってそう言った、美香は特に何とも思っていない様だったが私は彼女の言葉に深く感じ入った。そうだ、これが分かるのは私達の様な半端者だけ。ゾンビでもあり人間でもある、そんな特異な存在。

或はどちらかであれば、こんな想いはしなくて済んだだろうに。

私は東の間の幸せを噛み締めながら提案した、こんな食卓をいつまでも囲っていられるように。私の人間としての側面が暴かれない様に。

「またお肉を探しに行きましようか、もしかしたら電源が死んでない冷凍庫があったりするかもしれませんし」

「地下とか、比較的涼しい所に保存されている食品なら大丈夫かもしれません、若しくは直接狩りに行くか……私、狩りの経験とかはないんですけれど、ジョン君とセツナさんはありますか？」

「いやいや、私普通の勤め人ですから、狩りの経験なんてある訳ないでしょ！ ……けどお肉また食べたいし、道具があれば……まあ？」

ともあれもう少し、私はこの空間に浸っていたい。

此処はとても心地よいから。

☆

真夏。

青い空に白い雲が浮かび上がり、遠くの景色が歪んで見える程の熱気。じくじくと肌を刺す熱が室内にまで入り込む時期、夏と言うのは何故こうもノスタルジーな気分になるのか。世界の色が一割増濃く見える様な気がする、植物の緑と空の青、そして街のコントラストに雲の白が映える。蟬が煩い位に鳴いていて、けれどそれに風情を感じるくらいには未だ私に人間性が残っていた。

私達がこの家で生活を共にして半月。

我が家の冷蔵庫はフル稼働、本格的な夏が来る前にと方々を走り回って冷凍食品や生
物回収に勤しんだ。大抵は駄目になってしまったものばかりだったけれど、場所によつ
ては傷みだす前の食材なども見つかかり何とか確保する事が出来た。保存食と合わせれ
ばこの夏を乗り来る程度の食糧は集まっただろう。

発電機はあるがガソリンは無限ではない、最近ではセツナが独りでに外へ赴き廃車や
乗り捨てられた車、若しくはガソリンスタンドから必要な燃料を調達してくれる。しか
し節電を心掛けてはいるものの真夏となればある程度空調の使用も考えなければなら
ない。電気の需要は尽きなかった。

足りないならば調達するしかない、これ程日光が強いならば太陽光発電も考えてみよ
うと一念発起、私は二人に掛け合つて太陽光発電設備を整える事にした。

必要なのは太陽電池、つまりモジュールであるパネルと接続箱、パワーコンディショ
ナーだった。まず大掛かりなものは無理だ、重くて私達だけでは運ぶことが出来ない。
それに太陽電池の設置には専門的な知識も必要だった、そちらの方面の知識に私は詳し
くない。聞けばセツナと美香も知らないという、ある意味当然と言えば当然だった。

だから私は付近の家から拝借する様な事はせず、ソーラーパネルを取り扱っている企
業にお邪魔させて貰った、片道二十分の距離だ、往復で四十分も掛かる。後は便利で大
好きホームセンター。狙うのは大掛かりな太陽電池ではなく簡易組み立てキットの様

な太陽電池、つまり蓄電池キットだった。

運が私に味方したのか、お邪魔した企業倉庫の中には陳列棚に並ぶ前のキットが六つほど見つかった。私達は何度か往復してそれらを持ち帰り、早速組み立て家の庭に設置した。

ソーラーパネルにチャージャーコントローラー、インバーターと配線ケーブル。後は支えるためのフレーム、それらを組み立てながらバッテリーに繋げば完了。説明書が同封されていたのは助かった、結局は安価なお試しキットな為一枚一枚の発電量は大した事が無いけれど、ここまで大量に並べると中々どうして馬鹿にならない。

昼間の内は太陽光発電で電力を取得し、夜間に蓄えた電力で冷蔵庫や空調を回す。これで消費するガソリンの量が減ってくれば言う事無しだ。

必要なものは沢山あった、それら一つ一つを解決していく内に私はいつしか本当に自分が人間になった様な気がした。正直生きるだけなら私は電力も食事も、水すら要らない存在だ。だから最悪無くても良いという余裕が常に私の心の底に張り付いていた。けれど今は違う、なければ本当に自分の死に直結するという緊張感があった。

良くも悪くもサバイバル生活に馴染んだという事か、それとも長い間ゾンビ形態にならず、人の輪に馴染んだからこそ芽生えた感情か。幸いにも今の所セツナに勘付かれた様子は無い。そもそも彼女は私と美香を比較する事すらしていない様に思えた。

全ては私の杞憂だったのだ。

「ふう……この辺りは大体漁ったかな？」

「そうですね、少し休憩しますか」

通い慣れたスーパ―、そこから徒歩十分圏内にある倉庫一角。棚に並べられた箱を漁って飲み水の確保に性を出していた私達は汗ばみながらその場に腰かける。剥き出しのコンクリート、そのひんやりとした冷たさが今は心地よかった。私の体は汗を掻かない、帽子を深く被った私はそれに気付かれない様に時折飲み水を手に零し、それを首や頬に張り付けていた。

汗を掻いている演出だ、水分補給は小まめにとセツナに言われている為特に不審がられる様子はなかった。美香はべったりと張り付いた髪を鬱陶しそうに払い、時折Tシャツを扇ぐ。本格的に暑いらしい、彼女の頬は赤く染まっている。

「倉庫の中はひんやりしていて比較的マシですけど、やっぱり夏は凄いですね、地球温暖化って嘘だったんじゃないんですか？ これだけ人が居なくなつて植物が生い茂っているのにちつとも涼しくならない」

「私もそう思います、正直少しは涼しくなると思つていたのですけれど……こういう時はちよつとだけセツナさんが羨ましいです」

「いや、私も暑い事は暑いんだからね？ 汗を掻けない分熱気籠りまくりで脳味噌溶け

そうなんだから」

項垂れた美香に対してセツナはぶんぶんと首を振る。その気持ちは分かる、汗が流れない分ゾンビは熱に弱い。何で映画やアニメでゾンビが燃やされているのか分かる気がした。いや、あれは普通に人間でも死ぬけれど。

コンクリートに張り付きながら軽く水を口に含む。口内の熱を水で冷やししながら呑み込み一息、隣には開け放たれた段ボールにズラリと並んだペットボトル飲料水。500mlのそれは開封しなければボトリングから一年は飲めるといふ優れもの、21タイプなら二年はもつ。

正直これだけ纏まった飲み水が見つかったのは嬉しかった、何せ夏はただですら水の消費が激しい。風呂等の水は多少なりとも汚れていても問題無いけれど、飲み水はそうもいかない。しかしこれだけの量を持って帰るのは大変だった、帰り道を考えると憂鬱になる。

「これを持って帰るのは中々に骨ですなぁ……」

「んー、やっぱり車とか必要かな？ あるだけで大分違うと思うけれど……お姉さん一応免許持ってるし、運転出来るよ？ 万が一の脱出手段にもなるしさ」

「そうは言っても市内は乗り捨てられた車が多いですから、小回りが利く車両ならまだしも一般車両だと郊外位しか快適に走れないと思いますよ、ガソリンだって発電機の方

を考えると無駄遣いはできませんし、人力で出来る範囲は全て人の手でやった方が……」

「そっかあ……でも万が一の脱出手段は欲しいよねえ……」

「それはまあ、あるに越したことはありませんし」

汗をタオルで拭いながら答える美香、車の無い生活に慣れて久しいがやはりあった方が便利と言うのはその通りだ。太陽電池をルーフに設置したソーラーカーがあったら良いなど私が言えば、「アレ、あんまり普及しなかったから、見つけるのは難しいと思うよ」とセツナ。いつその事電気自動車を改造してやろうかとも思ったけれど、そんな知識も技術も私達には無かった。

「ない物ねだりは出来ない、って事でしょうか」

「そういう事だね……さ、ぱつぱと物資を集めて帰ろう、私は涼しい部屋でのんびりした
らむ」

「同感です」

セツナの声に賛同しコンクリートにへばりついた状態から起き上がる、そして詰め込めるだけの物資をリュックサックに詰め込んだ。飲料と食料あとは他の段ボールに詰めてあった新品のタオルや食器、日用品の類も忘れない。ティッシュ一枚すら不用意に使えない世の中、持てる分だけ兎に角集める。そうこうしていると塩素の入った段ボ―

ルを見つけた、何に使うつもりだったのか分からないけれど不意にそれを見て言葉が出る。

「何かあれですね、水浴びとかしたいです」

じくじく熱が籠る中、私はふとそんな事を口走った。無論手は物資を掻き集めながらだ。

私の言葉を聞いたセツナは作業を続けながら「あー、それ良いねえ、プールとか行きたくないなあ」と呟く。

「そうですね、泳ぐ……と言うよりは涼む目的で賛成です」

「でもプールなんて何処も汚れちゃっているだろうしなあ……海とかなら大丈夫かも」

「海ですか、少し遠いですね、そこそ車が無いと行けそうにない」

「水浴びの為に泊りがけの強行軍とか嫌ですよ、私」

「流石にそれはツライかも」

「ビニールプールとかならどうですか？ 水溜めるだけなら割と簡単に出来ますよ、お

風呂に再利用も出来ますし」

「んー……ちよつと子どももつぽい？」

「贅沢言わないで下さい」

私が倉庫の端に収納されている大きい箱、子ども用のビニールプールを指差しながら

言うときツナは唇を尖らせながら首を傾げた。そこにズバツと美香が切り込む。良い案だとは思うのだけれど、それにこの時期なら風呂代わりに水浴びでも十分だ。

「いやー、でもなあ……お姉さん最近ちよつと太り気味で、水着が」

「ゾンビになってまで何を言っているんですか、太らないでしょう、その体」

どこか遠慮しがちな声色で自分の体を抱きしめるツナ。美香の言う通りである、ゾンビになると体型に変化など無い、恐らく『成長』という概念がないのだ。ゾンビ形態は分からないが人間形態は諸々確認済みである。

「いやいやいや、そこはね、ほら、乙女的なパワーがあるんですよ、女子力？」

「女子力で脂肪を蓄えるんですか……？」

「そう言えば美香さん言っていましたよね、今日の別腹、明日の脇腹」

「ジョン君？」

「ごめんなさい」

でも私は悪くない。

「いや、でもここだけの話、太れるなら太っていた方が良いと思いますよ、食料だつていつまであるか分からないんですから、これから先十年、二十年つて経過したらモノを漁って食べるなんて事も出来なくなりますし……今の内に自給自足のノウハウを身に着けておかないと」

「自給自足かあ、畑とか田んぼとか？」

「ええ、後は狩猟なんかも出来れば良いのですけれど」

「銃器の扱いなら私が教えてあげられますよ、農業は……ちよつと分からないです、ごめんなさい」

「私もつま——母が小さな家庭菜園を昔していたのを見た事がある位で」

「ほうほうほう……なら此処はお姉さんの出番ですなえ」

私と美香が申し訳無さそうにそう言えば、セツナはにやりと笑つて私達二人を見る。その自信満々な表情に私と美香は顔を見合わせ、「農業の経験があるんですか？」とセツナに問いかけた。

「経験があるもなにも、何を隠そう私の実家は農家なのです！　じゃーん！」

「へえ、それは初耳です、じゃあ畑とか田んぼの作り方もばつちり？」

「勿論！　——と言いたいところだけれど、イチから創るのは難しいと思うよ、やつぱり今ある田んぼとかを利用した方が良いかなあ……畑位だったら大丈夫だろうけれど」

土もそうだけれど水路とかも必要だし、そう言つて難しい表情で唸るセツナさん。どうやら私達よりは農業に関しての知識がありそうだ。これは近々周辺で田んぼを見つめる探索が必要になってくるかもしれない。ただ彼女曰く色々と機械、田んぼであれば田植えに収穫、脱穀、それを運ぶための運搬機等々も使うとの事。それらを揃えるのは

とても大変そうに思えた。

「後は何より苗が無いと話にならないし」

「あー……」

問題は山積みである。

私はパンパンになったリュックサックにカバーを掛け、パチンとボタンを閉めた。一応詰め込める分だけは詰め込んだ、見ればセツナと美香の二人も大凡詰め込み作業は終わった様だ。

「まあ将来的な事は色々不安ですけど」

「それはそれ、これはこれ、今は兎に角暑いのが嫌」

「……じゃあ、決まりですね」

三人顔を見合わせて破顔する。

私達は示し合わせた様に倉庫の角、そこに鎮座するビニールプールを引っ張り出す。流石に箱をのまま持つていくのは嵩張るので中身だけを取り出し、美香とセツナが細長く纏めて脇に抱えた。因みに私はペットボトルの詰まった段ボールを抱える係である。

まあ偶には水浴びなんていう遊び心があっても良いのではないでしょうか。こんな息苦しい世界なのだ、せめて息抜き位しなければ窒息してしまふ。

倉庫を出て炎天下の中を歩く。帰り道、ふとセツナが声を上げた。

「あ、そう言えば私水着持って来てない」

「まあ、まず必要だとは思いませんからね、どうしますか、途中で服屋にでも寄ってみますか？ あるかどうかは分かりませんが」

「んー……いや、面倒だから下着で良いかな、どうせジョン君位しか見る人居ないし」

「先程まで乙女パワーやら女子力と言っていた人の発言とは思えませんね」

賑やかな帰路、私はその中に混じって笑い声をあげる。

皮膚に張り付いた雫がジュツと溶け、蒸気となる様を見つめながら。

パキリと、私の指先が罅割れた。私はそれに気付いた瞬間に指を握り込み、ペットボトルの箱を片手で抱え込む。もう片方の手でリュックサックの肩掛けを掴み、さも何でもない風を装って。

「明日は涼しいと良いですね、ジョン君」

「ええ、そうですね」

非人間

三人で色々な事をした、生きる為に必死に毎日を過ごした。

恐らくこの一月はつい数ヶ月前の自分が羨む様な日々だったに違いない。

美香や小苗と送った日々よりも充足感に包まれる、最高の日々だったと言いつける。良くも悪くも美香と小苗に対応していたのはゾンビとしての側面だった。けれど此処での生活は人間としての側面を押し出し、尚且つその不出来さを指摘される心配がない、正に理想の環境だった。

人間の真似をして満足する段階ではない、本当に彼女達と同じ飯を食って、ベッドで寝て、談笑して、共に物資を掻き集めて——同じ時を生き抜いたのである。

私は人間だった。

紛れもなく、その時だけは人間だった。

彼女達の傍に居た時の自分は、人間として自然に笑う事が出来た。

自分がゾンビだと自覚する暇なんて一秒もなかった。ただ彼女達と一緒に調達し、生話し、生きるのが楽しくて仕方なかった。こんな言い方するのは悪いけれど、本当に

楽しかったのだ。

夜、自分のベッドに潜り込んで一日の充足感に四肢を脱力させ、そこで漸く自分が眠れぬゾンビである事に気付く様な——そんな毎日だった。

人とはこんなに、幸福で精神的に豊かな生き物だったのだろうか？

私は眠れぬ夜をそんな事を考えながら過ごす。生前の私でもこれほど満足感を覚えながら日々を過ごすような事は無かった。故にその落差に戸惑う、全てが新鮮で真新しい。

ゆつくりと布団の中から腕を抜き出し、天井に向けて突き出した。

瞬間——パキパキと零れる欠片。

それは私の頬を叩き、そのまま枕元へと落ちる。

私の右手、その指先の皮膚が硬化し剥がれ落ちていた。

零れ落ちる破片——過去、ソレを私は「人間性」と称した。

見れば手の甲から真つ直ぐ、蜘蛛の巣のように幾つもの溝が生まれていた。それは私の手首辺りで止まっており、月明かりの淡い光では確り見つめなければ分からない程度。けれど日々、着実にその罅は大きくなっている。そして指先からはパラパラと極小の欠片が落ちていた。その内側に覗いているのは——ゾンビ形態と同じ、赤黒い肌。

「これは、私の記憶」

私は呟いた。

この落ちていく欠片は人間性——つまり私の「人であった頃の記憶そのもの」、人であった証明。きつと少し前の私なら零れていくソレを必死に掻き集め、何とか元に戻そうと躍起になっていたに違いない。

その気持ちは今でも少し存在する。

けれど私は枕元に落ちた破片を握り締め、そのまま宙にパラパラと碎き棄てた。

私が人として生きた記憶、私が私と証明できる唯一のモノ、私の——人間性。

過去の私はこれに固執していた、これだけが私の在りどころであり『人として生きる目的』、その指標だったから。私が人間だと自分自身に言い聞かせる為に必要だった。人間だと自負する側面と、ゾンビだと自覚する側面。そのバランスを保つのに必要な核。

けれど今は違う。

私は枕元に放り捨ててあるケースを手取る。皮の財布だ、私がゾンビ形態の最初期に持ち歩いてきた過去の遺物。その中には少しばかりの金銭と折れ曲がったカードの類が入っている。

その中の一つ、比較的損傷の少ないカードがあった。

私の身元を証明する為の照合用IDカード、最初——私がこの家に来て、真っ先に確

認した「己の証明」。私が人間として生きていた頃に使っていた名前、顔、生年月日などが刻まれている。他のカードと比べて一際頑丈なソレを財布から抜き出して、月明かりに照らした。

—— 笹津 瑛久

浮かび上がる黒文字、それが私の生前の名前であつた。

隣には顔写真も印刷されており、凛々しい顔立ちの——今の私からは想像も出来ない男らしい顔の人間が映っている。笹津瑛久、笹津瑛久、繰り返し名前を呟く。

何度も何度も呟く。

けれど、どうしても私には馴染まない。凡そ道行く他の誰か、「他人」という感情以外浮かばない。自分自身である筈なのに、死ぬ程焦がれた人間であつた頃の私だということに。

私には彼が「自分自身」だとは到底思う事が出来なかつた。

正しく彼は他人だった、私である筈の笹津瑛久、その彼は私とは文字通り別人だった。パキリと一際深く罅割れる指先、そこから零れ落ちる破片。覗く赤黒い肌。

人間に焦がれたのは元人間だからではなかつた。

人類を絶望の淵に叩き落としたのは私では無かった。

知らなくて当然だ、覚えがなくて当然だ、感情が伴わなくて当然だ。だつて、私は。

月明かりに照らしたIDカード、それを私は音もなく握り潰した。ぐしゃぐしゃになったカードを床に投げ捨てる。人間形態が歪み始めていた、此処までの力は今まで出せなかつた筈なのに。ゾンビ形態と人間形態の境界が曖昧になっていく感覚。

薄々分かつていた、心の奥底では『もしかして』と思つていた。それがこうして人の輪に加わつて、徐々に欠けていく記憶を見て確信に変わる。

私が『私』でないのなら——一体、此処にいる自分は何なのだろう。

その答えを知る者は居らず、視線はただ何も無い宙を漂う。何も持たない、名の無い死体〔ジョン・ドウ〕、そうなる事が嫌で人である事に固執していたというのに。

彼女達と過ごした一カ月。

それは私の心を中途半端に強くして。

そして同じように中途半端に弱くした。

私達がコミュニケーションを構築してから——一カ月目を迎えようとしていた。

☆

「そろそろジョンさん——大きなゾンビの彼も帰って来る頃ですな」

三人で同じ家に住むようになって一カ月と一日目、相変わらず蟬は煩いし太陽は容赦なく日光を飛ばしてくる。そんな中を物資調達、ついでに田んぼ探しの為に歩き回っていた私達。街中で程々に物資をかつさらって来た私達は家に帰る途中、不意に美香が声を上げた。

ドキリと私の胸が高鳴った。

「もう一カ月かあ、早いねえ」

「ええ、でもこのメンバーにジョンさん、彼も加われれば正に鬼に金棒、と言うかも怖い物なしです、彼の助力があれば農作業もうんと捗ると思いますよ」

「確かに、凄い力持ちっぽく見えたから……運搬機とか要らないかもね」

「お米があれば美味しいご飯も炊けます、今から楽しみです」

「あ……でもその前に謝らないとなあ、最初に怖がっちゃった事」

「そんな、気にする人でもありませんよ、とても優しい人ですから」

ふんす、と鼻息荒くそう語る美香。その様子からどれだけ彼女がジョン・ドウという怪物を待ち望んでいるのかが分かる。私は水を塗りたくった顔で何度も頷きながら、内心で覚悟を決め始めていた。

人としての殻を破ったと言えば語弊があるけれど、一度自分が真つ当な人間ではない、その記憶を引き継いだだけの存在だと認めた瞬間、まるで憑き物が落ちた様に晴れやかな気分になった。

そうだ、私は彼女達と人間として付き合っけていきたかったのだ。

ゾンビなんかではなく、同じ生物として、同じ目線、同じ境遇で世界を見たかった。どうしようもなく人に焦がれていたのは元人間だからなんていう理由じゃない、人間に寄生した己が「人として生きたい」と願ったから。

人間としての側面なんて嘘っぱちだ、そもそも鍍金どころの話ではない。そもそも私は人ですらなかった。

「すみません、二人とも」

私は二人を呼び止めた。重いリュックサックを背負った二人は「うん？」と声を上げながら足を止める、最後尾を歩いていた私は振り返る彼女達を見つめながら口を開いた。

「……二人に伝えなきゃならない事があるんです」

「え、何、改まって」

「——？」

美香とセツナの二人はパチクリと目を瞬かせ私を見る。私は彼女達を見ながら唾を

呑み込む。嫌われるだとか、恐れられるだとか、そんな心配はしてなかった。そんなちっぽけで自己中心的な考え方よりも、もっと大切なものが私にはあった。

息を吸い込む、熱が肺を満たして熱気が体を駆け巡る。言おう、全て明かそう、いまこの場で。

生きた屍である事を認めよう。

「——ジョンさん？」

全てを告白しようとした瞬間、美香が言った。

それはいつも彼女が私を呼ぶイントネーションではなかった。『君』ではなく『さん』。私が見開き、驚きの声を上げようとして留まる。彼女の目は見開かれ、表情は驚愕に彩られている。けれどその視線は私ではなく、その背後に向かっていた。

思わず全力で振り向く。

「……………は」

視界に——【私】が飛び込んで来た。

区道十七号線、乗り捨てられた車が散乱する中央線付近。凡そ五十メートル程先に佇む巨軀。大きな身長、分厚い肉体、六本の腕、それは正しく私のゾンビ形態そのもの。赤

黒い肌も相まって同一人物と言ってしまったても良い。歪む空気の手先でソイツは佇んでいた、私は驚愕に言葉を失くす。

アレは私か？ ゾンビ形態の私？ 一体なぜ、どうして。疑問が思考を覆い尽くす。いや、違う。

よく見れば僅かに身長が低い、そして私の体と比べると幾分がスリムだった。元が元だけに筋肉質ではあるが常識的な範囲内ではない。何より盛り上がった胸部、僅かに見えるくびれ、アレは——『女性型』だ。

私ではない、私の筈が無い。そうであるならばアイツは……一体なんだ。

「ジョンさん!? まさか帰って来——」
「違うッ!」

リュックサックを投げ捨て駆け出そうとする美香、それを今までに無い程真剣な声色と声量で引き留める。けれど私が声を荒げた途端、私達の視線の先に佇んでいた巨軀が蜃気楼の如く掻き消えた。一拍遅れてドン! とアスファルト舗装された道が砕け散る。

ぞくりと肌が粟立つ。私の左腕がピキリと管を生やし。

「ジョン君ッ!」

ドン と目前に突っ立っていたセツナが私を突き飛ばした。瞬間、私の立ち位置と入

れ替わったセツナの体が宙に浮く。見れば先程まで遠くに見えた女性型の私がセツナを三本の腕で掴みあげ。

「——違ウ」

問答無用でぶん投げた。

圧倒的な筋力で放り投げられたセツナは砲弾の如く吹き飛び、近くに停車していき軽自動車ボンネットに衝突した。派手な破砕音にフロントガラスが粉々に割れる。降り注ぐそれが日光を反射してキラキラと光り、私は思わず彼女の名を叫んだ。

「セツナさんッ！」

返事はない、深く沈んだボンネットには両足を投げ出したセツナの姿。深く中に入り込んだ体、パラパラと破砕した硝子を砕きながら彼女は辛うじて声を出す。無事だ、生きている、けれど衝撃は確かに彼女の脳を揺らして肉体を傷つけた。何とか起き上がるうとする彼女の額からは血が流れている。最悪どこか骨も折れているかもしれない。焦点の合わない瞳で此方を見るセツナは小さく、蚊の鳴く様な声で「逃げて」と言った。「ッ！」

セツナに向けていた目を今しがた目の前に聳え立つゾンビに向ける。大きい、人間形態の私が百八十だとしても、目の前のソイツは百九十はあった。さらに腕が六本ある為か威圧感がとでもない、目は私と同じ三つ、そして胸のソレは乳房だろう、けれど人間

の頃の面影なんてそれくらいなものだ。

女だと判断出来る部位が少なすぎる。

「オ、お、おオオ」

「くそツ」

私に向かつて手を伸ばしてくる女ゾンビ、ソイツの手をリユックサクで払いながら大きく後退する。セツナを見捨てて逃げるなんて選択肢はない、そして今の行動で分かった——コイツは『私』を狙っている。

セツナが突き飛ばしていなければ今頃コイツの手に握られていたのは私の体だ。意図せずセツナを掴んだからこそコイツは「違う」と言ったのだ。

何の為に？ どうして？ 疑問は尽きない、そもそも私と酷似した怪物が存在しているなんて。

考えている暇はなかった、ゾンビの六本の腕は後退する私のどこかしらを掴もうと殺到する。それを躲し、叩き落とし、逃げ惑っていられるのはゾンビが全力ではないからだ。後は人間形態とは言え私の筋力は常人のソレではない、最近ではゾンビ形態との境目があやふやになっているからか更に力を増しているような気さえする。

「ジョン君、下がってッ！」

「！ 美香さんっ」

私がゾンビの怒涛の攻めに圧倒されていると、拳銃を抜き放った美香さんが私の側面に飛び出した。目の前のコイツがジョン・ドウではないと理解した彼女に躊躇いは無い、ゾンビの頭部に向けて貴重な弾丸を何発もブチ込む。

バキン！ バキン！ と金属の弾ける音が鳴り響き、マズルフラッシュが網膜を焼いた。

そして私に手を伸ばしていたゾンビの顔が弾ける、上半身を仰け反らせて踏鞴を踏む。全弾命中、顔面に直撃した。普通のゾンビならこれで死んでいる。カランカラン、と空薬莖が地面に弾んだ。

「やったー！」

確かな手ごたえを感じたのだらう、彼女は両足を広げた射撃姿勢のまま喜びの声を上げる。けれど私は仰け反ったソイツを見ても悪寒が止まらなかった。リュックサックを掴む手に力が入る。想像したのだ——ゾンビ状態の自分が頭部に弾丸を受けて死ぬかどうか。

答えは否だ。

「美香アツ！」

叫んで手を伸ばした、けれど一拍遅い。

恐るべきスピードで上半身を立て直した怪物は血走った三つの目でギョロリと美香

を睨めつけ、振りかぶった六本の内の一本で強かに美香の横つ腹を殴り付けた。腕が伸びた、まるで手品のように細長くなった。

体をくの字に折り曲げた彼女は、そのまま腕の力だけで吹き飛ばされる。彼女の服に触れた私の指が擦れ、入れ替わるように彼女の体が横に弾ける。そして近くにあったガードレールに激突し、「かふっ」と空気が口から抜けた。

カラカラと彼女の手から零れ落ちた拳銃がアスファルトの上を滑る。

「――」

ぐったりとガードレールに凭れ掛かる美香、べっこりと凹んだガードレールは衝撃の強さを物語っている。彼女は人間だぞ、そんな強い力で殴り付けたら――。

「がグッ!?!」

「お、オオオ」

私の体が凄まじい力で締め付けられる。捕まった、殴り飛ばされた美香に意識を持っていかれている内にゾンビの六本の腕が私に殺到していた。凄まじい力だ、両側から押えつけられた腕が伝わる怪力。ミシミシと骨が軋んで内臓が圧迫される。

未だにボンネットに埋まったまま起き上がれないセツナが顔を顰めて私に手を伸ばす。美香は殴られた衝撃で意識が朦朧としているのか、咳き込みながら虚ろな目で此方を見るばかり。私を助けようと必死に滑り落ちた拳銃に手を伸ばすも、彼女の体は震え

るばかりで全く動かない。

「お、あ……あ、さ——」

「ぐ、ツウ!？」

私を握り締めながらゾンビは何かを口にする。私と同じ不格好な口、それをまごつかせながら何事かを口にしようとしていた。何度も歯を擦り合わせながら私を三つの目で凝視し、奴はたどたどしい口調で言った。

「さ、あ、ささ——ささつ、あ、き、ひき、サン」

「——」

ささつ、あきひき。

笹津瑛久。

私が私となる前の、人間の名前。

「ツ！」

ガッ、と私は体を拘束する腕を掴む。そして腹の底から、絞り出した様な重低音で奴

を睨みつけながら言った。

「知らないよ……そんな奴はッ！」

めきめきと体が音を立てる。私とその名前を否定した瞬間、奴の体を掴む力が強まった。まるで私を握り潰してやると言わんばかりに、思わず口から苦悶の声漏れる。常人より頑丈と言っても限度がある。このままじゃ握り潰されて死ぬ。視界が白黒になってパツ、パツ、と光が点滅した。

死ぬ、このままだと確実に。

左腕から——いや、両腕から管が生え出る。

死ぬ、死んでしまう、自分だけじゃない、セツナも美香も皆。

死ぬぞ、殺されるぞ。

コイツに。

両腕に握り締められる私。

その私の脳裏から美香と小苗の怯える顔が掻き消えた。代わりに彼女とセツナの死と言う未来が現実的な感触として私を襲った。思い出すのは美香の泣き顔、小苗が死んだと聞いた時に胸に飛来した——マグマの様な憤怒、その感情。

人はこれを怒りと呼んだ、私の体に纏わりついた感情はソレだ。あれをもう一度味わうのは嫌だった、良く分からないが嫌だった。もう二度と『ああ』はならないつもりなのに、けれど人間では無いと認めた私にブレーキは存在しなかった。

ただ感情の赴くままに、在るがままに、己のままに——人ではない自分で。

制御できない怒りを目の前のゾンビに叩きつけた。

美香が、セツナが、私を驚いた表情で見る。まんまると目を見開いて、まるで信じられない物を見る様に。

私の両腕に管が渦巻いていた。四肢から蠢く筋繊維が体を包んでいく。ミチミチと私を握り潰さんと力を籠めるゾンビに対抗する様に、肥大化した私の体は首から下までジョン・ドゥ動く屍に成り果てる。

俯いていた私が奴の顔を至近距離から覗き込むと同時に——パキリと。

私の頬から大きな破片が一つ、零れ落ちた。

「
」
咆哮、人間の声帯で吼えた全力。

直に私の顔面すら覆われ、そこから三つ目が覗く。続々と背中から生え出る腕、目の前の女性型と比べても太く大きい。こうして並べれば違いは明確、そして私は構築された口を大きく開けながら全力で目の前の顔を殴り付けた。

ゴッ！ と空気の歪む音、それから私を掴んでいた女の体が後方へと吹き飛ぶ。奴の拘束から逃れた私は地面に両足を着き、ズン！ とアスファルトが沈む。着地と同時に私は踏み込み、今しがた吹き飛んだ女性型の追撃に移った。

女性型は両足で地面を踏み締めながら勢いを殺し、ガリガリと道路の上を滑って行く。そして再び飛び込んで来た私を迎え討つ為、細長い六本の腕を並べる。

力比べのつもりか？

カパツ、と私の口が開く。そして勢いそのままに激突した私と女性型は、そのまま六本の腕を正面から組んだ。加速した勢いのある私に押された女性型は再び道路の表面を削りながら後方へと押し込まれる。乗り捨てられた車や標識などを巻き込みながら私は女性型を奥へ奥へと更に追いやった。震えた細い六本の腕は徐々に後退し、触れ合いのような程に接近した顔を見つめながら私は吼えた。

「そんな細腕で、オレに敵うワケねエだ口オがアツ！」

歪な声が口から飛び出した。

継ぎ接ぎだらけの声帯、複数の人間が一変に喋った様な声だった。ゾンビ形態と人間形態の境目が曖昧となる——成程、ならばゾンビ形態で人間形態の真似事が出来るのもまた必然。

完全に押し負けた女性型の体が後方へと反り、私は右足で女性型の腹部を強かに蹴り

飛ばす。ズン！ と重々しい音が鳴り響き、女性型は後方の建物に突っ込んだ。支柱を破壊して建物の背中側から飛び出した女性型はそのまま体を折り曲げながら六本の腕を地面に擦り付けて減速、もうもうと立ち上る砂塵の奥にいる私を見つめる。

するとその砂塵の向こう側から白い光がカツと瞬いた。

——消し飛ば

収束する極光、群衆を消滅させる破壊の光。

私の顔面が反動で後ろに押し出され、口元から眩い光が照射される。私の両足がズン！ と半ばまで沈み込み、凄まじい光と熱風が周囲を覆った。砂塵を切り裂いて飛来した光は今しがた女性型がぶち抜いた建物を溶け落し、向こう側で私を見ていた女性型の胸元を捉える。そして奴の体を貫通した光は遙か遠くの山々すら貫通、街の一角を直線状に文字通り「消し飛ばす」。

極光と爆裂、熱射跡から火柱が立ち上り、世界が炎に包まれた。爆風が私の肌を撫で全身から凄まじい量の蒸気が立ち上った。地面に接する私の足がジュウと音を立てる。

「ア、カ、ササツ、サン」

果たして、奴は無事だった。破裂した胴体、左右に割れて風船のように散り散りとなった癖にポコポコと体が膨らんで再生する。一瞬で顔面が象られ、その口から私の名を呼ぶ声。溶け堕ちた建物群の中から這い出る奴は完全に人間をやめている。

なんてしづとい奴だ——そう思った瞬間奴の口に極光が宿った。

驚きに硬直するよりも早く、奴の極光がピンポイントで私の顔を捉える。幸い斜めに射出されたそれは街に直撃する事無く空へと伸びた。危なかった、このまま直射されていれば美香達に当たってしまったかもしれない。

直撃を許した私の顔面はドパン！ と溶け落ち、視界がブラックアウト。一拍遅れて周囲が炎に包まれる。避ける余地などなかった、狙われた瞬間に飛んで来る不可避の光、風よりも速く、弾丸より疾い。

ああそうだよな、私が使えらんだ——当然コイツも使えるだろう。

爆音と共に消し飛んだ頭部が一瞬で再生する、三つ目がギョロリと女性型を捉え浮足立った両足を地面に突き立てる。私は視界が戻るや否や立ち上る火柱を突っ切って女性型に掴みかかった。伸びて来た腕を払い除け、そのまま奴の首を掴む。

奴の腕もまたぐにゆりと歪に折れ曲がり私の首を捉えた。だが首を掴まれたからなんだ、コイツの非力では私の首をへし折る事は出来ない。

——このまま至近距離で塵一つ残さず消してやる。

そう思つて大口を開けた瞬間、奴も全く同じタイミングで極光を口に含む。考える事は同じだった、そう思考した次の瞬間には全く同じ極光が互いの体を貫いた。

再び轟音と共に炎の柱が聳え立つ。凄まじい熱に体が溶け落ち、今度は上半身と下半身が別々に吹き飛んだ。空へと伸びた二本の極光は莫大な熱量と共に大地を溶け落す。飛び散った体はしかし数秒もすれば上半身から下半身が生え出る。ゴキんと骨を鳴らした私は燃え盛る炎の中、ゆっくりと立ち上がった女性型を見る。私も地面に這い蹲った状態から荒々しく腕を叩きつけて起き上がる。

胸の中は正に嵐の如く、憤怒ばかりが募っていく。

「ササ、ササツ、アキ、アキ」

「おおおオオオオオオツ！」

叫び、突貫。

格闘技のイロハなんて知らない、ただ本能に任せた野蛮な突撃。

私の突進に合わせて女性型も飛び出す、六本の腕を互いに広げた状態で激突。地面が衝撃で捲り上がり土砂の雨が降る。合わさった両手からマグマの様な熱、互いに赤熱した手のひらがジュウジュウと音を立てていた。体が蒸気を吹き上げている、熱射を行つたからではない、オーバーヒートは一度死んだことでリセットされている。

これは感情の昂ぶり、その現れだ。

張り付いた腕を無理矢理解き、大きく振りかぶってから女性型の顔面を殴りつける。バクン！ と肉を打つ音が響き、女性型が大きく仰け反った。同時に私の横つ面にも衝

撃、解いた腕が私の顔面を強かに打った。

けれどなんて事はない、この程度の攻撃は攻撃ですらない。

互いに三本の腕を組んだままの殴り合い、全力でぶん殴り、ぶん殴られ、視界が右へ左へ激しく揺れる。けれど同じ数だけこちらでも打撃を叩き込む、打ち込む度に踏ん張る足元が軋みを上げ空気が揺れた。

「ササ、ガッ！ あ、アキイっ！ ササ、ゴッ！ アキヒサ、サンツ！」

「ソんな奴、知らないって言ってるだろッ！」

「アキヒサ、アキヒササンツ!!」

「アアアああアアアアアッウルセエエんだよおおオオオッ!!」

一際強く殴り付ける、女性型の体がかくと仰け反って、しかし繋いだ三本の腕で無理矢理引き起こす。瞬間、ぐりんと半ばまで扶れた女の顔面が私を見た。そしてパカリと大口が開かれる。

収束する極光、熱射の前兆。

「ッ！」

私はその光を見た瞬間、三本の内の一本を女性型の口に叩き込んだ。一拍遅れて閃光が網膜を焼き尽くし私の右半身が消し飛ぶ。しかし口内で炸裂した爆発は女の上半身を吹き飛ばした。爆炎と共にクレーターが出来上がる、火柱に焼かれながらも残った女

の下半身がぼこぼここと再生を始めた。

私は炎に焼かれながらも女の断面に腕を叩きつける。ポコポコと風船のように膨れる肉の芽、それを片っ端から叩き潰した。下半身を殴り付ける、殴り付ける、殴り付ける、ぐちゃぐちゃの肉片になつて地面にこびり付いても手は止めない。再生した残り三本も加え塵も残さないとばかりに殴り付ける。

「燃え散レエエッ！」

トドメとばかりに六本の腕を全力で振り下ろす。まるでハンマーのような使い方、着撃した瞬間に地面が捲り上がり、追加で口から限界まで収束させた極光を放つ。自分の六本の腕諸共地面を焼却。特大の火柱と共に爆撃でもされたかのような衝撃、街の中心がべっこりと凹む。

火柱が立ち上り、その中から私の体が飛び出した。

熱射の反動が凄まじく腕というバランスを失った体が宙を舞った。そのまま地面に衝突し、全身から何も見えなくなる程の蒸気が立ち上った。パキパキと皮膚が零れる、表面が炭化していた。どうやらこの肉体でも耐え切れない程の熱量だったらしい。私の皮膚に接していたアスファルト舗装が黒ずむ、再生した手を地面に着くとジユウと音を立てた。真っ赤だ、赤黒かった肌は真紅のように変色していた。

体に力が入らない、蒸気を発していた体がどんどん消えて行く。まるで地面に溶けて

いくようにドロドロになって、私の中に還っていく。

そうして残ったのは「ジョン君」と呼ばれていた一人の人間、その模造品。

身体中がボロボロになって、中から赤黒い肌を覗かせる人形の様な少年。パキリと音がなった、そして額に張り付いていた『鍍金』がボロボロと剥がれ落ちる。音がなつて地面に落ちたそれは粉々に割れて砂になった。人間性がまた一つ、零れて消えて行つた。

「か、は、ハーツ、はーつ、ふ、はあ、ハッ！」

未だに体からは蒸気が立ち上っている。カラカラと音が鳴った、全身から人間性が零れ落ちていた。もう壊れかけ、殆ど継ぎ接ぎだらけの体。最初は指先が剥がれた程度だったのに、たった一度我を忘れただけで此処まで欠片が剥がれて消えた。

もう記憶が虫食い状態だ、自分の頭の中にあつた筈の思い出、記憶、人である証明が虚空に散っていく。顔、首、肩、腹、腕、指、腰、背中、太腿、足首、どこもかしこも剥がれている。そこから私の本能が、創られた私が顔を覗かせていた。

「あ、ササ、さ、さささっ」

「ハア、はっ……………」

立ち上る火柱、徐々に細くなつていくその中から真っ黒い影が這い出て来る。全身が炭化して誰なのかすら分からない。髪もなく、顔も無く、シルエツトから辛うじて女性

だと分かる程度。火に焼かれた彼女はぺた、ぺた、と緩やかに進む。這い蹲りながら、私目掛けて。

ゾンビ形態が解除されて、人間形態に戻ったのか。

その状態で炎に焼かれたのだ、もう助からない、コイツは死ぬ。

私はうつ伏せに倒れた状態でソイツを見る。彼女は倒れ伏した私の直ぐ傍まで這って進んで来た。

そして私の目と鼻の先までやって来ると、震えながら懸命に私に向かって手を伸ばし——指先に、微かに、優しく、その炭化した指先で触れた。

「あ——瑛久、さん」

パキリと音が鳴った。私ではない、彼女の体から鳴り響いた音だった。

そしてそれを最後に彼女——笹津涼子は動かなくなった。

「……………」

轟々と世界が燃えていた。

溶け落ちた街、抉れた地面、真っ赤に染まった空。蟬の音なんか少しも聞こえてこないし太陽も見えない。私はそんな世界の中で一人倒れ伏し、微かに触れた彼女の指先の

感触を記憶しながら呟いた。

「もう、居ないよ………笹津瑛久なんて人間は、どこにも」

そう言つて拳を握り込む。何故か酷く胸が痛んだ、罅割れた音が体から響く。私はただ『彼』の記憶を持っただけの怪物なのに。

ゆつくりと体を回転させて仰向けに転がった。熱気が酷く喉が張り付いていた、水なんか要らないはずなのに無性に水が飲みたかった。ケホツと肺の空気を吐き出す、熱気で歪む視界、手をゆつくりと空に伸ばせばパラパラと破片が落ちる。

指先から手首まで、ボロボロになった手のひら。もう人間の皮膚に見える部分は半分程しかない。随分と失つてしまった、そう思った。

歪んだ視界に誰かの影が見える。ゆつくりと視線を横に倒せば血相を変えて駆け寄つて来るセツナと美香が見えた。燃え盛る街の中、必死に駆けてくる二人。私は彼女達が無事だった事に内心胸を撫で下ろし、少しだけ口の端が上がった。

けれど、ああ、どんな顔で彼女達に逢えば良いか分からない。

二人は炎の中を突つ切る為に水を被ったのか、髪が僅かに濡れていた。

「ジョン君——じゃない、ジョンさん!」

「うわっ、ちよ、これどうすれば良いの!? 凄いボロボロなんだけど!」

二人とも顔が煤で汚れている。しかし怪我は無いのだろうか? 特に美香なんかは

思い切り横合いから殴り付けられていたのに。セツナは私に触れようとして、余りの熱さに手を引つ込める。美香が「セツナさん、水、水です!」とリュックサックからペットボトルを引つ張り出す。キャップを空けて私に中身の水をぶちまけると、皮膚に触れた水が音を立てて蒸発した。

「ジョンさん、ジョンさん!?! 生きていますよね? 死んでいませんよね!?!」

「ジョン君、しつかり、傷は浅いぞ!」

「……………いえ、コレ……………結構、深……………」

セツナの言葉に思わず言葉が出る。私とセツナ、美香の三人分の飲み水を全て私に振り掛ける。端から蒸発してしまう程の熱だったけれど、調達してきた分も含めて五、六本ほど振りかけると水は蒸発せず私の体を伝った。

「ずぶ濡れになった私を確認した美香はペットボトルを投げ捨てて私の頬に手を当てる。」

「美香ちゃん、急いで此処を離れよう、火の勢いが強まってる!」

「分かりました——ジョンさん、余力があれば掴まって下さい!」

三人分のぺちゃんこになったリュックサックをセツナが抱えて、美香が私を負ぶさる。彼女が殴り飛ばされた時はゾツとしたけれど、どうやら大事なことがなかった様だった。だらんと垂れさがった私の両腕は無理矢理彼女の首元へと回される。

そしてセツナが先導し私達は家へと戻る道を駆ける。炎の合間を潜り抜けながら、私は彼女の背に深く体を預けた。

「……色々言いたい事はありますが、ジョンさん、けれど今は聞きません」

私を背負った彼女がそう呟いた。私は半目のまま彼女の横顔を眺め、小さく「ごめん」と呟く。

彼女から恐れれの感情は感じ取れなかった、それどころか先導するセツナさえも私を嫌悪せず、軽蔑せず、失望せず、今まで通り——「人間のよう」に見ていた。

私の恐れていた事など何一つ存在しなかった。

先を行くセツナが叫ぶ、こっちは火が無いよと。美香は頷きながら私を背負い直し、強く地面を蹴った。揺れる視界の中で私の頬から破片が零れる、けれどももう恐ろしくはなかった。

「帰ったら色々教えて下さいね、全部、約束ですよ」

「……ええ……約束、します」

私は人間ではないけれど、ただの怪物だけれど。

彼女の背に体を預けたその時だけは自分が怪物である事を忘れられた。

パキリと欠片が零れた。

欠片は宙に砕けて消えた。

これが全て碎けて人の記憶が無くなった時、私はどうなるのだろう。そう思った。視界の隅に、倒れ伏したまま動かない怪物の姿が見えた。